

ホッとアート プレゼント

病児Q O L 向上・病院支援コーディネート事業

— HOT もっとプレゼント 2010 —

報 告 書

2010 年度版

HOT もっとプレゼント 2010 推進プロジェクト

特定非営利活動法人 子どもNPO・子ども劇場全国センター

ホッとアートプレゼントは
子どもの文化芸術体験に精通した
経験豊かな地域コーディネーターが
病院のみなさまの多様なニーズをうかがい
子どもと親子の目を輝かせる作品を
ベストマッチでお届けするプロジェクトです。

私たちには、一つひとつの「病院」が
子どもの命を守る小宇宙のように思えます。

緻密なケアを求められる看護師チーム
重責を担うドクター
子どもと家族のところに寄り添うSW、CLS、保育士
成長発達を支援する先生方、訓練師のみなさん
表には見えない病院運営を担う事務職の方々
多様な役割を担うスタッフのみなさんと
付きそう保護者のみなさんが、
病気と向き合い、療養し、回復を目指す
子ども一人ひとりを真ん中にした
「病院コミュニティ」なのだと
感じています。

私たちは
全国にネットワークを張り巡らし
子どもたちの命のエネルギーを探し求めてきます。

それは
子どものこころの奥底に届く
今この瞬間のいのちの輝きを共に喜び合える
「病院コミュニティ」のための
珠玉のファンタジーです。

病院コミュニティのためのファンタジーに輝きを与えるのは
プログラムに参加した一人ひとりの笑顔と、「感じる」スピリットです。

どうぞ、この瞬間、この時間を
子どもとご家族と共に楽しんでください。
それが私たちの願いです。

<http://hotart-present.jp>

目 次

ごあいさつ	4
病児 QOL 向上・病院支援コーディネート事業 目的と概要	6
推進プロジェクト体制	7
 I 「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」 扉	9
「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」目的・方法・結果	10
I - 1 【フェイスシート】	12
I - 2 【スタッフが感じるニーズ】／【中高生に関するニーズ】	18
【行事・プログラムに関するニーズ】	19
I - 2 - 3 【病児の QOL に関するニーズ】	25
I - 2 - 4 【スタッフ体制に関するニーズ】	26
I - 2 - 5 【病児と家族関係に関するニーズ】	27
I - 2 - 6 【子ども同士の関係に関するニーズ】	28
I - 2 - 7 【病児と医療スタッフの関係に関するニーズ】	29
I - 2 - 8 【病院外部からの支援に関するニーズ】	30
I - 3 【外部支援の 1 ケースに対する医療スタッフの評価】	31
 II 「HOT もっとプレゼント 2010」 扉	33
事業コンセプト／ホッとアートプレゼントとは	34
HOT もっとプレゼントガイドライン 2010 年版	35
2010 年度 実施病院……プログラム / コーディネート団体 一覧	36
 II - 1 プログラムタイプ B 実施結果 扉	37
ケース 1. 院内学級が夏休み中の中学生を対象とした創作プログラム	38
ケース 2. 入院病児に付き添う親を対象としたレスパイトケアプログラム	40
ケース 3. 病院併設特別支援学級の授業とした創作プログラム	42
ケース 4. つきそうお母さんのリフレッシュプログラム	44
ケース 5. 入院児とその家族を対象にした絵本の展示とワークショップ	46
 II - 2 プログラムタイプ A 実施結果 扉	49
タイプ A・2 年間の「ホッとアートプレゼント」実施アンケート比較分析	50
1. 島根大学医学部附属病院	54
2. あいち小児保健医療総合センター	56
3. 和歌山県立医科大学附属病院	58
4. 金沢大学附属病院	60
5. 宮崎大学医学部附属病院	62

6. 地方独立行政法人宮城県立こども病院	64
7. 独立行政法人国立病院機構舞鶴医療センター	66
8. 一宮市立市民病院	68
9. 国立国際医療研究センター国府台病院	70
10. 東京大学医学部附属病院	72
11. 山口大学医学部附属病院	74
12. 独立行政法人 国立成育医療研究センター	76
13. 北海道立子ども総合医療・療育センター	78
14. 兵庫医科大学病院	80
15. 国立病院機構福岡病院	82
 Ⅱ - 3 プログラムタイプ A 実施病院ご担当者へのアンケート結果 扉	85
1. 島根大学医学部附属病院	86
2. あいち小児保健医療総合センター	87
3. 和歌山県立医科大学附属病院	88
4. 金沢大学附属病院	89
5. 宮崎大学医学部附属病院	90
6. 地方独立行政法人宮城県立こども病院	91
7. 独立行政法人国立病院機構舞鶴医療センター	92
8. 一宮市立市民病院	93
9. 国立国際医療研究センター国府台病院	94
10. 東京大学医学部附属病院	95
11. 山口大学医学部附属病院	96
12. 独立行政法人 国立成育医療研究センター	97
13. 北海道立子ども総合医療・療育センター	98
14. 兵庫医科大学病院	99
15. 国立病院機構福岡病院	100
参加する保護者・関係者にプロジェクトを紹介するリーフレット	101
小児病棟に笑顔を贈る「ホッとアートプレゼント」紹介リーフ	102
 Ⅲ 病児 QOL 向上・病院支援コーディネート事業 考察とまとめ 扉	103
参考文献	108
 Ⅳ 資料 扉	109
アンケート用紙（抜粋）	110
奥付	116

ご あ い さ つ

私たちは、地域社会で子どもの健全な成長・発達を支援し、また子育てをする保護者を支援する NPO の全国的なネットワーク活動の一環として、小児病棟に入院する病児、保護者、医療者を応援する取り組み「小児病棟に笑顔を届けるホッとアートプレゼント」を 2008 年度より継続的に実施してきました。

はじめは長期に入院している子どもたちに、ほんのひと時でも楽しい時間を過ごしてもらえたらという思いからスタートしたプロジェクトであり、「病院」という特殊な場が果たして受け入れ可能なのか不安な気持ちで、それぞれのコーディネーターが伝手を辿りながら実施を重ねてきました。当然デリケートな調整でしたが、病院ご関係者の理解を得て回を重ねてきました。「病院」という安全と安心を絶対条件とする場への外部からのアプローチであることを幾度となく吟味し、小児医療に関わる専門家の皆様にアドバイスをいただき、医療現場に生じるであろう負担を最小限にできることを欠かせない条件としてきました。プロフェッショナルによる公演作品の質、コーディネーターの育成、全体的な仕組みのあり方など、細心の注意を払ってブラッシュアップしてきました。結果、3 年間実施してきた 20 の病棟から、継続的な実施を強く望まれています。プロジェクトを通じすべての病院を訪問してきた正直な感想としては、当初の予測を超え、多岐にわたるニーズも感じてきました。

また調査に先立つアセスメントからは、こうした小児医療現場のニーズの背景には、入院病児の QOL 向上という、医療技術の進化に伴う小児医療の制度的な課題もあるのではないか？ という問いも生じてきました。私たち地域で子どもの育ちを支援する NPO は、顔が見える病棟だけの心配をすればよいのか、あるいは小児医療を支える専門家と小児医療システム全体が、制度と現実の狭間で過大な負担を負っているのであれば、もう少し広範な仕組み作りを目指すべきではないか、見極めたいと考え、今年度の助成申請「地域社会から小児病棟を支援する」必要性和可能性という少々大胆な視点からテーマを設定しました。

本調査は企画時から、なぜか国内の小児科病棟を網羅するリストやデータを見いだすことができない中、唯一、代表性を担保できそうな 508 の小児科専門医研修指定施設に注目してまいりました。幸い日本小児科学会様のご理解を得て、名義後援という形でリストをご提供いただくことができたことは、望外の支援を得られたことであり、ご関係者のみなさまに心よりお礼を申し上げる次第です。

結果、「入院病児の QOL 向上に関する、病棟ニーズ」について、本調査では約半数の施設からご回答を頂きました。分析結果を要約すれば、現状維持にギリギリのスタッフ体制で、病児の QOL に加え、付き添う親・家族へのケアは現状では不足だとスタッフの多くが感じており、内部努力で改善するために割く時間も人も資金も不足しており、外部からの支援ニーズを持っても、それを実現するための調整や采配に労力を割くこと自体が困難だという小児病棟の姿が浮かび上がってきました。もちろん個々の小児病棟によっても、ケースによっても幅のある現状や課題解決策は、軽々に判断すべきではないと考えます。今回の調査結果自体、制度の高い検証を待たなくてはならないでしょう。この前置きを大前提として申し上げれば、私たちは次のような提案を広く呼びかけたいと思います。

すでに少なくない小児病院施設において、長年にわたり多様なボランティア活動が地道に行われ、病院との連携のための道筋が模索され、着実な成果を上げています。ぜひ、入院生活を送る子どものQOLと家族へのケアを充実させる指針を明確にし、それを実現するための社会制度と、補完する民間支援や連携の仕組みについて、広く国民が関心を抱き理解できるための継続的多様なアプローチが必要だと考えます。また医療スタッフの充実と共に、各施設で外部支援との積極的な調整を果たすことができるボランティアコーディネーターの配置制度確立が急がれます。全ての子どもたちが未来に希望をもち、安心して子ども産み育てていくことができる社会づくりに、入院病児QOLの充実、国家のセーフティネットとして不可欠の要素であり、全ての親の願いであり、今この瞬間を生きている子どもにとって、不可欠の要件だと考えます。厳しい経済状況が今後も続くであろう事を想定すれば、医療専門機関と市民NPOの有機的な連携を可能にする仕組み作りには、慎重かつ大胆なアプローチが求められます。今後も前例にとらわれない連携のために積極的な協力をお願いします。

最後に、クオリティ・オブ・ライフ(QOL)については、様々難しい定義も必要だと思うのですが、これまでの3年間の「ホットアートプレゼント」はもちろん、今年度からスタートした「地域リソースを活用したプログラム」においても、「笑顔」は存外わかりやすい指標だと感じています。また言うまでもありませんが、どれだけ可能性のあるプログラムであっても、ボランティアは医療の専門家の判断があつてのことで、病院運営にとっても、子どもの病状・病態によっても、優先すべきことが山ほどあることは承知しています。変化し続ける医療現場から手の届くところに、私たちはニーズに応じられる仕組みを準備していこうというのがこのプロジェクトだと考えます。子どもと保護者、そして医療スタッフのニーズがあれば、地域のリソースと連携しコーディネートし、届けることができる。そんな仕組みが全ての小児医療現場に実現し、病気になっても支えあえる社会を夢に見る人々は大勢いるのではないかと思います。

私たちは医療の専門家でもなく、また患者当事者でもありません。あくまでも医療の現場に対する第三者として、子どもの権利を保障するために必要な手立てとして、社会的な合意形成を導くための実践的・実証的な活動をこれからも継続できればと願っています。

最後になりましたが、本事業の主意を汲み取りご支援いただいた独立行政法人福祉医療機構ご関係者のみなさまに深く感謝申し上げます。また推進プロジェクト委員のみなさまには様々なご支援を頂き、新たなチャレンジを着実な一歩とできたことに感謝いたします。

今この瞬間も、東日本大震災の被災地ではギリギリの復旧活動が官民挙げて取り組まれています。このプロジェクトの一員「せんだい杜の子ども劇場」も震災直後から2つの児童館で被災者を受け入れ、今現在も不休の活動を続けています。私たちは、考えられないほどの負荷を背負いながら一緒に前を向こうとしている子どもたちに、このネットワークが3年間鍛えてきた「ホットアートプレゼント」を届ける準備を始めました。みなさまの一段のご理解とご支援をお願いする次第です。

2011年3月

「HOT もっとプレゼント2010」推進プロジェクト委員長

特定非営利活動法人 子どもNPO・子ども劇場全国センター代表理事 稲垣 秀一

—HOT もっとプレゼント 2010—

病児 QOL 向上・病院支援コーディネート事業 目的と概要

■ 事業前提

(1) 子どもにかかわる NPO 団体のネットワークでは、2008 年度より地域の小児病棟へ文化的なイベントプログラム提供を行い、小児医療施設を対象としたイベントの妥当性と支援コーディネートの可能性を検証してきた。当該施設からは継続的実施を強く求められていた。一方、平成 17 年度厚生労働省・患者調査（*）によれば、0～14 歳までの入院患者数は 1 日推計 33,000 人、19 歳まで含めると 4 万人程度とされているが、ネットワークが検証・整備してきた資源がはたして全国的なニーズであるのか、また今後広く普及すべきかを判断する必要がある。こうした小児（0～14 歳）、あるいは子ども（19 歳まで）の入院生活を送る子どもの QOL（Quality of Life. 以下 QOL と表記／※1）に関する外部支援ニーズ調査は見当たらず、さらにボランティアコーディネートに関する研究も、その必要性を指摘しているが、行動指針を得るには具体性に乏しかった。

（* 患者調査／<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/05/index.html>）

■ 事業目的

(1) 小児病棟で生活する子どもの QOL に関する現状と、子どもの病院生活を豊かにするために病棟スタッフが感じていることなどについて把握することを目的とし、得られた実態や病棟スタッフのニーズに沿ったボランティアコーディネートの方法や支援プログラムなどについて検討する。

(2) 上記ニーズ調査と平行し、積極的な活動で成果を挙げている小児病院ボランティア活動も参考にしながら、地域ボランティアコーディネートによるプログラムを実施し、入院病児の QOL を高めるための医療スタッフのニーズに応えられるか検証する。またコーディネーターの育成と、ネットワークの品質を維持管理し、普及するための運用可能性を検証する。

■ 事業概要（方法）

① 本事業は、二つのアプローチを同時進行した。

Ⅰ．ニーズ調査「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」（p9～）

全国の小児病棟における外部からの支援ニーズを把握するため、医療スタッフ（医師・看護師・保育士等）が感じている「入院病児の QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」を実施。

……47 道府県の小児科専門研修施設 508 箇所を対象にしたアンケート調査を行いその結果を分析した。

- 倫理的配慮 調査には患児のプライバシーに関する項目を含まず、知り得た情報は、本事業を推進する目的にのみ利用し、また調査結果は医療機関名・個人を特定できない形で公表することをアンケート用紙に明示した。

Ⅱ．プログラム実施検証（「HOT もっとプレゼント 2010」）（p33～）

全国 15 地域（北海道～九州）において、個々の地域を拠点に活動するプレゼントコーディネーター（NPO）が、小児病棟医療スタッフにヒアリングを行い、施設ニーズに沿った入院病児の QOL を向上する目的でプログラムを実施し、その成果と課題を 2009 年度対象者アンケートの比較検証と、実施者自身のケースリポート及び、プログラム実施病院担当者へのヒアリングにより検証した。

なお、実施するプログラムは二つのタイプとした。

【タイプ A】 … ホットアートプレゼント（※2）（pp101-102）

【タイプ B】 … 日常的に継続可能な地域リソースを活用したプログラム（pp37-47）

推進プロジェクト体制（事業に際し、事業を推進するためのプロジェクト委員会を前年より継続再編した）

（2010年12月時点）

研究委員会

■アドバイザー

- 柳澤 正義 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所所長 / 国立成育医療センター名誉総長
- 伊藤 雅治 全国社会保険協会連合会理事長 / 健康日本21推進国民会議・健やか親子21推進協議会会長
- 坂本 憲枝 日本医療機能評価機構評価委員・人間ドック施設機能評価委員 / 消費生活アドバイザー

■ワーキンググループ（研究班）

- 稲垣 秀一 / プロジェクト委員長 ……………（特）子どもNPO・子ども劇場全国センター 代表理事
- 中村 雪江 / 運営責任者（特）子どもNPO・子ども劇場全国センター 専務理事
- 半田 勝久 東京成徳大学子ども学部子ども学科 准教授
- 岡田 泰子（特）子ども劇場千葉県センター 理事長
- 大森 智恵子（特）子ども劇場千葉県センター 事務局長
- 竹内 洋江（特）名古屋おやこセンター 理事長
- 高宮 正貴（特）子どもNPO・子ども劇場全国センター 理事
- 新 有里香 東京成徳大学子ども学部子ども学科
- 木村 沙織 東京成徳大学子ども学部子ども学科

■監査

- 古賀 圭子（特）子どもNPO・子ども劇場全国センター 監事

コーディネーター委員会（地域プログラム実施班）

- 藤原 市子 特定非営利活動法人 こども・コムステーション・いしかり 理事長 ……………（北海道）
- 斎藤 純子 特定非営利活動法人 せんだい杜の子ども劇場 代表理事 ……………（宮城県）
- 綿貫 のぼら 特定非営利活動法人 子ども劇場千葉県センター 副理事長 ……………（千葉県）
- 松野 美子 特定非営利活動法人 名古屋おやこセンター 理事 ……………（愛知県）
- 水野 裕子 特定非営利活動法人 子どもと文化の森 専務理事 ……………（愛知県）
- 高木 眞理子 子ども夢フォーラム 代表 ……………（石川県）
- 福田 美和子 特定非営利活動法人 京都子どもセンター 理事 ……………（京都府）
- 米川 綾子 特定非営利活動法人 兵庫県子ども文化振興協会 代表理事 ……………（兵庫県）
- 岡本 瑞子 特定非営利活動法人 子どもNPO和歌山県センター 理事長 ……………（和歌山県）
- 中田 朋子 特定非営利活動法人 しまね子どもセンター 事務局長 ……………（島根県）
- 三好 美喜子 特定非営利活動法人 子ども劇場山口県センター 理事長 ……………（山口県）
- 高宮 由美子 特定非営利活動法人 子ども文化コミュニティ 代表理事 ……………（福岡県）
- 片野坂 千鶴子 特定非営利活動法人 みやざき子ども文化センター 代表理事 ……………（宮崎県）

（※1）：本事業における「子どものQOL（Quality of Life）」は、「子どもの主観的な心身両面からの健康度・生活全体の満足度」（Ravens & Bullinger, 1998 Kid-KINDL 翻訳：古荘純一 2007）としている定義を参照しました。子どもを対象とした「QOL」の尺度は、「①身体的健康／②情緒的ウェル・ビーイング（気分・感情）／③自尊感情／④家族／⑤友達／⑥学校生活」の、6領域があげられます。

（※2）：「ホッとアートプレゼント」／2008～2009年度 独立行政法人福祉医療機構の助成により行った事業です。小児病棟の病児・保護者・医療スタッフに、人形劇、クラウン、マジック、落語などプロパフォーマンスをコーディネートし、「ホッとできる笑顔の時間」を贈り届けました。病棟に笑顔の時間を届けたことで、様々な効果が医療関係者から報告され継続を求められています。2年間28病院での実施評価から、病院で生活する子どものQOLをポジティブに維持することは、子ども・保護者のみならず、小児医療現場の標準的なニーズであると推測されます。この2年間の実施検証から、病院で生活する子どものQOL向上に資するリソースをコーディネートし、ネットワーク体制を維持継続するためには、広範な小児病棟現状と、子どもの病院生活を豊かにするために病棟スタッフが感じていることなどについて把握する調査が必要になってきていると考えられます。今年度はこうした状況を踏まえ「HOT もっとプレゼント」事業に展開しています。新しい取り組みとして小児病棟における「母親支援」「子育て支援」に関するニーズに対応するプログラムが実施されました。

【参照：ホッとアートプレゼント実施報告書 2009年度版 pp10-49・pp51-78 / <http://kodomo-npo.org/>】



I

「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」

アンケート配布：508 小児科専門医研修指定施設

配布病棟数（見込み数） 1129 病棟分

日本小児総合医療施設協議会施設 19 施設へは該当病棟分、ほか各施設に 2 病棟分を発送

配布アンケート数（見込み数） 3387 通

回答対象：各病棟ごとに、病棟医長 -1 名 / 病棟師長 -1 名 / ケアスタッフ -1 名に回答を依頼

調査期間：2010 年 11 月 5 日発送…×切 2010 年 11 月末日

【回収結果】×切後 2011 年 1 月までに回答があった数通を含めた

回答総数：887 通（315 病棟、233 施設）

回答施設 / 配布施設数比 46%

「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」結果

調査目的

全国の小児病棟において、入院している病児の QOL 向上に関し、医師、看護師、保育士などそれぞれの専門職がどのようなニーズを感じているのか把握することを目的に、調査を行った。

調査方法

小児病棟に入院する病児の QOL 向上に関して、国内の小児病棟にかかわる専門スタッフから回答を得、なおかつ代表性を担保するために、調査対象の母集団を小児科専門医研修指定施設小児科病棟とした。また本調査に先立つアセスメントから「ホッとアートプレゼント」を実施してきた施設の医師、看護師にヒアリングを行い、調査項目を精査し、また各施設でのプレアンケートにご協力いただき、設問に修正と見直しを行った。その後、日本小児科学会に調査主旨とアンケートサンプル及び実施体制など吟味していただき、結果、508 小児科専門医研修指定施設の住所シールのご提供を頂いた。宛先は個人情報を考慮し、各施設の「小児科指導責任医」宛とした。本調査依頼状及び、複数病棟分のアンケートセットを郵送にて、2010 年 11 月 5 日発送し、〆切は、2010 年 11 月末日とした。

配布対象は、同じ病院であっても病棟により状況が異なる事を想定し、基本は各施設に 2 病棟分 × 3 名分を送り、病棟数が複数あることが分かっている日本小児総合医療施設協議会施設 19 施設には、インターネットでわかる範囲で該当病棟数分を発送した。(アンケート用紙 / pp.110-112)

配布数

配布 508 施設 …… 配布病棟数(見込み数) 1129 病棟分

(※小児にかかわる病棟数不明のため各施設に 2 病棟分を、
また、日本小児総合医療施設協議会施設 19 施設には、
インターネットでわかる範囲で複数病棟分を発送した。)

配布アンケート数(見込み数) 3387 通 …※ 各病棟には、以下 3 名にアンケートを依頼した
病棟医長 -1 名 / 病棟師長 -1 名 / ケアスタッフ -1 名

回収結果

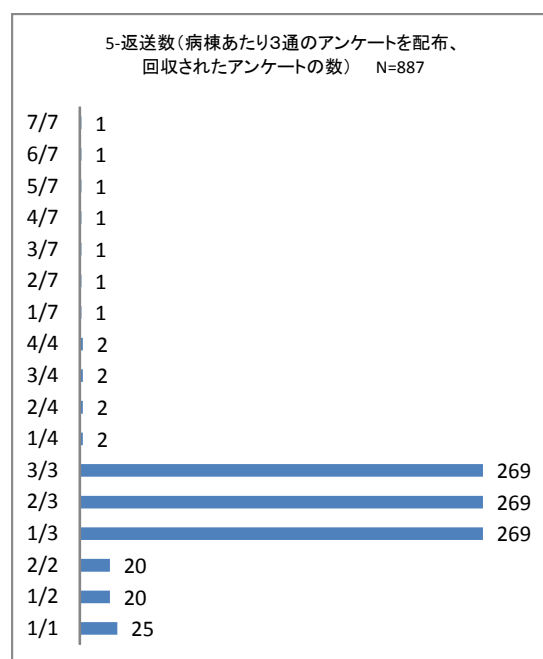
〆切後 2011 年 1 月までに回答があった数通を含めた

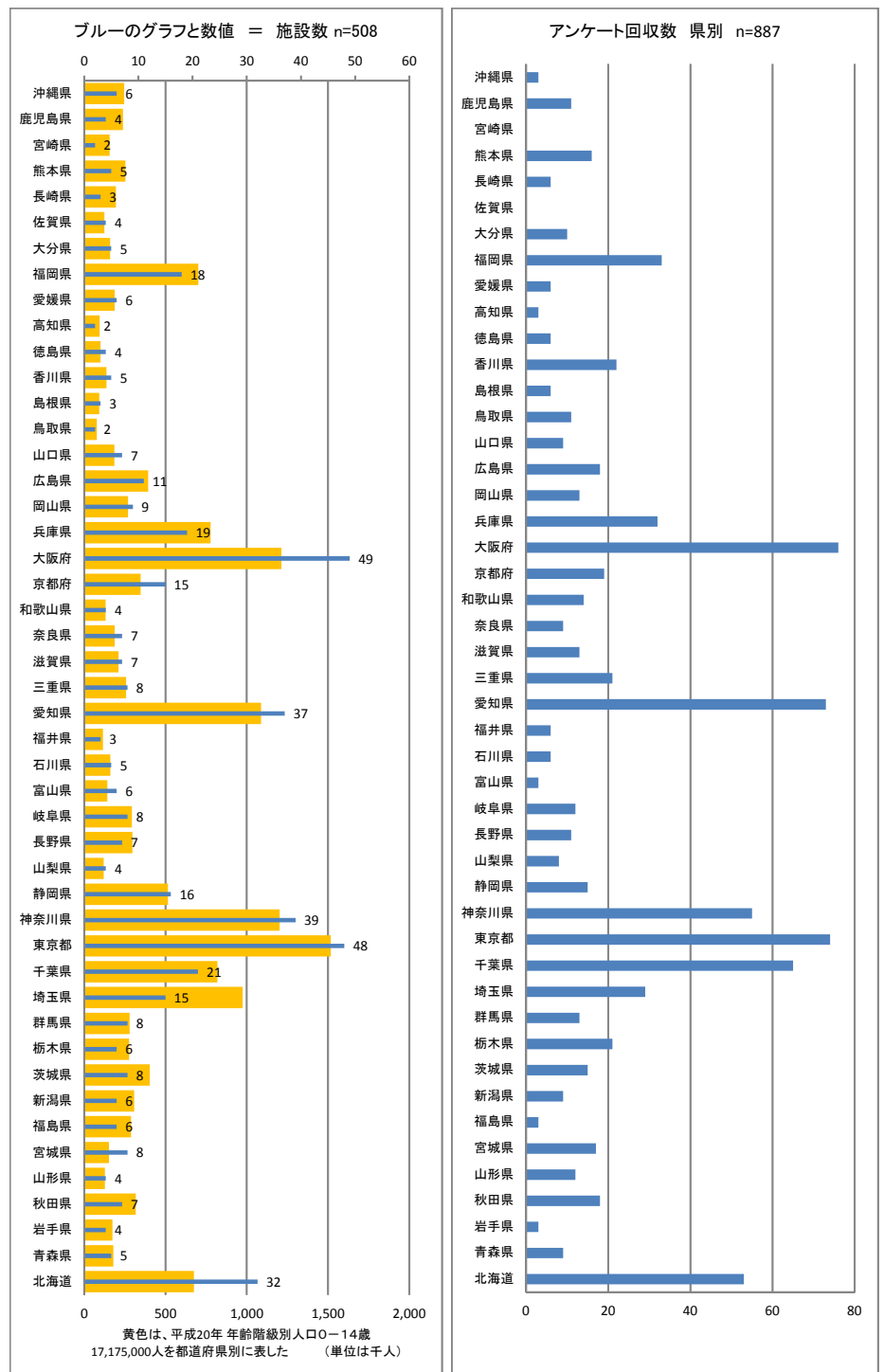
回答総数 :887 通 (315 病棟、233 施設)

回答施設 / 配布施設数比 46% であった。

■アンケートの返送は、病棟ごとに回答用紙をまとめて返送していただいた。個票には返送された封筒ごとに共通の「病棟コード」と「シリアルNo」、および同封された回答の総数がわかるように分母と分子を与えた。(ex.315-887-3/3)

その分数コードを集計すると、一病棟ごとに 3 通の回答があった病棟は、269 病棟。2 通が 20 病棟、1 通が 25 病棟、4 通が 2 病棟。また 7 通をまとめて返送されたところが 1 病棟であった。





- ① 上左のグラフ（ブルー）は、配布した施設数を都道府県別に集計したグラフ。参考に0-14歳の都道府県別人口バランスを黄色で示した。対象となる小児の人口と小児科医研修施設の数とは概ね対応していることがわかる。（※0-14歳の人口：平成20年・統計局データ）
- ② 上右のグラフは、回答数を都道府県別に集計したグラフ。この回答数は、施設数、病棟数ではない。（※日本小児総合医療施設協議会19施設には、公開されている病棟数分を配布し、他の589施設は小児病棟数が不明のため2病棟分を送付）
- ③ 508の研修施設は都道府県別で見ると、最小2施設から最大49施設までひらきがあり、配布バランスに比例して回答が得られた。
- ④ 以上から調査結果は、小児医療の地域性に関する代表性は得られると考える。

I -1【フェイスシート】

■分析にあたり、氏名を切り離し、コードNo.によって個票を管理した。個票からわかる属性は以下の項目である。

I -1-1【回答者】

Q 1.【回答者の職種】次の職種から選択 / 医師 看護師 保育士 相談員 その他

① 887 通の回答者の職種は、「医師」26%・233 人、「看護師」59%・525 人、「保育士」12%・105 人、「相談員」1%・3 人、「その他」2%・19 人であった。

② 医療専門外からの調査のため、記載事項について問い合わせができるよう記名欄を設けた。（記述は自由である旨記した）。結果、医師 199 人、看護師 335 人、保育士 82 人、相談員 1 人、その他 17 人、職種不明 1 人、計 635 名の方々から記名で回答頂いた。

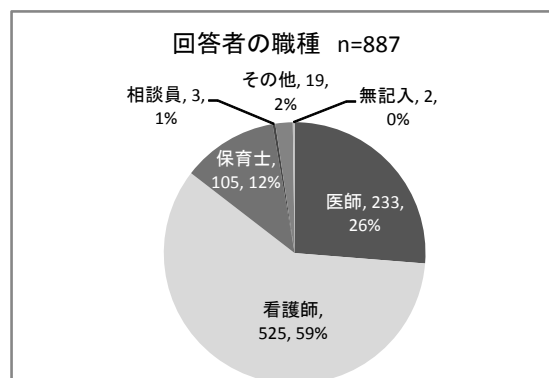
③ 記述された職名は施設により呼称が多様なため厳密ではないが、「医師」は、依頼通り病棟医長が多く、「看護師」のおおよそ半数は師長または師長に準ずるポジションであった。

④ 「相談員」3 人の職名は、「臨床心理士」「医療ソーシャルワーカー」「臨床児童相談員」であった。

⑤ 「その他」は、助産師、CLS、心理士、児童指導員、教諭などであった。

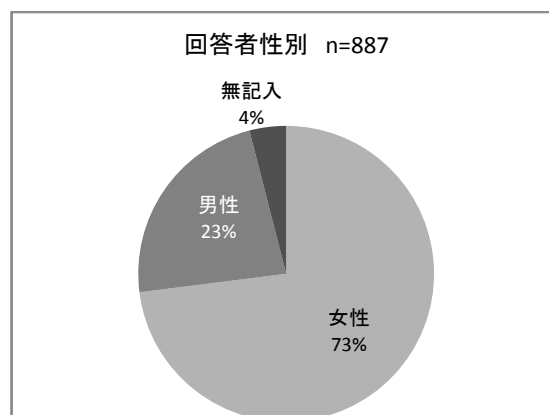
⑥ 「保育士」を選択した中に、HPS Japan（ホスピタルプレイスペシャリスト）1 人が含まれていた。

⑦ また、職名が「臨床心理士」であって、「相談員」「その他」を選択した回答が各 1 名ずついた。



Q 2.【回答者の性別】

① 回答者の性別は、女性 73%、男性 23% であった。



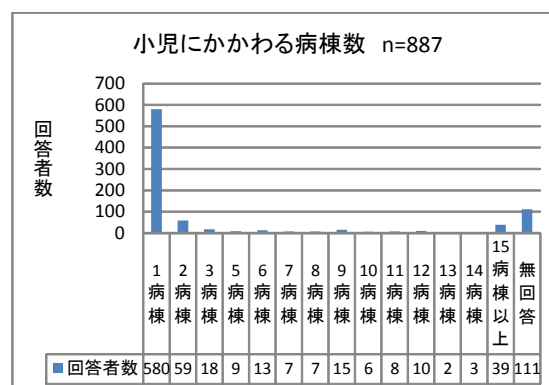
Q 3.【小児に直接関わる病棟名と関わる科名】

① 小児に関わる「科名」をきいたところ、看護師は、複数の診療科に関わっている場合が非常に多かった。

I -1-2【回答者が属する施設規模】

Q 4.【病棟の数】

① アンケートの送付にあたり、子どもの QOL を考える際、生活の場としての「病棟」によって環境が異なると考えられた。しかし、各施設における小児の病棟数が不明であったため、489 施設（日本小児総合医療施設協議会施設以外）には 2 病棟分を発送し、回答者の施設における小児に関わる病棟の数をたずねた。回答のあった 776 人の内、「1 病棟」が



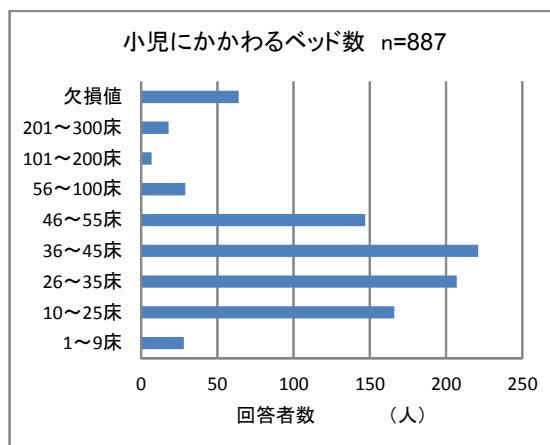
580人・74.7%、複数の小児病棟があるのは196人・25%であった。

② しかし、同施設の複数の回答者から異なる回答があったケースが205件、74施設でみられ、例えば「54病棟」などの回答は、施設全体の病棟数と思われた。また無回答も111件あった。「小児」が入院生活する場を「病棟」という分け方で把握できると考えたが、混合病棟などもあり、生活環境を把握する設問に工夫が必要である。

Q 5.【ベッド数（合計）】

① 「300床」以上の回答を個別に調べたところ、小児病棟以外や施設全体のベッド数が含まれていると思われ、欠損値として扱った。

② その上で、「回答者がかかわる小児のベッド数」は10床から55床までが全体の88%を占め、10床未満が3%で、最大は小児専門の施設における266床であった。これらの環境が、後半で分析する「入院している子どもたちのQOLに関わるニーズ」の背景にあることに注意したい。



I -1-3【スタッフ体制】

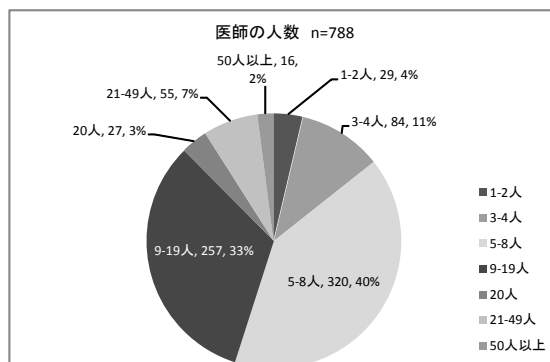
Q 6.【病棟内で児に関わる専門職の人数】…次の項目から選択

医師・看護師・保育士・チャイルドライフスペシャリスト・相談員・先生・ボランティア・その他

(数値は合計 / 週5日以上常勤者を基本として曖昧な場合は「約〇〇」と記入)

Q 6- 1.【医師】

① 病棟における「医師の人数」は、回答を小児入院医療管理料区分に対応する人数で分けた。配置基準は、①20人以上、②9人以上、③5人以上、④3人以上、⑤1人以上の区分となっている。回答は最も多かったのが「③5-8人」の40%、続いて「②9-19人」33%で合わせて7割を超えている。「5人」未満の合計は15%で、約9割の施設で小児科の医師は19人未満と推測される。

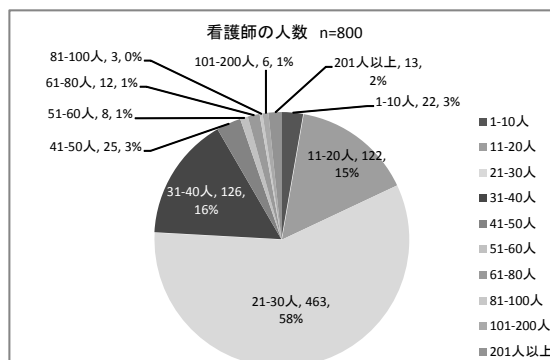


② 「ベッド数」とクロスしたが明確な関係性はみられない。

Q 6- 2.【看護師】

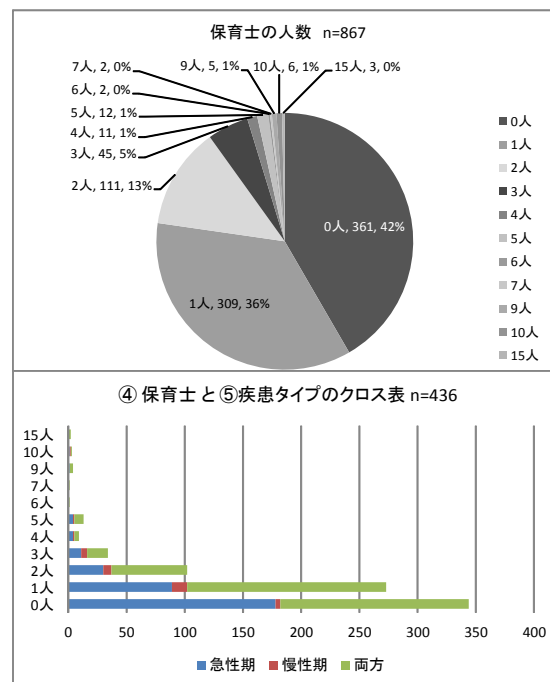
① 「看護師の人数」は「21～30人」が過半を占め463人・52%であった。その前後「11～20人」「31～40人」がそれぞれ1割強で、合わせて85%となった。

(※小児入院医療管理料区分では、患者「7人に対して1人」「10人に対して1人」「15人に対して1人」の“看護職”で、なおかつ「看護師」の割合が定められている)



Q 6-3.【保育士】

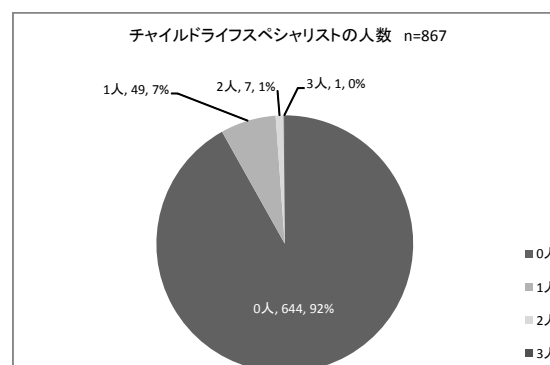
- ① 「保育士の人数」は、「0人」42%、「1人」36%、「2人」13%。6割弱の施設で一人以上配置されている。
- ② 入院管理料区分では入院病棟に対し、30㎡以上のプレイルーム設置と、1名以上の常勤がセットで加算要件となっている。ベッド数との連動性はなく複数の保育士を配置することは、経営面からは負担増となる。2人以上の回答は、複数の病棟に対しての数も含まれている。
- ③ 「病棟の疾患のタイプ（急性期・慢性期・両方）」とクロスすると、同じような比率で表れた。この結果から、急性期でも慢性期でも両方の患児がいる病棟でも、保育士のニーズは変わらないと思われる。



Q 6-4.【チャイルドライフスペシャリスト】

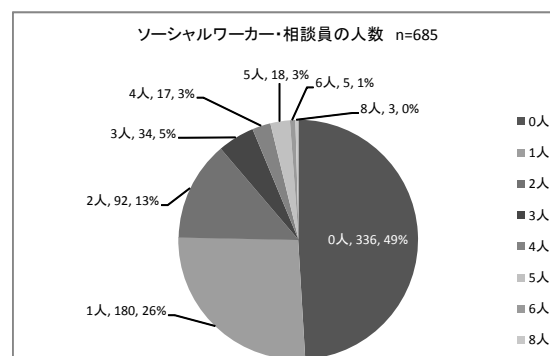
(以下、CLSと表記)

- ① CLSについては、病児のQOLにかかわる新たなケアワーカーとして項目に挙げた。「1人」と回答したのが49人、「2人」と回答したのが7人、「3人」が1人で、ベッド数とクロスしても関連性はみられなかった。
- ② なお、病棟保育士、ホスピタルプレイスペシャリストも同様の役割、機能を目指していると考えられ、今後の調査項目に入れる工夫が必要だと思われる。



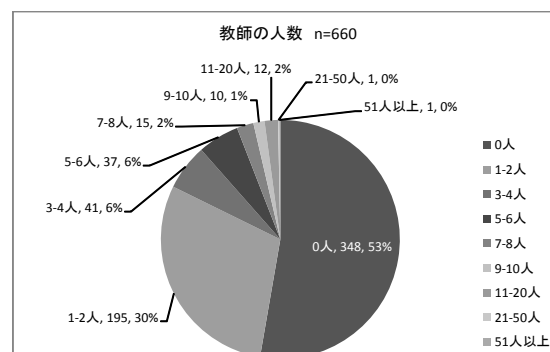
Q 6-5.【ソーシャルワーカー・相談員】

- ① 円グラフは無回答202人を除く685人の回答内訳。
- ② 全体でみるとソーシャルワーカーが1人以上いると回答したのは349人で、施設でみると184病棟、147施設で、調査対象508施設の約3割にソーシャルワーカーが配置されていることが分かった。



Q 6-7.【学校の先生・教師】

- ① 人数の記述があったのが660人。教師がいると回答したのが312人で、半数の施設に教師がいる。わずかながら、“必要に応じて教師がいる”と付記された回答があった。
- ② 続いて教師の在勤日数を尋ねたところ、週あたり「5日」が83.1%、続いて「3日」が11.2%、「4日」2.6%、「0日」2.2%、「2日」0.6%、「6日」0.3%であった。またこちらの回答にも「必要があるとき」などの記述があった。

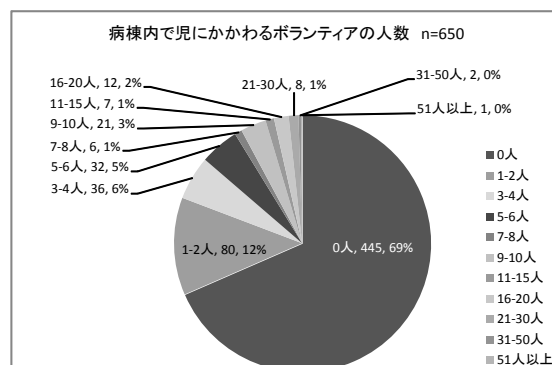


Q 6-8.【その他の児のケア・ワーカー】

- ① その他の児のケア・ワーカーについて、563 人中、92% がゼロと回答した。一方、「24 人」という回答が 1 件あり、その施設はベッド数 120 の重症心身障害児・者病棟であった。
- ② 以上から、小児の入院施設における主なケアワーカーは、これらの項目で網羅されると考えられる。

Q 6- 9.【ボランティア】

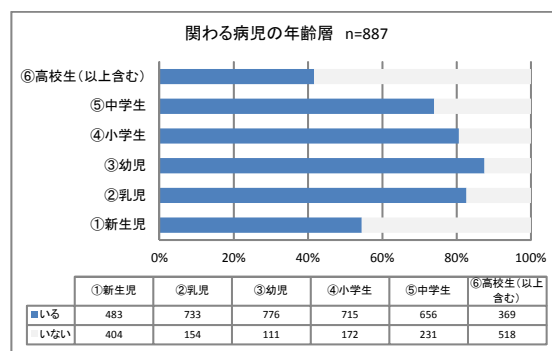
- ① 回答者の病棟内において「児に関わるボランティアの人数」を聞いたところ、665 人の有効回答があり、「毎日ではない」「週に 2 日」や「不定期で増減」、また時間の条件などが記されているものもあったが、条件は除いて集計した。
- ② 結果を多い順にみると「0 人」68%、「2 人」7%、「1 人」6%、「3 人」5%、「5 人」4%、「10 人」3%などで、さらに 11 人から最大 130 人までが 30 人いた。右の円グラフは煩瑣になるため、人数を階級化して表している。
- ③ なお、1 人以上のボランティアがいるという回答の全回答数に占める割合は 23% であった。また、病床数とボランティアの人数をクロスしてみたが、“病床数が多いとボランティアが多い”などの傾向はみられなかった。



I -1-4【対象となる入院児】

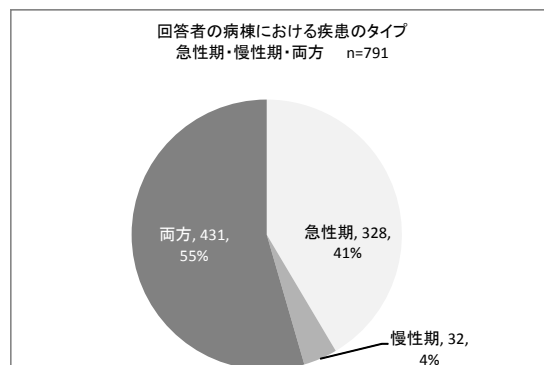
Q 7.【あなたが関わっている病児の年齢層は？】

- ① 「新生児」は 55%、「乳児」83%、「幼児」87%、「小学生」80%、「中学生」74%、「高校生（以上含む）」41%であった。（※医療上「小児」は 14 歳までで、制度も「小児」を対象としていると思われるが、4 割に高校生が入院している。）
- ② 約 4 割強の施設には新生児から高校生までが、7 割強の施設には乳児から中学生が居る。一概に QOL の向上と言っても、各年齢層に求められる広範なニーズが生じていることになる。



Q 8.【病棟に入院している病児の疾患タイプは主に 急性期 - 慢性期 - 両方】

- ① 回答者の病棟における疾患のタイプとして、「急性期・慢性期・両方いる」いずれかを聞いた。
- ② 両方のタイプの子どもがいるという回答が 55%、主に急性期だけの子どもがいるという回答が 41%、主に慢性期だけという回答はわずか 4% であった。
- ③ この疾患タイプの回答と病床数をクロスした結果、25 床未満では半数以上が急性期であった。また、慢性期は病床数の多寡にかかわらず、偏在していた。



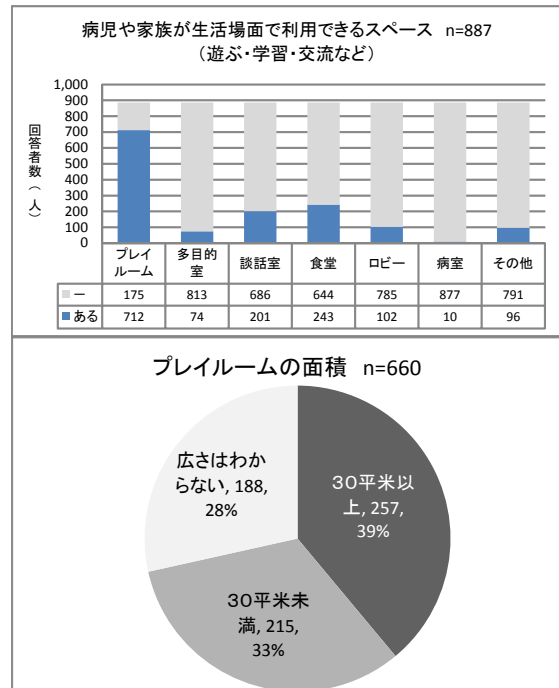
I -1-5【施設の空間環境】

Q 9.【病児や家族が生活場面で利用できる（遊ぶ・学習・交流など）スペース】

小児病棟フロア内に、病児や家族が生活場面で利用できる（遊ぶ・学習・交流など）スペースがありますか。

「ある」場合、それはどんなスペースですか（複数回答）

- ① プレイルームは80%・712人が「ある」という回答だった。その他、「食堂」27%、「談話室」22%であった。
- ② さらにプレイルームの広さについて聞いたところ、30㎡以上は39%、30㎡未満は33%、「わからない」は28%であった。（※ここには新生児やNICUの担当のために「プレイルームの利用がないのでわからない」が含まれている）
- ③ 保育士の人数を聞いた質問とクロスしたところ、「保育士0人」と回答した361人の内、30㎡以上が16%、30㎡未満は25%、わからないは59%であった。
- ④ 上記選択肢の「その他」の記述では、「学習室」41、「ダイニング」10、「家族室」4で、「中庭」「面談室」「カンファレンスルーム」「ファミリールーム」「授乳室」「ティーンズルーム」「青少年ルーム」などがあげられている。

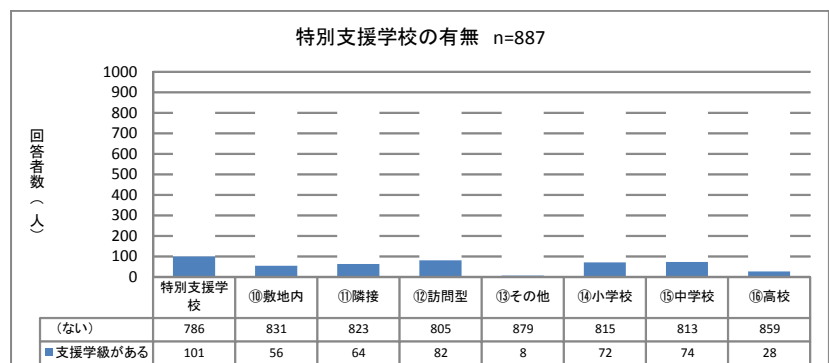
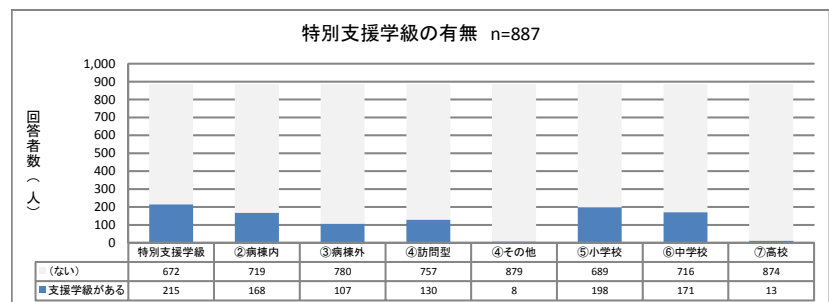


Q 10.【学校の有無】

特別支援学級：病棟内 病棟外 訪問型 その他 / 小学校 中学校 高校

特別支援学校：病院敷地内 病院と隣接 訪問型 その他 / 小学校 中学校 高校

- ① 特別支援学級があるという回答は24%・215で、その内訳は小学校198、中学校は171、高校は13であった。場所は、病棟内が若干多いが病棟外や訪問タイプが併用されていると思われる。
- ② 特別支援学校があるという回答は11%・101で、その内訳は小学校72、中学校74、高校28であった。学校の場所は敷地内と隣接型が半々で、訪問型が併用されていると思われる。
- ③ 学級・学校両方合わせると全体の35%で、特別支援教育の体制が訪問型も含めいずれもなかったのは約半数の46%であった。



I -1-6【施設の空間利用状況】

Q11.【病児や家族が生活場面で利用できるスペースの利用状況】

スペースはどのように（時間帯・内容など）利用していますか。

自由記述回答をキーワードでコーディングした後、職種とクロスして分析した。

Q11-1. ●対象児が乳幼児（親子）の場合（635件）／対象が乳幼児親子の場合のプレイルーム利用の仕方

- ① 基本的に開放時間が決まっている場合が多く、一部に24時間好きなときに利用できるという回答もあった。
- ② 医師の許可があって、利用可としているところが多いが、自由に使えるところもある。
- ③ 判断基準は、安静、感染、点滴、処置時間、保護者の付き添いなどで、分離、使い分けされている。
- ④ 子どもに付き添う保護者は、親、保育士、看護師、一部にボランティアが見られた。
- ⑤ 活動内容の多くは、おもちゃ、ままごと、絵本、TV・DVD、折り紙、三輪車、などが上げられている。
- ⑥ 各専門職の回答傾向としては、医師の回答には利用基準が記述され、看護師からは親子で利用している観察が記述され、保育士からは自身の活動として記述されていた。
- ⑦ 保育士とCLSの記述では、特に保育、設定保育、制作、リズム遊び、レクリエーションなどの記述が多い。
また、「子ども同士の交流、親同士の交流、親の気持ちの傾聴、癒しの時間、他の親子とのコミュニケーション」といったキーワードも多く、保育所、あるいは子育て支援広場的な環境づくりがなされていると思われる。

Q11-2. ●対象児が就学年齢児の場合（583件）／就学年齢の場合のプレイルームの利用の仕方

- ① 乳幼児親子と同様に利用基準は、時間帯、感染等が書かれているが、加えて院内学級、学校がある施設では、子どもの日中活動は学校に依拠していると記されている。
- ② その上で子どものフリーの時間に、単独で利用できる。内容としては、マンガ、ゲーム、学習、読書、DVD、テレビ、カードゲーム、ボードゲーム、手芸、工作、ピアノを弾く、面会に利用などが上げられている。
- ③ 「乳幼児」の記述にはなかった「ほとんど利用されていない」「使われていない」という記述が9件あった。
- ④ また保育士の記述に、「おもちゃが乳幼児向けのものばかりで、小学高学年になるとプレイルームを訪れても遊ぶものがない」といった記述や、「院内学級がない時間」といった記述にとどまるなど、乳幼児を対象とした回答に見られるイキイキとした描写は少ない。小学生以上の年齢の子どもと保育士の関わりは、乳幼児親子ほど活発ではない場合もあると思われる。

I -1-7【施設の空間に対する中高生のニーズ有無】

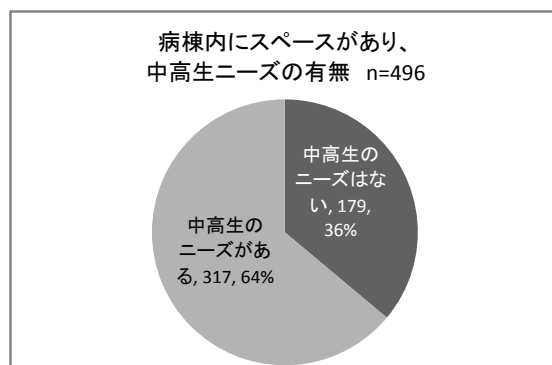
Q12.【中高生のスペースとニーズ】

病棟内にスペースがある場合、中高生が自由時間を楽しんだり交流できるスペースについて

「中高生のニーズはある」 「中高生のニーズはない」

- ① 「中高生のニーズがある」と回答したのは、回答のあった496件の64%、全体887件の35%であった。

「ない」と明示したのは、回答の36%、全887の20%にあたる。全体の44%からは回答がなかったが、中高生がいないのは2割で、残り2割については、後の自由記述回答にあった「状況が流動的」「ケースが個別的」「一概に有無を答えることはできない」という指摘がその理由と考えられる。

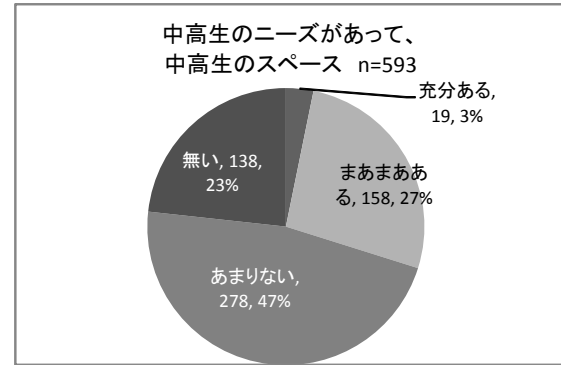


I - 2【スタッフが感じるニーズ】

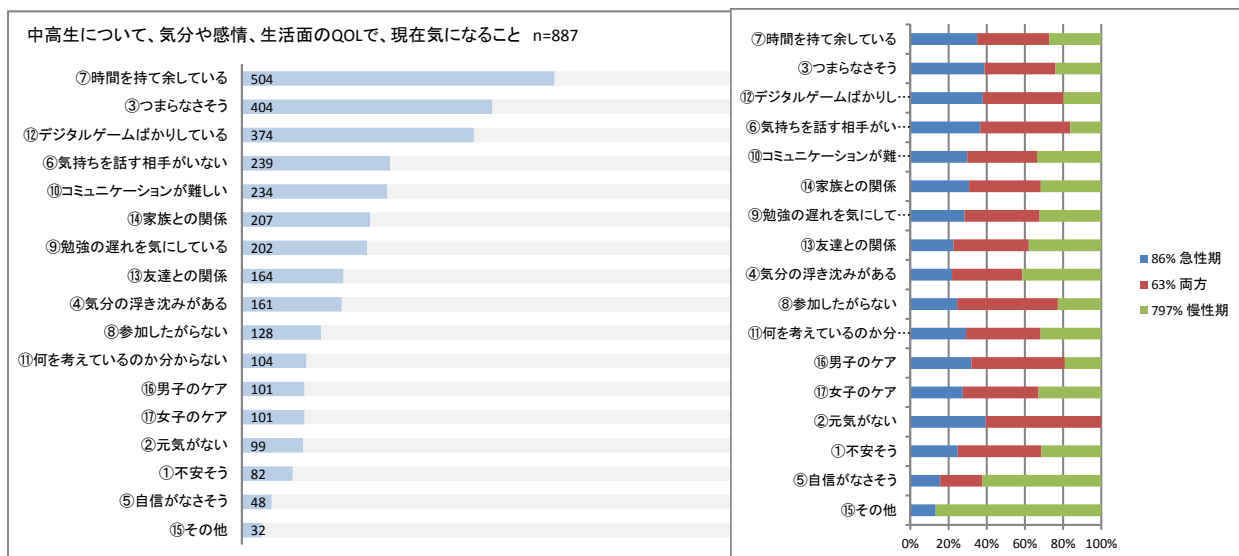
I - 2- 1【中学生に関するニーズ】

Q 1 3.【中高生のニーズがあって、スペースの有無は】

- ① 前問を前提にした設問であったが、スペースについては67%が回答している。
- ② 中高生のニーズがあって、そのスペースがあるのは30%で、「あまりない」47%、「無い」23%であった。つまり7割が、中高生の居場所には何らかの不足を感じていると思われる。



Q 1 4.【中高生の気分や感情、生活面のQOLで、気になること】



①「中高生の気分や感情、生活面のQOLで、現在気になること」について複数回答で尋ねた。上左のグラフは単純集計で出現数をカウントしている。集計結果を全回答者887人に対する割合でみると、上位は「時間を持て余している」56%、「つまらなさそう」45%、「デジタルゲームばかりしている」42%で、下位は「自信がなさそう」5%、「不安そう」5%、「元気がない」11%であった。

② つまり上位は、半数近くのスタッフが気になる現象が生じており、逆に「元気がない」「不安そう」「自信がなさそう」という項目は、そうならないよう「ケアされ」「コントロール」されているのだろうか。急性期であれ、慢性期であれ、入院しているときの気分感情は「不安」になったり「元気がない」のが当たり前だと想定し、これらの質問項目を入れたが見事に反転し、時間を持て余して退屈している中高生の姿が浮かび上がった。

③ 上右のグラフは「疾患タイプ」とクロスし、重みづけをした100%グラフ。例えば「時間を持て余している」は3つの病棟タイプにかかわらずおよそ1/3ずつ現れ、疾患タイプによる特徴はない。一方、「自信がなさそう」は、慢性期で他の3倍現れ、逆に「元気がない」は慢性期はゼロとなっている。

④ 上記選択肢「その他」は3.6%で、概ね選択肢がカバーしているようだが、自由記述を拾ってみた。

・環境要因については、「男子の遊び用具がない」「小児用のベッドで閉塞感」「就学年齢の学習室、談話室が必要」「周囲が乳幼児ばかりでリラックスする場がなく自室に閉じこもっている」「同年代の子どもがいない」など。

・行動面では、「携帯電話の利用が多い・離さない」、「TVばかり観ている」、「マンガばかり見ている」、「学校に行けない」ほか、社会生活復帰への不安や病気への対処がわからないなどが挙げられていた。【稲垣】

I - 2-2 【行事・プログラムに関するニーズ】

Q 15. 【子どものための行事】

対象が子どもの、病院での行事はありますか。

- ・「ある」場合はおおまかな実施回数を
- ・それはどんな行事ですか

【季節行事】

書き初め お花見 セタ 花火大会 盆踊り 収穫祭
クリスマス

【普段の行事・レクリエーション】

お誕生日会 スポーツ大会 ゲーム大会 その他

- ① 89% の病院で子ども対象の行事があり、行事が行われていないのは 10%。ほとんどの小児病棟で行事が行われている。
- ② 行事がある場合の実施回数が最も多かった第 1 位は年 2 回、第 2 位は年 4 回、第 3 位は年 3 回となり、次に年 1 回と、年 6 回、年 5 回、年 12 回が近い数字で続いている。半数以上が年 1 回から 4 回が行われ、年 12 回以上は極端に少ない。
- ③ 季節行事ではクリスマス会とセタが群を抜いて多く、普段の行事・レクリエーションではお誕生日会が 1 位であった。
- ④ 一方、「その他」の選択は 266 人で、その他の記述には 444 件あった。記述には複数の行事が列記されており、全てをバラしたところ 975 のパーツとなった。それらをカテゴリーに分けてみると、一つの施設で全ての行事を行っているわけではないが、多彩なイベントが行われている事も垣間見えてきた。以下にカテゴリーごとに概観してみる。

⑤ 季節の行事…前述のクリスマス会とセタをはじめ 48 の行事が回答され、中でも「夏まつり」112 件、「節分・豆まき」

106 件、「ひなまつり」104 件、「ハロウィン」102 件が、多く挙げられている。他にも年間を通じた、正月～花見～子どもの日～お化け屋敷～キャンプ～スイカ割り～遠足～運動会～十五夜～文化祭～七五三～イルミネーションといった年間を通じたイベントが挙げられていた。

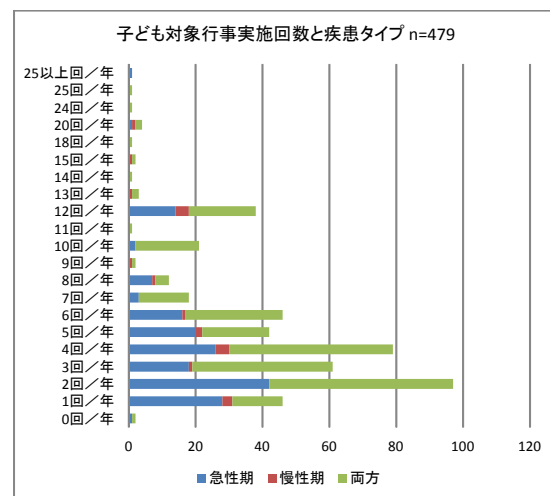
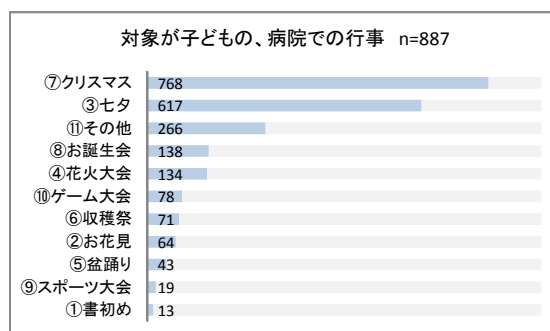
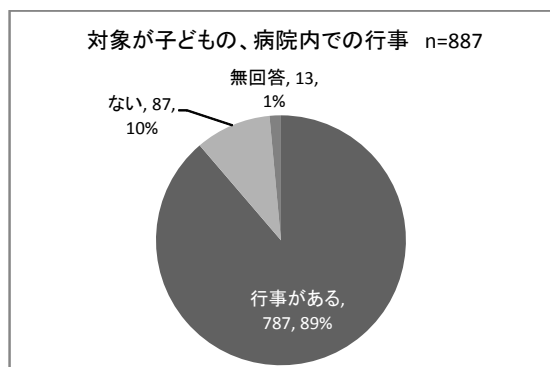
⑥ 創作活動…22 種類の行事が回答され、中でも演奏、“うたう”、コーラス、患児出演のコンサート、オーケストラ、オカリナ、楽器、院内学級主催などの「音楽」にまつわるイベントが多い。他に、工作などの創作活動にも工夫が見られた。

⑦ イベント…季節に関わらないタイプ 30 種類の行事。中でもおたのしみ会が 18 件となっている。

⑧ 鑑賞・訪問…29 種類の行事が回答され、中でもクラウン訪問(23 件)、絵本や本の読み聞かせ(16 件)、人形劇(12 件)、プロスポーツ選手の訪問(11 件)があげられている。

⑨ 食に関するイベント…調理やバイキング、クッキング、バーベキューほか 12 の行事が回答された。

⑩ 社会的な活動…退院おめでとう会、卒業おめでとう会、社会見学、消防見学、同窓会など 13 件あげられている。



Q 16.【子どもに人気がある行事】

実施した行事で、人気がある（あった）行事は何ですか。

① 最も人気があったクリスマス会が群を抜いて、夏まつり、七夕とつづいている。しかし、実施されている件数からみれば当然の結果ともいえ、この結果から即、その他の創意工夫に溢れた行事やイベントが「人気がない」と判断することはできないだろう。ただ、想像の域を出ないが、施設全体のスタッフがかかわるような大きなイベントで、病棟全体に楽しい空気が漂うことで、子どもたちへのインパクトの強さを生み出すことも考えられる。

Q 17.【行事への子どもの参画】

子どもたちが、行事を自分たちで計画したり、スタッフと一緒につくったりしたこと

- ① 子どもが参画した行事が「ない・わからない」回答が 110 件、3 割近くあり、「ある」と回答したのは 286 件、7 割。
- ② 「ない・わからない」と回答した理由に、“急性期や新生児、重心^(*)対象のため病院スタッフが企画・運営している。子どもたちの計画はないが参加型のイベントが多い”などがあげられている。（* 重症心身障害児・者）
- ③ 入院生活をしている子どもの QOL の観点から「子どもが参画する行事」と一口で言っても、急性期・慢性期、年齢によって異なる。特に新生児や重心^(*)では、求める内容も質も異なることが指摘されている。
- ④ 「ある」と回答した 278 件には、作品制作や飾り付け、企画・運営、出し物等があげられている。「急性期のためでない」とする回答が少なからず見られる一方、以下に列挙した事例は全て「急性期の病棟」の回答者から抜粋した。子どもの病態や年齢層、体制など様々な条件整備が必要だろうが何かの参考になるかも知れない。

■【制作など】季節ごとの壁紙作成・貼り絵・万華鏡を一緒に作った・夏祭りプレゼント作り・（計画はないが）クリスマスの折り紙リースやサンタともみの木作り・七夕の飾り作りは、子供たちの作品・行事を行う時期に幼児、学童が入院していて、体調が良ければ飾り付けと一緒に作ることもある・プレイルームのかざり付け・祭りプレゼント作り・乳幼児→こいのぼり、ひな人形、七夕飾りなど製作形式になっているものは、親やスタッフと共に製作。学童→製作物は乳幼児同様。折り紙・バルーンアート・夏祭りの商品を折り紙や粘土で作成・装飾品製作・お面・パネルシアター・景品詰め・急性期の病院であり（平均在院日数 7 日）病棟保育士が企画して、病院全体で協力して会場設定を行っています・イベントで使う紙のおもちゃ・マント・紙ねんど等・イベントまでに時間をかけ、一緒に作る・こどもの日はみんなでカブトを折りました・画用紙に絵を描いて、それで帽子をつくった・対象年齢で参加できる場合には、七夕、クリスマスと一緒に رفتり、乳・幼児の場合、親に参加していただくこともあるが企画はスタッフです。

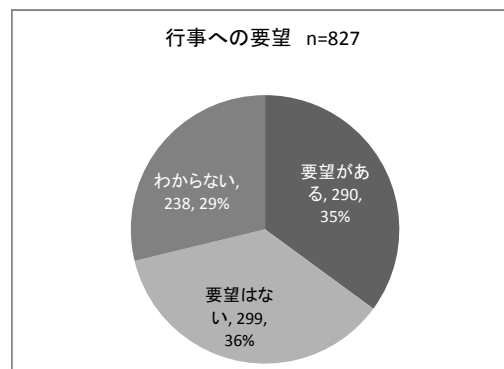
■【クッキング】お月見会のおだんご作り・クリスマス会ケーキ作り・出し物・クッキー作り

■【イベント】七夕やクリスマスでは楽器演奏を計画、実施・クリスマス会で子供達が発表・クリスマス会でカステネットなど・ドラマ・バルーンアート・ハンドベル・クリスマス会の発表（歌やオルガン）・ゲーム・行事の準備を保育士と共におこなう・スタッフと子どもと一緒にダンスをした（1 週間前から練習）・どの会も子どもたち参加で企画している・院内学級の先生たちが子供たちと行事企画している→運動会・バザー（お店を出す）・学習発表会・縁日・夏祭りで工作をする児に造ってもらい、屋台として主催側に参加してもらった・夏祭りやクリスマスの出し物を子どもと一緒に企画したり、子どもがやりたい案を出してもらったりして、子どもたち中心に実施している・学童期（高・中・小学生高学年）の子は計画させることによって行事に意欲的に参加できるようにしている。

Q18.【病院スタッフとしての要望】

① 要望が「ある」と「ない」が共に三分の一ずつであった。

② 自由記述は、280件あり、その内容をコーディングしたところ、「頻度」「人的資源」「経済」「時間」「組織的運営」「プログラムソース」の他に、「感染リスク」「年齢層の広さ」「隔離」「人数の変動」「病態など予測がつかない」「付き添い家族も参加できる」「兄弟のケア」など、小児病棟固有の課題が前提となる条件下でプログラムを企画提供するための困難さが記述された回答が40件以上あった。これらは「入院病児のQOL」を向上しようとする際の課題として、重要な手がかりになると思われる。



病院、(病棟)スタッフだけでは行事の運営に限度がある、主に小学生を対象とするものが多くなってしまう

興味がわくもの、年齢によって異なるので、難しい

センターとしての行事は年2〜3回はあると思うがGCUであることもありクリスマス会のみの実施になっている。心疾患手術の乳児のptが増加してきており、行事だけではなく、日々の遊びの工夫が大事と感じている。

利用者の個々の希望がかなえられると良い

普段は、食事の制限があったり、自由もない入院生活なので、特別な日には、お楽しみで、お店やさんでお買い物(だかしやさん・おかしやさん)等、かき氷やさん等をやって楽しい時間をもちたい

病室から出られない子どもたちへの配慮

病院の管理上、また、子どもの体調にも影響が大きいため難しいが、長期入院している子どもが季節を感じられるように、花火を見せてあげたい。

入院していても季節を感じられるイベントで児も家族も楽しめるものがない。

入院PTの状況により参加日数も少ない時もあり

日程を決められているため、その際に児の出席が少ない場合も変更ができない。

日時設定・アレルギーのない児へ食べ物

当院は慢性期の患児のみが行事に参加できるため、急性期(感染症)の患児も、何らかの形で参加させたい。

添っている保護者を対象とした行事への取り組みリラクゼーションなど

中庭を利用した創作活動、アスレチック

中・高生の参加できる行事の企画はやはり重要

単調になりがちな病棟生活において季節感を感じたり、病棟の仲間との触れ合いを大切にしていきたい

対象年齢がその時によって違うので、難しい。行事に参加できる子どもが少ない。

新生児病棟なので、赤ちゃんと一緒に母親も楽しめる内容

小児病棟業務(行事の用意)についての仕事としての認識

重心の子供たちも参加できるようなもの / どんな年齢でも楽しめる内容が良い。

集団が1ヶ所に集まるときの安全・感染の問題に注意。多数あるのも問題。

子ども達が表現する機会が殆どない。

子ども達が積極的に参加できるような会

子どもの参加を考えると子どもの状態を考え、参加してほしい子どもが参加できない。

子どもだけでなく、親のリラクゼーションにもつながるので、そのような機会があるのは良い。季節の行事や音楽会など

兄弟と関われるもの / 全員が楽しめる

休日実施は、家族との時間に支障あり。工夫が必要

基本的に急性期にて入院が3〜5日平均なので、行事を実施する必要があるのかとよく意見があります。

感染予防のため、行動制限が厳しく、外に出る行事ができないが、花火大会やお花見、雪あそびなどさせたい。

感染対策を念頭において欲しい。

感染症で室内からでるのに制限がある場合、同じように楽しめない。

感染症、隔離などの児も楽しめるようにしたい

家族にも積極的に参加していただき、また必ず写真など記録に残すところがけたい

安全であること。業務に大きな支障をきたさないこと。

ベッドで安静、感染症の子ども達に行事にどのように参加してもらったらいいか

できるだけ多くの子どもが参加できる内容 / 親子が一緒に楽しめるもの

イベントがあると行ける子どもだけ行くという状況。安静の子どもたちのベッドサイドにも訪ねて、話しかけてくれるような関わりをしてほしい。

ICUの児も参加できるような工夫

Dr.Ns.など多勢の参加で患児、付き添いの方など、できるだけ多勢参加できると良いと思う。

行事と業務の調整が難しい。食育に関する行事(自分達で作って食べることができる行事ができれば...)がやりたいが、衛生面で難しい。

一部の患児しか参加することができない。・制限されることが多い。

病室(ベッド上)で出来る子どもの喜ぶこと

入院中の母子が楽しめるレクリエーション、病院全体以外にも病棟単位で!

大人(スタッフ同士)がまず盛り上げて楽しそうな雰囲気を出したい

子どもたちの移動、一緒に行事を楽しむ

行事実施時に参加対象者が少ないときの対応

何らかの行事がある時に決められた病棟だけでなく全病棟にきてほしい

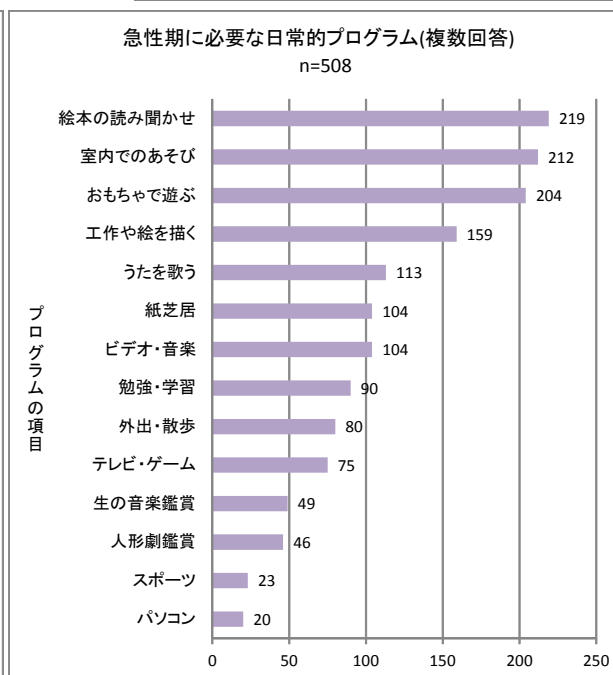
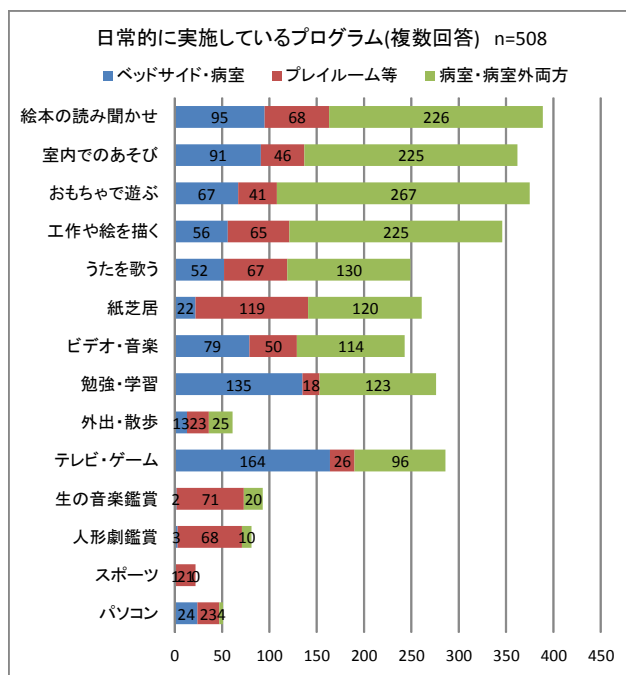
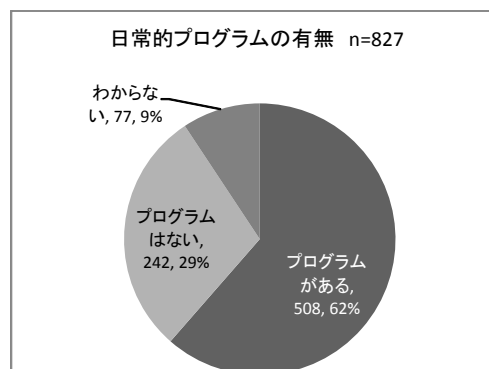
医療従事者皆で協力し合い、子どもや親が喜んでくれるイベントは沢山したい。

もっと子供と接したい。喜ぶ顔がみたい。

Q 19.【日常的な活動】

小児病棟や他のスペースにおいて日常的に実施していること

- ① 小児病棟で日常的に実施されている遊びや体験プログラムが「ある」の回答が62%、「ない」が29%。
- ② 「ある」と回答した場合、その「実施場所」とプログラムについて聞いた。その結果を下図に表した。

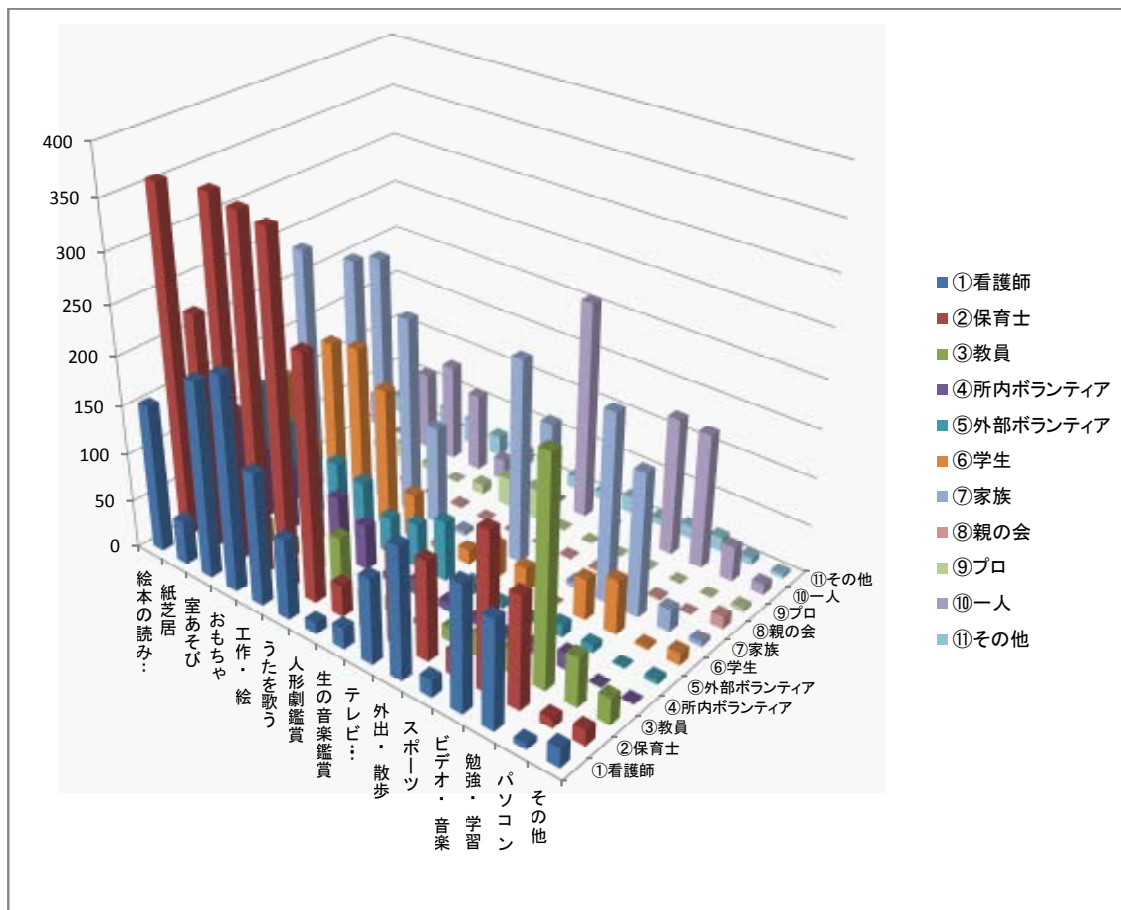


③ 上左図は、日常的に実施されているプログラムを選択してもらったグラフ。絵本の読み聞かせ、室内での遊び、おもちゃで遊ぶ、工作や絵を描く、学習やゲーム等はベッドサイドでもプレイルームでも多く実施されている。一方、スポーツや人形劇鑑賞、生の音楽鑑賞はプレイルーム等で行われ数は少ない。

④ 上右図は、各項目を選択すると同時に、「急性期の病児のQOL向上に欠かせない」と感じる項目を選択してもらったグラフで、左図と同じ並びにしてある。全体傾向としては、各プログラムについて実施数の1/2程度の人が「急性期に欠かせない」とし、「テレビ・ゲーム」の項目は、欠かせないと感じる人が1/4と低い値となり、「外出・散歩」は、実施61人に対し、急性期に必要であるとした人は80人と実施数を上回った。つまり「テレビ・ゲーム」「外出・散歩」以外の項目は、「急性期に必要」かどうかの判断にプログラムの内容以外の要因があると思われる。

⑤ 選択項目の他に記述された項目は66件あげられた。疾患のタイプをクロスしてみると、急性期にだけあげられた項目にホスピタル(病棟)クラウン、バルーンアート、病院内見学、ものづくり、プラネタリウム、ゲーム類など13項目あげられている。慢性期だけでは壁面製作、レクリエーション、お話し会、アロママッサージなど4項目となっている。急性期・慢性期両方には35項目があげられている。クリニックラウン、友達との遊び、ゲームや食事作り、ものづくり、付き添いや家族対象のプログラムがあげられている。

⑥ 次頁上図は、各プログラム項目について、実施をリードする人・関わる人を表示したグラフ。「リードする人…」は、「看護師」「保育士」「教員」「所内ボランティア」「外部ボランティア」「学生」「家族」「親の会」「プロ」「一人で」「その他」を選択項目として挙げた。



Q 20.【日常的に実施していることに参加する子どもたちの様子】

満足そうだった 積極的に参加していた スタッフに話しかけた もっとやりたかった その他

① 子どものプログラム実施中の様子や実施後の行動や言葉から構成した選択肢について、日常的なプログラムがあると回答した回答者（508 件）に当てはまるもの全てを選んでもらった。

結果は「満足そう」が 360 件 70%、「積極的に参加していた」312 件 61%、「スタッフに話しかけた」225 件 44%、「もっとやりたかった」191 件 37%となった。

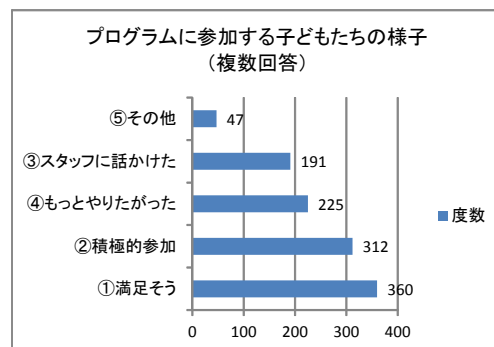
② その他に記述された項目は 54 件挙げられている。選択肢の項目にない「楽しそう」、「興味深そう」のほかに、日頃とは異なる

プラスの変化の一方で、「興味なさそう」「不機嫌さが増した」「笑顔が少ない」「戸惑っている」「退屈そう」等が挙げられている。

③ プログラムそのものへの様子以外に、他児とのかかわりを楽しむ様子や、知らない保育士が関わることへの抵抗感、母親不在に泣く等も挙げられている。

④ 年齢の幅広さ、性格や病状から全員が楽しめない、反応が異なる等の指摘もあった。

⑤ 以上から 7 割の子どもたちの満足と、3 割程度のミスマッチも日常プログラムに起きている事がうかがえる。

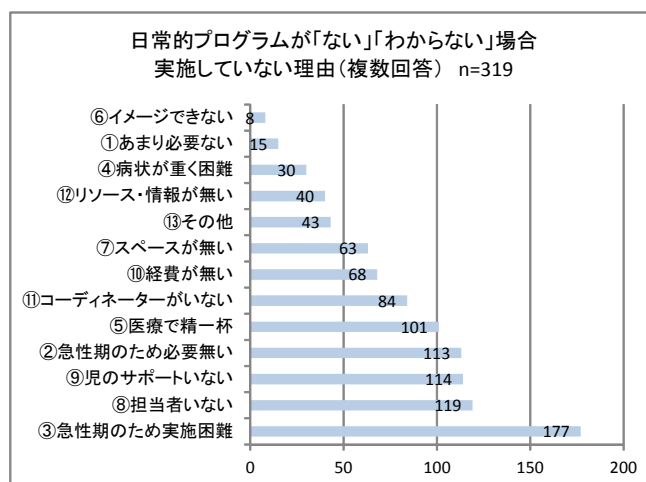


Q 2 1.【日常的なプログラムを実施していない理由】

あまり必要がない 急性期のためあまり必要がない 急性期の（入院期間が短い）ため実施困難
 病状が重いため実施するのが困難 医療で精いっぱい イメージができない スペースがない
 担当するスタッフがいない 子どもをサポートする人がいない（人員が足りない） 経費を確保できない
 コーディネートする人がいない パフォーマーや団体の情報がない その他

① 日常的プログラムが「ない」「わからない」と回答した 38%・319 人の回答者に、該当する理由を選択肢から選んでもらった。

② 結果は、「急性期のために実施困難」が最も多く 177 人が選択している。この意味するところは 1～2 週間という短期の入院期間と子どもの病態と現在の条件下での実施は困難か不要と考えられる。



③ また、「急性期のため必要ない」113 人、「医療で精一杯」101 人、「病状が重く困難」30 人、「あまり必要ない」25 人という選択は、優先順位が低い必要と判断せざるを得ない状況があることを伝えていると思われる。

④ 対して、「担当者がいない」「児のサポートいない」「コーディネーターがいない」「経費がない」「スペースが無い」「リソース・情報が無い」といった環境や条件の不足を選択した 589 件からは、条件を整えば「実施できる」「実施したい」という意向が伝わってくる。

⑤ 上記選択項目に該当しない「その他」を選択したのは 43 人だが記述は 68 件あった。最も多かったのが「新生児、NICU、ハイリスク新生児のため該当しない」が 19 件あり、「新生児」のニーズを把握するには新生児に特化した調査が必要である。

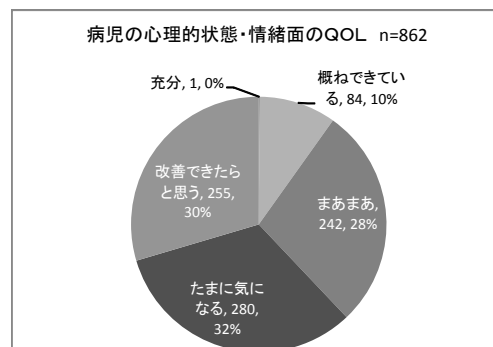
「混合病棟による困難」「子どもが少人数かつ、予測できない変動」13 件、「保育士や病棟にまかせているがマンパワー不足」14 件、「易感染・隔離の課題」8 件、その他対象年齢のニーズの問題や、病棟・看護師・保育士にまかせている（医師の仕事が多すぎる）ため把握されていないという回答も数件含まれていた。【大森】

I - 2- 3 【病児の QOL に関するニーズ】

Q 2 2. 【病児の心理的状态・情緒面の QOL】

入院生活における、病児の心理的状态・情緒面の QOL（気分・感情・自尊感情・家族・友達など）について
病児の心理的・情緒的な面に対するケアは十分だと思いますか？

① 概ねできている（10%）、まあまあできている（28%）が併せて 38% です。これに対し、たまに気になる（32%）、改善できたらと思う（30%）、併せて 62%、ほとんど倍の人が不十分だと感じている。



Q 2 3. 【気になることや改善したいと感じる「時」「こと」】

① 不十分と回答した 535 人のうち、467 人が記述式に書きこんでいる。

・最も多く 151 人が「時間・業務に追われて忙しく、ゆっくり子どもや付き添いの家族の相手ができないこと」と答えている。

そのうち 55 人が「もっと子どもと関わってゆっくり話を聞いたり、遊んだり、家族のストレスを発散させたい」と、自分がありたい姿を描いている。一方 54 人が改善したいこととして、スタッフの増員をあげている。回答した人の職種そのものの増員を思わせるものと、具体的に保育士、臨床心理士、思春期専門カウンセラー、CLS、ソーシャルワーカーなどの専門職をあげている場合がある。

専門職だけでなく、ボランティア、「幼児の保育をしてくれる人」「遊んでくれる人」「話を聞いてくれる人」といった記述もあった。

・129 人が「気になる子どものようす」を書いています。泣いている、怒りっぽい、不安そう、たいくつそう、寂しそう、沈んでいる、学齢期・思春期の子どもがストレスをためている、など。

原因としては、治療のためにベッドから離れられない、長期入院、親や兄弟や友達との面会が制限されていたり少ない、ターミナルケアが必要など病状が重症、混合病床、子どもが治療や入院について知識や理解を得られる説明が不十分、スタッフとのコミュニケーション不足などがあげられている。

・81 人が家族について、あるいは家族との関係をあげている。

不安、疲れなど心身のストレスがたまった両親とスタッフがゆっくり話ができないこと、両親や兄弟との面会に制限がある、面会が少ない、家族と子どものコミュニケーションがうまくとれていないことによる子どもへの影響、付き添いの在り方についてなど。

・51 人が、あそびや勉強、レクリエーションの必要性を書いています。

子どもと一緒に遊んだり勉強することで笑顔がうまれ、心理面が豊かになる。もっとあそびを増やしたい、楽しませてあげたい。ケアとあそびのバランスが大切。わかっていてもなかなか関われないこと、小中学生で入院が長期になる子どもたちが時間をもてあましてゲームばかりしている。勉強の遅れを気にしているが、サポートする人がいないなど。

・24 人が病院的ハード面やシステムについて書いている。

子どもとおとな、急性期と慢性期、幼い子と年長の子が混合病床なので、ひとりひとりに合ったケアができない。プレイルームの活用時間に制限がある。年長の子ども用の本や DVD がほしい。感染症の子どもが遊べる

スペース、家族や友達と一緒に過ごせるスペースがほしい、などです。また、音、採光、広さなどの環境についても意見があった。

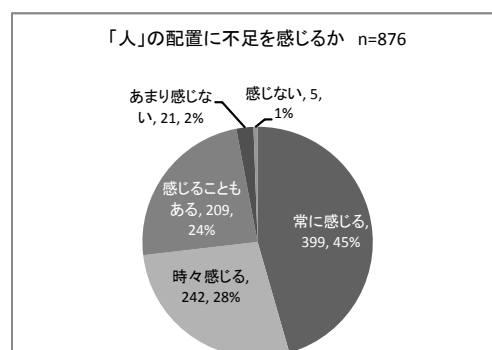
・7人がスタッフの学びやスタッフ同士のコミュニケーションの必要性を書いている。

QOLについての知識不足。子どもの体調と精神的な面は切り離すことができないので、病気や治療についてより深い理解が必要。心理士として、医師、看護師とが話し合う時間が充分とれない。ソーシャルワーカー、心理士が不在なので、それらをカバーする専門知識が必要なことがある、など。【岡田】

I - 2- 4 【スタッフ体制に関するニーズ】

Q 24. 【子どもの病院生活を豊かにするために、「人」の配置に不足を感じることはありますか？

① 常を感じるが45%で、半数弱の施設では慢性的な人不足がうかがえます。一方、時々感じる(28%)、感じることもある(24%)が約半数を占めており、現状の業務やケア内容で目一杯と考えられます。現状以上のケアや新たなプログラムなどを導入するには、「人の手当て」とセットで検討する必要があると思われる。



Q 25. 【必要と感じる「人」はどのような役割を担う「人」ですか。

① 1位…遊び相手 2位…付き添い家族支援 3位…話し相手。

求める「人」の役割として二つの対象が挙げられた。一つは子どもに対して、もう一つが付き添う家族・家庭への支援であった。前ページで記述された「入院病児のQOL向上について気になる」内容と呼応して対応できる「人」を求めていることがわかる。

② 上記選択肢の「その他」40人の記述

- ・学童期の子どもへの学習サポート(20人)
- ・前提となる医師・看護師(特に看護師)の増員(9人)
- ・これらのことを専門的に担ってくれるCLS(9人)
- ・患児の兄弟のサポート 保育(9人)
- ・長期入院の子どもの保育、親のサポート
- ・スタッフが手薄になる土・日のサポート 友人になってくれる人

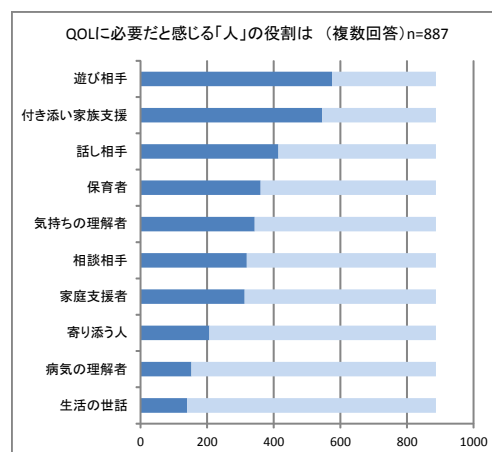
③ 選択肢になかった項目として、学習・受験支援、学校の先生等、学童期の学習面での役割が多くあげられていた。

④ また医師・看護師(特に看護師)の増員が大前提であると捉え

ており、更に子どもの病院生活全般に渡って担える専門性を持ったCLSの配置をもっとも望んでいる。

⑤ メンタル面をサポートする心理士、患児だけでなく兄弟も保育する保育士、リハビリに関わる理学療法士を必要としている。

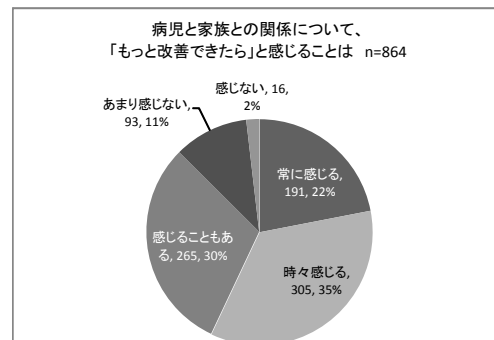
⑥ そのほか、退院後に、教育・家庭・経済・社会的支援等をサポートしてくれる人、友人になってくれる人がいたらいいと思っている。入院中ではもとより、退院後の地域でのケア体制が望まれている。現状は手薄な人の配置状態であり、待ったなしの切実さが感じられる。



I - 2- 5【病児と家族関係に関するニーズ】

Q 26.【病児と家族との関係について、「もっと改善できたら」と感じることはありますか？

① 病児と家族の関係について、課題を感じない環境にいる人は1割強、9割弱の人がなんらかの「改善」を感じ、常を感じている人は2割強であった。



Q 27.【改善したいと感じる場合、それは「どのような状況の時」、「どのようにできたら」と、感じますか？

① 「もっと改善できたら」と感じる内容の記述は318件あった。分類すると主なテーマは以下の通り。

付き添っている親への支援 243件・76%

同胞（兄弟）への支援 24件・8%

患児への直接支援 30件・9%

プライバシーが守れ安心できるスペース 16件・5%

親子関係への支援 5件・2%

② 24時間付き添っている親（特に母親）の負担を挙げ、長期の母子密着が続くと、体力・気持のゆとりがなくなり、ストレスフルな状態になっている。病児がぐずついているときあやしてくれる人、親の話を傾聴し両親の思いを話せる場・人、仕事と付き添いの両立支援、付き添い者の気分転換や笑い、リフレッシュする時間の確保、育児に困難を感じる母親・子どもへのかかわり方、遊び方を教える、どう接していいか悩む母親への子育て支援 子どもへの過保護・過干渉・育児放棄・愛着形成が出来ない親への対応、面会になかなか来れない家族のサポート等、病院スタッフでは充分補えない現状に心を痛め、かつ、何とかしたいという思いは具体的である。

③ 母親は患児の兄弟のことも心配している。入院患児の兄弟が病院にきた時の感染の問題をクリアしつつ、院内や近くに子どもを預かるシステムや家族の時間が持てるファミリーサポート、面倒を見てくれる体制を望んでいる。

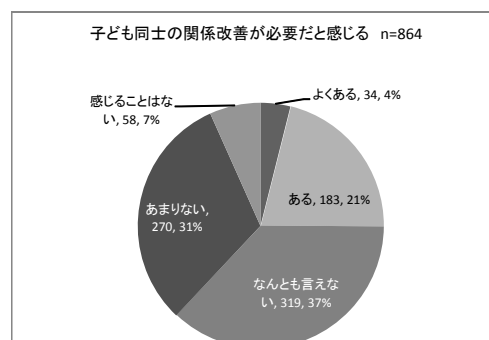
④ 思春期の子どもや高学年の子ども・その親への心理面でのサポートや学習支援、進学や学外活動の相談、親子の双方が心理的な不安定になる部分への対応、患児・母親同士の交流が少なく、コミュニケーションの取れるスムーズな会話や楽しい雰囲気づくりが必要。

⑤ これらの改善のためには、外部から第3者による上手な介入や専門家のサポートを求めている。院内においては、プライバシーを守れ、安心して兄弟・家族が面会時間をすごせるスペースや時間の確保、付き添いの方が休める空間づくり、面接時間の弾力化を改善点としてあげている。【中村】

I - 2-6 【子ども同士の関係に関するニーズ】

Q 28. 【入院している子ども同士の関係について、「改善できたら」と感じることはありませんか？

① 「改善したいことはない」と感じているのは、7%・58人、「あまりない」31%・270人で、約4割は課題がないと感じている。一方、「ある」21%・183人、「よくある」4%・34人で、「改善できたら」と感じている人は、1/4であった。



Q 29. 【改善したいと感じる場合、それはどのような「状況」または、どのような「こと」ですか？

① 「改善できたら」と感じる内容についての記述は215件で、共通性は以下のように整理された。

A) 生じている状況

【過剰性】子ども同士の関係が濃いと、仲が良すぎる（異年齢の不適切な？交流）、喧嘩、仲間外れ、（対戦）デジタルゲームに没頭、他児への介入のし過ぎ、友達の取り合い、他の親への依存、甘えなど。

【希薄・孤立】子ども同士の関係が希薄だと、カーテンを閉じて孤立、無視、無関心、社会性の欠落など

【発達特性】思春期の同士の関係のむずかしさ、トラブル。

B) 要因その1

【異質性】年齢、性別、入院期間、病態、治る治らない、家庭環境、趣味嗜好がそれぞれみな異なっている。

【社会性】入院以前の課題として、異質な個人同士がコミュニケーションをとり、良好な関係を築き、維持することが稚拙。親が課題を抱えている。

【空間の制約】さまざまな親子がカーテン一枚で隔てただけの病室で生活し、プライバシーの保持が困難。距離感が難しい。一方、良好な社会性、関係性を築くためのリソースや施設スペースなどが不足している場合がある。

C) 要因その2

●短期間での入れ替わりと、長期入院者の混在、感染リスクがあることが、基本的な条件。

D) 要因その3

●ケアワーカー、調整・介入者が不足または不在。スタッフの人数、時間、専門領域などに限界があり、個人または、集団への介入が困難な場合が生じている。

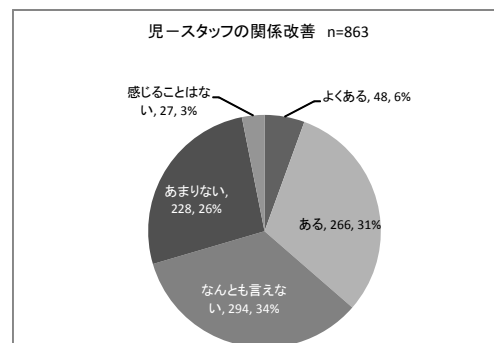
② 課題が生じる状況と原因は以上のように整理された。まず「子ども」にとっても付き添う家族にとっても入院するという事はストレスフルな状況である。にもかかわらず、3/4は、こうした状況をうまくケアしていると思われた。自由記述に「子どもはみんなやさしい」「保護者も思いやっている」などの肯定的な内容がある。小児病棟の様子が描写されていると思われる記述を一つ紹介しておく。

「入院生活の中で子ども同士が関わりを深めていくが、長期入院の患児にとっては、友達の退院（短期入院患児）が嬉しいことでもあり、寂しいという思いとなるため、その思いに共感しながら、また新たな子ども同士の関係作りができるように働きかけていくこと。」

I - 2- 7【病児と医療スタッフの関係に関するニーズ】

Q 30.【病児とケアするスタッフの関係について、「改善できたら」と感じることはありませんか。

- ① 3割強が改善を求め、「ない・あまりない」は3割。
 ② 「改善できたら」と感じない環境にいる人は、3%・27人、「あまりない」26%・228人、「なんとも言えない」34%・294人、「ある」31%・266人、「よくある」6%・48人であった。



Q 31.【改善したいと感じる場合、それはどのような「状況」または、どのような「こと」ですか？

- ③ 記述は261件で、内容にはいくつかの共通性が見られた。

生じる状況として、大きく3つのテーマに整理された。

【不足】医療的な処置しかできない。子どもと話したり遊んだりすることができない。スタッフに対する恐怖感を取り除けない。心理的配慮が不足することがある。患児が納得していないのに処置することがある。患児の気持ちに寄り添えない。患児のニーズに応えられない。

【過剰】思春期の患児とのかかわりに適切さが必要、スタッフの思い入れが強すぎ、バーンアウトするケースがある。入退院を繰り返す児と距離が取れなくなる。

【調整】児の甘えに対する対応のばらつき

④ 要因

【不足について】スタッフの人員不足。業務多忙。保育的要素に関するスタッフ理解・力量の不足。

【過剰・調整】子どもの気持ちにかかわるスタッフ間の調整、カンファレンスが不十分。

⑤スタッフと児との関係に関する課題点は、概ね共通認識が持たれているように見られた。大雑把な傾向ではあるが、若いナースはもっと子どもに寄り添い接したいと感じており、経験豊富なナースは子どもとの距離感にプロとしての自覚を求めている、共に児への深い愛情を感じる。

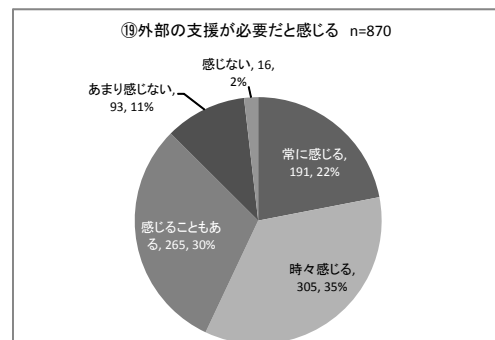
これらのテーマは基本的には、子どもの集団に対して大人がかかわる学校や、保育園、幼稚園などと同質の課題と思われる。ただし、医療的な処置(痛いこと・制限・抑制など)をすることが仕事のナースや医師が、子どもに寄り添うこと自体、子どもと医療者間の心理として困難さを伴うテーマであり、さらに時間と体制が限られていることは厳しい状況だと考えられる。また、こうした状況を改善するための方策を考えたり研修等の時間を確保することが困難な状況が、小児病棟の課題と思われる。

I - 2- 8 【病院外部からの支援に関するニーズ】

Q 3 2.【子どもの病院生活を豊かにするために、外部の支援があったらと覚ることはありますか？】

- ①「外部の支援が必要だと覚る」「時々覚る」合わせ 5 割強。
「覚ることもある」は 3 割。「あまり覚らない」「覚ない」は、
1 割強だった。

Q 3 3.【必要性を覚る場合は、「どのような状況の時」に、「どのような支援があったら】



■記述は 491 件あった。「外部からの支援があれば」として挙げられた項目は、大きくは三つのテーマに整理された。

●子どもに対してのニーズ

- ①「保育・遊び・泣いている子ども」への対応。(特に病棟混雑時・冬～6月)
- ②「文化的刺激・新鮮」本物、生、スポーツ、歌、演奏、人形劇、コンサート、パフォーマンス
- ③「マジック、クラウン、ワクワクするイベント、プロの選手」
- ④「学習」学校とのつながり
- ⑤「社会的体験」地域の人、外出サポート
- ⑥「医療者ではなく、健康な大学生など、未来を覚られる人との交流」
- ⑦「長期の子どもへ」学習、心理面、話相手、悩み相談、小児のカウンセリング、レク

●家族・付添いに対してのニーズ

- ⑧「家族の支援」親、兄弟、家庭、シングルマザーへの支援
- ⑨「付添い」代替え、夜間、付添いのサポート、レスパイトケア
- ⑩ 経済的支援、宿泊施設提供、マッサージ・アロマ等のプログラム提供

●施設・スタッフに対してのニーズ

- ⑪「イベント・レク・季節行事」などにおけるソフトや人のサポート
- ⑫「スタッフの補助」食事介助、一斉に啼いているとき、生活リズムの援助(声掛け)
- ⑬ 朝食時、準夜帯、面会時間の面会に来ない子どもへのサポート、夕食～寝るまでの時間帯のサポート

① これまで見てきたようにスタッフの体制としては余力がなく、子どもたちへのかかわりは、もっと豊かにしたいというのが小児病棟のジレンマだろう。そして専門的なスタッフ体制の充実があったうえで、「外部の支援」も多岐にわたって求めていると考えられる。

② 当然ここに記述されているのは、医療にかかわる部分ではなく生活面であったり、社会的な面であったり、子どもの成長発達に必要な体験として、外部に求めている内容である。

③ これらのリストを一見すれば、もっと実現できるように思われる内容も多いのだが、実際にはこうした外部支援を小児病棟に受け入れるには、内部に対しても外部に対しても相当な調整力が必要になることは想像に難くない。さらに現実的には安全の確保、感染リスクの課題、責任の所在、支援の質など解決すべき課題は少なくない。

④ また、経営が厳しいとされる小児医療である。潤沢な予算を用意してこうした外部支援を組み立てることは想定外だと思われる。こうした外部支援を一体どこに、誰に対して求めればいいのか？ という課題が生じる。

【稲垣】

I - 3 【外部支援の1ケースに対する医療スタッフの評価】

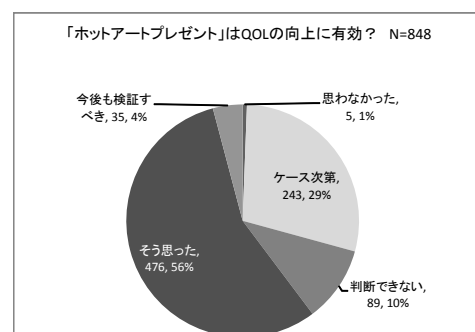
「ホットアートプレゼント」に関して

■外部支援の一つの試みとして、プログラムを紹介し、その有効性や課題、可能性について以下、尋ねた。

(参考資料として、アンケートにプログラム概要を添付した／資料 p111)

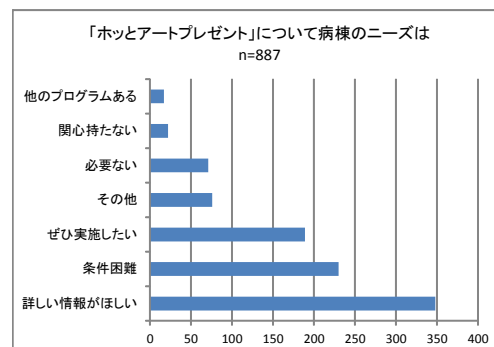
Q 34. 【「ホットアートプレゼント」は病児の QOL 向上に有効と思うか】

- ① QOL の向上に有効であると「思わなかった」は 1%、
「ケース次第」29%、「判断できない」10%、
「そう思った」56%、「今後も検証すべき」4%であった。



Q 35. 【あなたの病棟で「ホットアートプレゼント」のニーズは（複数可）】

- ① 1 位、詳しい情報がほしい (39%)、
2 位、条件が困難 (26%)、
3 位、ぜひ実施したい (21%) であった。



② 「その他」の記述は 93 件あった。分類した結果。

短期入院（4～7日）のため、ニーズが低くコストと合わないのでは	15
新生児・未熟児・NICUのため、プログラムとの適性が不明、または、実績を知りたい、必要ない	15
情報が少なく、病棟のニーズに合うか判断できない	12
急性期、感染症が多く、参加人数が少ない、参加することが困難、参加者数の予測が困難	13
すでに実施しているプログラムがあり、調整が必要または、不要。	10
すでに実施している。または、ぜひ実施したい	10
短期で入院児自体が少ない。当日子どもがいるかがわからない。	6
対象（低年齢、中高生、知的障害、家族など）と、ケースに合わせられるなら実施したい	7
年間を通じた、継続的なプログラムなら希望する	3
経済的な負担があるか不安・無料なら実施したい	2
合計	93

Q 36.【実施を検討した方のクリアすべき課題】

① 1位、責任者の理解と許可 2位、スケジュール調整
3位、スタッフの理解調整

②「その他」の記述は、

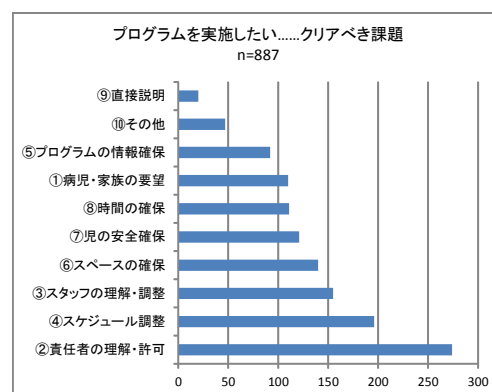
・短期の入院が多く入院人数もその都度まばらで、ホッとアートプレゼントが自病院で実施できるものかが不安材料。(22件)

・急性期病棟での実施の必要性も考えられる。また年齢も乳幼児

から中高生と幅広いためどんな内容のものが実施されるのか聞きたいというニーズが見られる。

・病院独自のイベントを実施していることもあり、コスト面で病院側に負担のない実施と継続が望まれている。

・外部の人が入るため感染予防対策に気を配らなければならないこと、入院患児数の変動があるためスケジュール調整が難しいことや医師の診療方針との調整などをしなければならないためスタッフの理解が不可欠であると思われる。【竹内】



Ⅱ

「HOT もっとプレゼント 2010」

プログラムタイプ A

「ホットアートプレゼント」実施15のケース

プログラムタイプ B

「施設のニーズに応じた、日常的に継続可能な地域リソースを活用したプログラム」

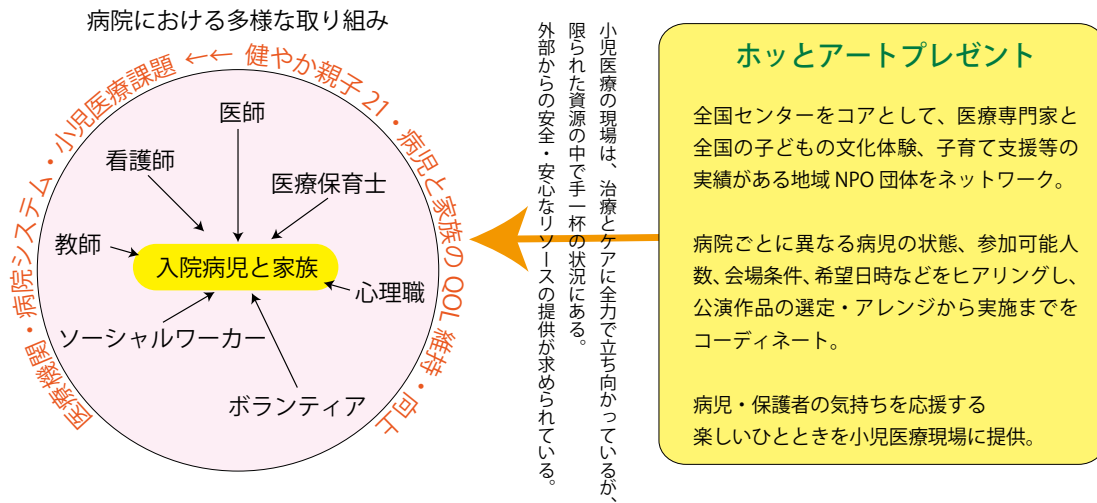
実施5つのケース

タイプ A・タイプ B 参加数 1,504 名

(乳児～高校生 584 名 保護者 352 名 病院関係者 475 名)

スタッフ数 88 名 講師 10 名

事業コンセプト / ホットとアートプレゼントとは……



政策との関連性・事業根拠

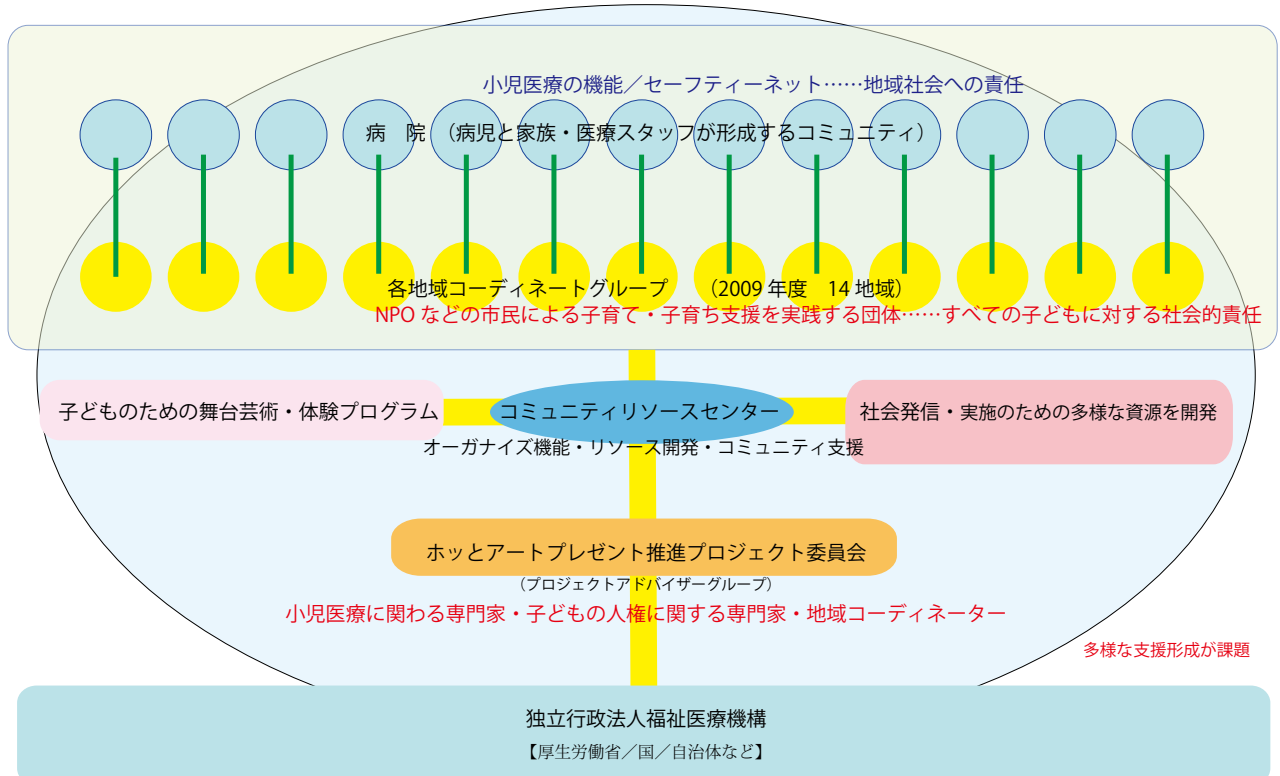
■母子保健は生涯を通じた健康の出発点であり、次世代を健やかに育てるための基盤となる。21 世紀の母子保健の取組の方向性と目標や指標を示し、関係機関・団体が一体となって、その達成に取り組む国民運動である「健やか親子 21」が、次世代育成行動計画に合わせ、平成 26 年までとする計画期間の延長案が承認され、4 年間の期間延長が決定されている。

厚生労働省が平成 18 年 3 月 16 日に発表した「健やか親子 21」中間評価報告書（『「健やか親子 21」推進検討会』座長：柳澤正義（日本子ども家庭総合研究所副所長））においても、課題 3：小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備が求められ、「病児支援の整備は不十分—環境整備を推進」すべきと指摘している。病児のための院内学級・ハード面でのプレールーム設置・医療保育者の配置など、その後の改善は充実の方向に動き出しているが、平成 19 年度に実施した「長期入院の子どもの心を癒す芸術との出会い事業」（福祉医療機構子育て支援基金）において、病児とその家族への精神的な支援は病棟内においても、強く求められていることが確認されている。

（健やか親子 21 資料：http://www.wel-health.jp/column/no61.html）

ホットとアートプレゼント ネットワークモデル 2009 年度

【病院コミュニティ…子どもにかかわる地域 NPO 団体…プログラムリソース】を有機的につなぎ、機能させるためのスキームを開発し、ネットワークする仕組み
病児と家族の QOL 向上を推進するために、小児医療現場・地域 NPO と連携し、全国ネットワークを形成。安全と品質を確保し、普及を図る



HOT もっとプレゼントガイドライン

2010 年版

■ 2 タイプの提供プログラム

入院病児の QOL 向上を目的として、病棟のニーズに応じたプログラムの提供可能性を検証する。

TYPE A : 2008 年度より検証してきた、プロのアーティストによる院内パフォーマンス。

プレゼントコーディネーターが、病棟の要望、ニーズを把握し、小児病棟に設営する会場及び、個別の病室訪問によって提供。

TYPE B : 今年度 2010 年度の新たなアプローチ。入院病児の QOL に関し、病院スタッフへのヒアリングからニーズを把握し、プレゼントコーディネーターが地域のリソースを活用して提供可能なプログラムを提案。病院サイドとの調整を経て、プログラムを実施し、成果と課題を検証。小児病棟のニーズに応じた継続的な支援プログラムの可能性を探る。

■ プレゼントコーディネートの基本的な考え方

① 安全・安心の保障 健康管理意識維持・健康管理技術の養成・管理チェック体制のメンテナンス・リスクマネジメント

② 医療現場・各専門家（Dr. 看護師 医療保育士 事務局 など）のストレスを常に低減する運用管理・開発

③ 2 タイプのプログラムに共通した、アセスメント～実施～評価～リピートの流れ

Before	当日	After
ニーズの把握～プログラム調整・インフォメーション	施設ニーズに応じたプログラムの実施	評価・フィードバック

④ 子どもの人権・プライバシーを守り、当日の病院の状況にフレキシブルに対応し、ベストな状態を提供する
年齢・人数・空間・雰囲気・床・照明・電源・入退室・笑顔

⑤ これらを実現するための事前情報の収集・コミュニケーション・調査・ヒアリング・学習・適切なアドバイス・連携

⑥ 課題・成果検証：プロセス・当日・終了後の各パートにおける、各ユーザーの評価・成果・課題を収集し、検証。
→ フィードバックし、システムの改善を図る

⑦ 全国的にコーディネーターをネットワークすることで病児支援・病院支援機能の有効性を検証。
品質の保持・改善を図る

2010 年度 実施病院……プログラム / コーディネート団体 一覧

【タイプ B プログラム】

- ケース 1 JA 愛知厚生連 江南厚生病院 …… 院内学級特別講座
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子どもと文化の森
- ケース 2 金沢大学附属病院 …… ホットサロン
 コーディネート団体: 子ども夢フォーラム
- ケース 3 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 ウキウキワクワク工作
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター
- ケース 4 和歌山県立医科大学附属病院 …… 「アロマでリフレッシュ♪&バルーンアートあそび」
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども NPO 和歌山県センター
- ケース 5 独立行政法人国立病院機構福岡病院 …「絵本ひろば」
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども文化コミュニティ

【タイプ A】

- 1 島根大学医学部附属病院…………… スーパー人形劇・あかずきんちゃん (人形劇団ののはな)2010 年 8 月 24 日 (火)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人しまね子どもセンター
- 2 あいち小児保健医療総合センター…………… アンディ先生のストリートマジック ((有) マジックファクトリー) 2010 年 8 月 24 日 (火)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人名古屋おやこセンター
- 3 和歌山県立医科大学附属病院…………… アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー) 2010 年 9 月 22 日 (水)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども NPO 和歌山県センター
- 4 金沢大学附属病院…………… アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー) 2010 年 9 月 28 日 (火)
 コーディネート団体: 子ども夢フォーラム
- 5 宮崎大学医学部附属病院…………… スーパー人形劇・あかずきんちゃん (人形劇団ののはな)2010 年 10 月 1 日 (金)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人みやざき子ども文化センター
- 6 地方独立行政法人宮城県立こども病院…………… アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー) 2010 年 10 月 13 日 (水)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人せんだい杜の子ども劇場
- 7 独立行政法人国立病院機構舞鶴医療センター ①いたずらうさちゃん、②きつねのまんまほか (人形劇だん大福) 2010 年 10 月 16 日 (土)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人京都子どもセンター
- 8 一宮市立市民病院…………… びりとさくちゃんのクラウニングシアター (蒼い企画) 2010 年 10 月 18 日 (月)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子どもと文化の森
- 9 独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー) 2010 年 10 月 19 日 (火)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター
- 10 東京大学医学部附属病院…………… びりとさくちゃんのクラウニングシアター (蒼い企画)2010 年 10 月 20 日 (水)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども NPO・子ども劇場全国センター
- 11 山口大学医学部附属病院…………… アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー)2010 年 10 月 21 日 (木)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども劇場山口県センター
- 12 独立行政法人 国立成育医療研究センター …… びりとブッチーのクラウニングシアター (蒼い企画)2010 年 10 月 22 日 (金)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども NPO・子ども劇場全国センター
- 13 北海道立子ども総合医療・療育センター…………… アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー) 2010 年 10 月 26 日 (火)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人こども・コムステーション・いしかり
- 14 兵庫医科大学病院…………… アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー) 2010 年 11 月 30 日 (火)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人兵庫県子ども文化振興協会
- 15 独立行政法人国立病院機構福岡病院…………… びりとブッチーのクラウニングシアター (蒼い企画)2010 年 12 月 17 日 (金)
 コーディネート団体: 特定非営利活動法人子ども文化コミュニティ

Ⅱ - 1

プログラムタイプ B

実施結果

タイプ B

「施設のニーズに応じた、地域リソースプログラム」5つのケース

1. 実施病院 5 施設

2. 参加総数 167 名

(子ども：乳幼児 18 名 小学生 22 名 中学生 17 名／大人：保護者 52 名 病院関係者 58 名)

(+ 10 日間の常設展に約 200 名)

3. スタッフ数 13 名 講師 10 名

ケース 1. 院内学級が夏休み中の中学生を対象とした創作プログラム 院内学級特別講座 「地球儀作り」「科学実験教室」



プログラム名	院内学級特別講座
実施日（回数）	① 8月17日（火）・② 18日（水）・③ 19日（木） ④ 24日（火）・⑤ 25日（水）（全5回）
企画内容	院内学級の夏休み、日頃できない面白い体験をしてもらおうと複数企画提案。 「地球儀作り」と「科学実験教室」を選択され、対象は中学生。 「地球儀作り」3日間。「科学実験教室」2日間、計5日5回実施。
講師	「地球儀作り」伊藤久美子・「科学実験教室」長瀬好之
参加者	毎回中学生2名・①保育士1名 / ②看護師2名 / ③保育士1名・看護師1名 / ④看護師1名・院内学級の先生1名 / ⑤看護師2名・保育士1名
開始～終了時間	14:00～15:00
実施施設	JA 愛知厚生連 江南厚生病院 ふじ学級 院内中学
コーディネーター/団体	水野 裕子 / 特定非営利活動法人子どもと文化の森

実施までのプロセス

今年度の事業で必要な、病児 QOL 向上に関する小児病棟基礎調査のためのヒアリングを行った際に、病児の日常生活の中で課題となっている部分を様々な角度から伺いました。病児の QOL 向上のための課題として、病児のご家族の負担の大きさに驚き、細かな部分にまで病院スタッフがサポートしていることを知り、病気だけでなく生活面にまで配慮している現状にも驚きました。外部からのサポートで少しでも補えたらと提案し、病院側から具体的に手伝ってほしい部分を提示して頂きました。

夏休み中の院内学級の子も達へ、少しでも有意義な時間を過ごさせてあげたいと、そこへの支援をお願いされました。小中学生の子も達に何か企画をということ、私達の会が今まで行ってきた催し等から企画立案し、お手伝いして頂きたい方に協力を要請しました。高校生や大学生による学習支援や「三原色で遊ぼう」「身近なものでおもちゃ作り」「ドライアイスで遊ぼう」など。その中から、今回は中学生に向け、「地球儀を作ろう」「科学実験教室」を選んで頂き、5日間の日程となりました。

当日の様子

今回の5日間は「地球儀作り」が3日間、「科学実験教室」が2日間。会場は院内学級の「ふじ学級」。子どもは中学生の男子生徒が2人。第1日目は「地球儀作り」で、新聞で地球儀を作ります。小さく丸めてその上に新聞紙を重ねて大きくしていきます。地道な作業ですが子どもは黙々と作っていま

す。保育士さんも一緒に挑戦し、固く丸める作業に四苦八苦。あっという間に1時間経ち、出来上がらなかったところは次回までの宿題となりました。無理のない程度にと保育士さんに伝えましたが、次の日にはもうできていました。

2日目は球体に青色を塗っていきます。そのあとは世界地図を切り取りました。3日目は地図の張り付けです。球体に平面図を張ることの難しいこと。子ども達の出来上がりの良さが手先の器用さや集中力を物語っています。「科学実験教室」の1日目は「光と虫メガネ」と題し、外に出て虫メガネで紙を焼いたり、仮説を立て実験で実証したり、手作りカメラを作ったり。看護師さんも子ども達も感動しながらの実験でした。手作りカメラを持って病棟の多目的室で見えたら、他の看護師さんも来てみんなで覗きあい、あちこちで感動の声が上がっていました。

2日目の「科学実験教室」は万華鏡作り。四角い筒を作り、その中に鏡板を三角に入れ、液体の中にきれいなビーズなどが入った試験管を入れて出来上がり。ゆっくりと落ちてくる色とりどりのきれいな物に癒され、ずっとのぞいていました。今回、時間がたっぷりある子ども達に、少しでも楽しい時間を過ごしてもらうことができ、保育士さんや看護師さんの手助けにもつながったのではと思いました。

後日、無事退院した男子に町中でばったり会った時、声をかけてもらい、親に一生懸命、私のことを話している後ろ姿が忘れられません。

アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【子ども】

- Q1. ①とてもよかった / Q2. ⑤ぜひやりたい / Q3. ④月1回くらい /
 Q4. 良かったこと—やさしくおしえてくれたこと / 悪かったこと—ない /
 Q5. 年齢 14 才・おとこ / Q6. ②かんごしさん ③ほいくしさん / Q7. 地名あてクイズ

【医療関係者】

- Q1. ②とてもよかった / Q2. ③わからない ④やるとおもう ⑤ぜひやりたい
 Q3. ③週に1回くらい ④月に1回くらい /
 Q4. 良かったこと—地理を覚えることが出来た・子どもと一緒に楽しく製作できた
 3日間あり、楽しんで待つことが出来た・実験は興味深く良かった
 Q5. 37 才・おんな・看護師 36 才・おんな・看護師 56 才・おんな・保育士 /
 Q7. 日常使用できる物作り・自然に関する実験 /
 Q8. 実施前—参加する子どもにあってるか、楽しめるかなど
 実施中—子どもと一緒に製作していたがお手伝いにまわった方がいいのか迷いながらやっていた
 ・途中参加で苦労するところもあり大変だった
 実施後—達成感があった
 Q9. 期待—スタッフ内ではできない内容であること・児が楽しい時間を他児と共に過ごせる
 結果—子ども達が楽しめたことでとても満足しました・「科学実験」ということで、虫めがねを使用し
 て子どもも楽しく過ごせた・大変な作業でも頑張っで達成感があったと思う
 Q10. 実施サイド…児の情報を提供し、児に合わせたプログラムだとよいと思う
 連携…児の情報を提供し、児に合わせたプログラムだとよいと思う・事前の打ち合わせが直接あって、お
 話ができたと思います・行う内容をもう少し詳しく教えて下さると嬉しい。他の子も誘える・就学前のお子
 さんで長期入院になっている子ども達への遊びがあればと思います。 (コーディネーター 水野裕子)

ケース 2. 入院病児に付き添う親を対象としたレスパイトケアプログラム 「ホッとサロン」



プログラム名	「ホッとサロン」全 3 回
実施日	① 2010 年 9 月 29 日 (水) 面談室 13:00 ~ 15:00 ② 2010 年 12 月 1 日 (水) カンファレンスルーム 13:00 ~ 15:00 ③ 2011 年 2 月 15 日 (火) カンファレンスルーム 13:00 ~ 15:00
企画内容	子どもに付き添う方（お母さんやおばあちゃん）が、少しだけ子どもから離れてホッと楽しい時間をすごしてもらえるよう、簡単な作業で仕上がるものを毎回制作しながら、ひと時をすごして頂く。
参加者	① 17 名（乳児 1 名 幼児 3 名 小学生 3 名 保護者 10 名） ② 9 名（幼児 2 名 保護者 7 名） ③ 14 名（乳児 1 名 幼児 1 名 小学生 4 名 保護者 6 名 院内学級教師 1 名 保育士 1 名）
実施施設	金沢大学付属病院 面談室 カンファレンスルーム
コーディネーター / 団体	高木真理子 / 子ども夢フォーラム スタッフ 2 名

実施までのプロセス

A プログラムの打合せの際、B プログラムの実施の可能性を打診したところ、とてもニーズが高いことがわかった。付き添うお母さんたちへのフォローの必要性を感じつつ、そこまでとても手が回らないことを、看護師長や病棟医長が訴えられていた。そして継続的な関わりが欲しいと話されていたことも印象的だった。

年 1 回開催の A プログラムとは違った少人数体制での実施を考えた。また、A プログラム実施翌日に 1 回目の B プログラムを実施したため、参加してもらいやすかった。直後の看護師長のヒアリングでは、実施団体を信頼しているからと言われ、今後の継続にむけ期待されていることを感じた。参加者の感想には、月 1 回や毎週実施を希望する声が多かったが、当面、2 ~ 3 か月に 1 回の実施を重ねていく予定。日程の調整などは、看護師長とメールでやりとりしている。

当日の様子

①「フォトフレームづくり」

前日上演したAプログラムの写真を会場の壁に貼ってBプログラムへの参加を待った。我が子が写っている写真を探す微笑ましい光景が続いた。上限3枚の写真プレゼントも好評で、フォトフレームづくりへの参加を促しやすかった。会場は終始にぎわっていた。作り終えた方が子どもを抱っこして再び会場へ。他の方の制作中も楽しそうに見たり話したりしていらしたのが印象的だった。飲み物やお菓子は、子ども同伴の場合、勧められないことがわかり次回にむけて反省。

②「Xmas ツリーづくり」

厚紙で用意した三角形のツリーにこれも用意されたXmas向けのトナカイやサンタの絵に色を塗り、ツリーに差し込んで完成！子どもが寝てる間に来たおかあさんの「あ〜ホッとするわぁ」という声が印象的だった。来れないお母さんの分のキットを持ち帰る人もいた。前回の部屋が狭かったので、少し広めの部屋を準備していただいた。場所が分かりづらかったため、参加を断念されたおかあさんもいらしたと後で聞き、チラシでの誘導などの工夫が必要と反省。

③「ぬり絵で手づくり紙しばいづくり」

入院して間もないお母さんや、毎回、参加してくださるお母さんたちとの出会いがあった。今回は、紙しばいづくりを楽しみにまっていたという女の子がたくさん参加してくれたのが印象的だった。「良い気分転換になりました」「子どもの笑顔がみれてよかった」という感想があり、実施していくことの意味は大きいと実感した。

アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

◆1回目 2010年9月29日(水)

感想回答数6名

- ・感じたこと/とてもよかった5名・よかった1名/
- ・また参加しますか?/ぜひやりたい5名・やと思う1名/
- ・頻度/月1回3名・毎週3名

◆2回目 2010年12月1日(水)

感想

- ・あ〜ホッとする〜/簡単でいいわ/
- ・来れないお母さんにも作り方教えてあげるわ/こんな企画があったら必ず参加するつもり!

◆3回目 2011年2月15日(火)

- ・良い気分転換になりました。
- ・なかなかぬり絵することなくとまどったけど楽しかったです。子どもの絵をかいてくれてうれしかったです。
- ・急に入院となりびっくりしましたが、家族との調節で順調にすすんでいます。きょうは保母さんに紹介され、お仲間に入れていただきましたが、楽しく、折り紙やぬり絵と過ごせました。気分転換になり、ありがとうございました。
- ・子どもが楽しそうにできて嬉しく思いました。きょうは参加させていただきどうもありがとうございました。

(コーディネーター 高木真理子)

ケース 3. 病院併設特別支援学級の授業とした創作プログラム 「ウキウキ・ワクワク工作」



プログラム名	「ウキウキ・ワクワク工作」
実施日（回数）	2010 年 10 月 19 日（火）10:00 ～ 12:00（1 回）
企画内容	病院併設の特別支援学級の授業とした創作プログラム ①牛乳パックでつくる不思議なサイコロ、フリスビー、紙とんぼ ②毛糸で編むミサンガ ③折り紙で作るイタリアンボックス、こま ④ビーズのストラップ
参加者	23 名 小学生 6 名 中学生 6 名 保護者 3 名 ドクター 1 名 看護師 1 名 校長先生 担任教師 1 名 副担任教師 1 名 英語の先生 2 名 教師 1 名
開始～終了時間	10:00 ～ 12:00 2 時間
実施施設	独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 特別支援学級（院内学級）国府台小学校教室
コーディネーター / 団体	桑原信子 / 特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター 指導者 4 名 スタッフ 2 名

実施までのプロセス

ホッとをもってプレゼントプログラム A のコーディネートをしなが、院内学級の担当の先生の希望もあり実現した。当初のヒアリングではありえない話だと感じたが、子どもたちとも以前から面識のある千葉県センターのスタッフが講師となってできるなら可能であると判断していただいた。家庭科・図工の授業としての位置づけで工作や折り紙などのプログラムを企画した。子どもたちが無理なく、負担感なく参加してもらうための配慮として①子どもたちの自己決定、達成感、満足感を大事にする②手作りの楽しさを味わう③毛糸の色やマジックの色、ビーズの色などは子どもが選べるような声掛けや見守りをする④丁寧に説明し急がせない⑤子どものプライドを大事にすることをスタッフと担当の先生と共有した。

当日の様子

学校の授業時間の活用ということで実施、いつものような登校風景となったが、普段見慣れていない大人も多く、少し緊張気味だったかもしれない。国府台小学校本校から校長先生がみえ、挨拶をした。教室の各コーナーに机が準備され、子どもたちが作った手作りの看板がそれぞれ用意してあった。スタッフ紹介後、子どもたちは興味のあるコーナーに参加することになった。約2時間の間、全てのコーナーを回りたいと頑張っていた子もいたが作業をしながらぼつぼつと自分のことを話してくれる子もいた。全体を通し、気を使う子が多いと感じた。スタッフも自然体でいこうと思っていたので緊張することなく子どもたちと交流できた。

アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【子ども】

- ・いろいろなものがつくれてよかった（11歳こども）
- ・竹とんぼやフリスビーをとばせてよかった（11歳こども）
- ・いろいろつくっておもしろかった（11歳こども）
- ・いろいろたいけんできとてもおもしろかった（11歳こども）

【保護者】

- ・作品が出来上がる時の感動がよかった（43歳女）
- ・色々な作品が出来上がってきてとても楽しくアツという間に時間が過ぎました（47歳保護者）
- ・子どもたちができることを味わえてとてもよいと思います（40歳女保護者）
- ・身近なもので難しすぎず、いろいろつくれることがよかった（32歳女）
- ・子どもたちが新しいことをやること、社交することがよかった（31歳男）
- ・いろいろな種類がふえていくとよいともっと楽しいとおもう（40歳女保護者）
- ・数時間の間にいろいろな種類のものが作れてよかった（32歳女）
- ・とてもよいプログラムだと思います（31歳男）

【医療関係者】

- ・子どもたちがこんなに集中できるとは思わなかった（医師、教師からのコメント）

（コーディネーター 桑原信子）

ケース 4. つきそうお母さんのリフレッシュプログラム

「アロマでリフレッシュ♪ & バルーンアートあそび」



プログラム名	「アロマでリフレッシュ♪ & バルーンアートあそび」
実施日（回数）	2010 年 11 月 10 日（水）① 13:30 ～ 15:40 ② 13:30 ～ 16:00
企画内容	<アロマでリフレッシュ♪> ハンドクリームやリラックスプレー、石鹸の中から 1 つを選んでつくる。 ハンドマッサージ、フットケア等のスキンケアでくつろぐ。 <バルーンアートあそび> ・動物などを講師の指導でつくる。・作ることのできない子どもにはプレゼント。 ・リフレッシュタイムに参加しない付き添いの親と子がいっしょにつくる
参加者	① 31 名 保護者 20 名 ドクター 3 名 看護師 3 名 アロマスタッフ 5 名 ② 36 名 乳児 2 名 幼児 3 名 小学生 6 名 中学生 1 名 保護者 4 名 ドクター 2 名 看護師 5 名 看護学生 3 名 ドクター・実習生 2 名 ボランティア ・その他 8 名
実施施設	和歌山県立医科大学附属病院①小児科病棟カンファレンスルーム / ②プレイルーム
コーディネーター / 団体	岡本瑞子 梶野紗希 / 特定非営利活動法人子ども NPO 和歌山県センター

実施までのプロセス

HOT もっとプレゼント 2010 の説明とヒアリングをさせて頂いた時、師長さんの話から付き添いの親のストレスについて切実なものを感じると共に、小児科病棟は子どもだけでなくお母さんも対象であることを痛感した。お母さんの疲れからくる苛立ちをぶつけるその標的は看護師さんにいくだろうと予想がつく。子ども、お母さん、医療現場の方々のいい循環を作る最初の一步をと考え、お母さんを対象とした企画を約束。私達が運営している子育て支援の現場で、月 1 回母親のストレス解消のために行っているアロマセラピーに決定。「アロマコーディネータークラブ」は NPO として私達と一緒に子育て中の人に関わって 10 年、お母さん達のニーズを汲み取って進めてくれるのと、常々病院で親たちのためにも役に立ちたいという話もしていたので安心してパートナーになってもらった。企画を師長さんに話す段階で、それは子どもの託児があってこそ実現可能だと気付かされた。気軽にできて付き添いの方も楽しめるもの、それはやはり私達がいつも遊んでいるバルーンアート。これなら得意分野、スタッフ養成も簡単にできるということで、バルーンアートあそびを並行して行うことに。当日は看護師や実習生のサポートがとってもよかった。

当日の様子

病院のあちこちにポスターが貼ってある。1時間で準備は終了。カンファレンスルームのアロマでリフレッシュ♪は看護師さんが名簿を作り、子どもとお母さんの様子を見ながらちょうど良い時を見計らって声を掛けに行く等の工夫のおかげでスムーズに進行。疲れた顔で入ってくるお母さん達を温かく迎え入れ、緩やかにハンドマッサージに入る。次第にリラックスして「気持ちいい」と笑顔に。胸につまっていた不安や想い、とりとめもない話も。マッサージの後はフットケアをする方も。大抵は自分の好きな香りを見つけるのを楽しみながらローションを作って嬉しそう。「また頑張れるわ」と明るく戻って行かれた。

並行して行ったプレイルームでのバルーンアートあそびも子ども達の心をとらえたようだ。最初はバルーンに触ることすらしなかった子が積極的に作れるようになったり、普段は喋らない子が喋っている姿等、師長さんも驚くほどの変化があった。またわずかでも自分の時間を持てたことがお母さんの気持ちにゆとりができ、子どもと一緒にバルーンを楽しむ姿が見られた。非常にゆったりといい時間が流れ、参加できなかった子ども達にはバルーンを病室へ届けた。大学教授や医師が見学を訪れ、「ぜひ継続を。応援したい!」と言って下さる等、予想以上の成果だった。

終了後、Aプログラムにも参加した保護者が、「アンディ先生のマジックが子どもの心をどんなに和らげてくれ、あの時どんなに嬉しかったか、長い間、子どもの笑った顔を見てなかったんです。実は昨日も泣かれ辛かったが、今日、ハンドマッサージをしてもらって心が癒されました。ありがとう。」と話してくれた。こんなに自分の気持ちを話せるほどリラックスできたことを知ったのが最大の収穫だった。

アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【子ども】(バルーンアート)・ケンヤとバルーンの剣でバトルした/・シュウタと剣をしたの面白かった

<変えてほしいこと>・長い入院になると週1位このような体験をさせてもらおうと嬉しいな

<他にやってほしいこと>・色んなことをしてもらいたい!ありがとうございました。

【保護者】<よかったこと>(アロマ)・保護者、付添の人が助かると思います/・ハンドマッサージは初めてだったので気持ち良かったです。/・アロマの香りで安らいだ/・母親だけで和んでしているので、少しの時間でしたがホッとしました/・体が楽/・足・肩など選択できても良いと思います/・リラックスさせて頂き、毎日の付き添いをまた頑張れるような気持ちにさせてもらいました/・心も身体もリラックスできました/・疲れがスーッととびました。とても気持ち良かったです。匂いがとても良かったです。

【医療関係者】<よかったこと>・母親達の気分転換になり、表情が良かった。/・保護者(母親)の方が楽しみにしていた事と、喜んで病室に戻って来られた事。/・自分の必要性に応じて、ミストやローション・ソープを作れた事、参加者は楽しかったようです。/・家族の方が癒されたと喜んでいました。みんなで楽しめました/・保護者、付添の人が助かると思います。/・男の子には剣、女の子にはお花など好みにそって作って下さった事。

<実施前>・人数と場所と時間/・人数が集まるかどうか/・なかなかちょうどの時間には始まらなかった

<実施後>・長時間になり担当者の方々には大変お世話になりました。/・母親達は喜んでいました。子ども達もバルーンアートを楽しんでいた。子どもが、母親に行ってほしくないという事があり、一緒に参加できたら良かったのと思った(年齢によるが)

<期待したこと>・母親の笑顔/・家族の気分転換/・子ども達が楽しく過ごす事ができる/・風船を自分でも作れるのか/・制限された遊びの中、新しい遊びに触れる事で楽しめること

<期待に対する結果>・予想以上の結果であった/・お母さん方は「気持ち良かった」や「今度、看護師さんにもやってあげるよ」「子どもに塗ってマッサージしてあげよう」と言い喜んでいた。(コーディネーター 岡本瑞子)

ケース 5. 入院児とその家族を対象にした絵本の展示とワークショップ 「絵本ひろば」



プログラム名	「絵本ひろば」
実施日（回数）	① 2010 年 12 月 14 日（火）15:00 ～ 12 月 24 日（金）12:00 ② 2010 年 12 月 14 日（火）15:00 ～ 15:30
企画内容	①絵本ひろば / ②クリスマスカードづくりミニ・ワークショップ 入院中の子どもとその家族を対象にクリスマスや冬のおはなしをテーマにした絵本の展示を 10 日間常設。会場はプレイルームがある部屋の一角で、自由に手に取って読んだり、自分の病室に持って行って読んだり、保育士さんが読み聞かせできるようにした。クリスマス・カードづくりのミニ・ワークショップも実施した。
参加者	①常設だったのでカウントしていない ② 11 名（乳児 2 名 幼児 3 名 小学生 3 名 保護者 2 名 医療保育士 1 名）
実施施設	独立行政法人国立病院機構福岡病院
コーディネーター / 団体	高宮由美子 / 特定非営利活動法人子ども文化コミュニティ スタッフ 4 名

実施までのプロセス

過去 2 年間、10 日間ほどの期間限定での絵本展示が大変評判がよく、病院側の希望も高く、病院の協力を得ながら、実施の提案から展示設営、撤収なども円滑にすすめることができた。絵本の選書は美術館での絵本展を開催するなどのノウハウを持っている子ども文化コミュニティの専門スタッフが行い、展示計画をたてた。クリスマスの絵本にちなんだ参加型の企画としてクリスマスカードづくりのミニ・ワークショップを加えた。病院側の保育士さんが日常の絵本の管理をしてくださった。撤収は子どもたちが冬休みで自宅に帰った後に行うよう配慮した。

当日の様子

プレイルームに足を一步踏み入ると、まるでクリスマスの世界が広がっているようなクリスマスをテーマにした絵本の展示に、子どもたちも、保護者や看護師、保育士さんなどの大人も「ワー。」という歓声と共に絵本選びを楽しんでいるようだった。時間や読む場所の拘束や制約がなく、自由に自分の意思で絵本と関わるができるのが魅力になっていると思う。

絵本の展示設営をした日に、プレイルームで簡単に作れるクリスマスカードづくりのミニ・ワークショップを行った。色とりどりの紙やリボン、シールやボンボンを使って保育士さんや付き添いの保護

者と一緒に楽しんで作っていた。作りながらおしゃべりできるのもうれしそうだった。

アンケート結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

【子ども】

よかったこと

- ・ざいりょうがいろいろあってかわいいカードができたのでうれしかった
- ・おかあさんのぶんとおばあちゃんのぶんをつくったこと
- ・カードをあげるひとのことを思ってぶんしょうをかんがえました

【保護者】

よかったこと

- ・子どもにもつくりやすいような材料が用意してあったこと、
- ・かわいい小物がたくさんあって、うれしい気分になりました。

その他

- ・カードづくりは単調な毎日をすごしている子どもの気分転換になりました。

絵本がたくさんあるのはとてもうれしいです。

- ・子どもはまだ小さいのでよくわからないかもしれませんが、親のほうが楽しい時間をすごせました。ありがとうございました。

【医療関係者】

- ・娯楽の少ない入院生活の中で楽しい時間をすごせたようだ。
- ・毎日絵本を見に来る子や、読み聞かせをされるおかあさんなどみなさんに好評だった。
- ・看護師や医師も絵本をなつかしそうに開いている姿がみられた。
- ・アイデア豊富なカードづくりが準備されていて、日ごろの保育への参考になった。

(コーディネーター 高宮由美子)

Ⅱ - 2

プログラムタイプ A 実施結果

タイプ A

2 年間の「ホッとアートプレゼント」実施アンケート比較分析

タイプ A

「ホッとアートプレゼント」15 のケース

実施病院 15 施設

参加総数 1,337 名

（会場参加者…子ども：乳児～高校生 527 名 / 大人：保護者 300 名 病院関係者 417 名）

（病室訪問…52 病室 子ども：93 名）

スタッフ数 75 名

【プログラムタイプ A】

2 年間の「ホッとアートプレゼント」実施アンケート比較分析

今年度は、タイプ A・タイプ B 二つのタイププログラムを提供できるよう進化した。結果は、施設のニーズによりタイプ A の「ホッとアートプレゼント」の実施は 15 箇所となり、本プログラムは継続 3 年目となった。アンケートは前年度と同じ調査項目とし、比較検討することでプログラムの課題と成果を明らかにする目的で行った。

分析は、今年度実施した 15 箇所のアンケート結果を集約し、昨年度実施した 20 箇所のアンケート集約結果と、項目ごとに比較した。(アンケート用紙【子ども用】【保護者用】【病院関係者用】／ pp.110-112)

「ホッとアートプレゼント」プログラムは、14 箇所がプログラム実施 2 年目または 3 年目となる施設で、今年度初めて実施したのは 1 施設であった。

アンケートは昨年度同様プログラムに参加した「子ども」「保護者」「医療関係者」を対象に、プログラム終了後に配布し、その場で記入・回収した場合と、施設判断で担当者が後日回収し、返送された場合がある。

今年度の「ホッとアートプレゼント」の全参加者数は、1,337 名(乳児～高校生 527 名、保護者 300 名、病院関係者 417 名、病室訪問 52 病室・子ども 93 名)であった。昨年度の参加者は 1,086 名で、実施箇所数は 5 箇所減り、参加者総数は 251 名増えている。(昨年の参加者総数には、病室訪問をした子どもの人数はカウントしていない)

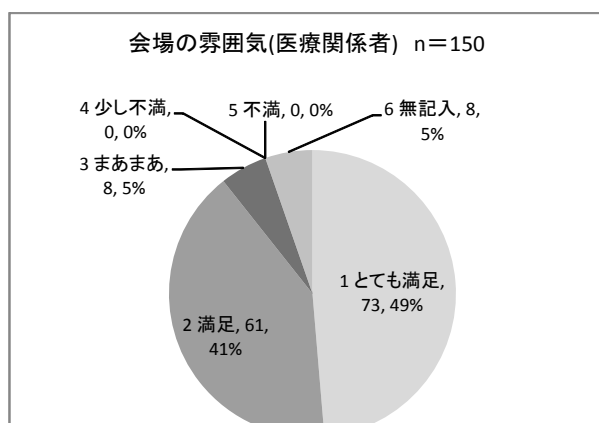
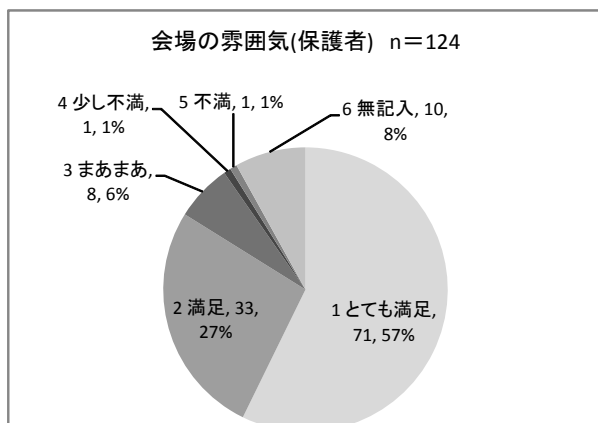
一方、アンケート回答者数は、昨年度が、子ども 190 名、保護者 138 名、医療関係者 165 名で計 493 名、今年度は、子ども 173 名、保護者 124 名、医療関係者 150 名で計 447 名であった。参加者数に対するアンケート回収率は、昨年度が 45% に対し、今年度は 33% であった。

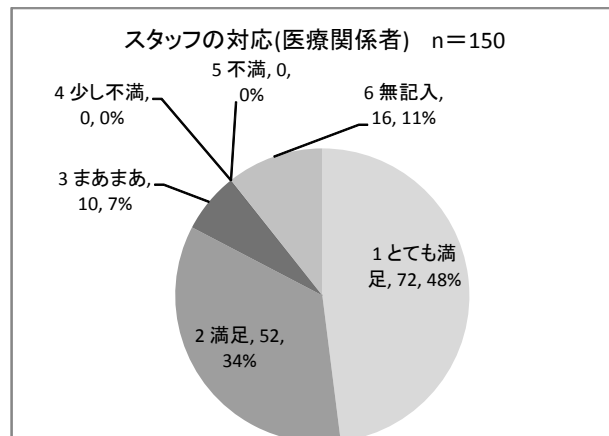
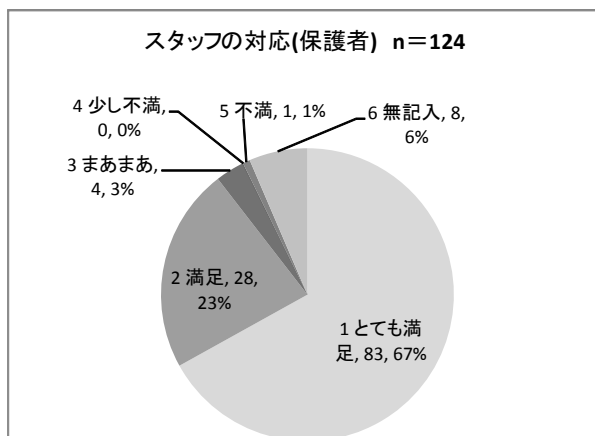
アンケートの回答結果を総体として見ると評価に大きな変動はなかったもので、以下に、いくつかの特筆すべき項目について見ていくこととする。

・「会場の雰囲気」「スタッフの対応」

～改善の余地あり～

調査項目の中には、保護者と医療関係者の双方に聞いているものがある。そのうち、「会場の雰囲気」は、保護者では、「とても満足」の評価が昨年度の 40% 強から 57% に上昇する一方、医療関係者では 55% 強から 49% に低下している。「スタッフの対応」については、「とても満足」が、昨年度は保護者と医療関係者ともに 55% 程度であったが、今年度は保護者が 67% に上昇し、医療関係者が 48% に減少した。保護者と医療関係者の評価のずれの原因を特定するのは難しいが、相対的に医療関係者の評価が厳しくなっていることがわかる。「とても満足」と「満足」を合計した場合決して低い評価なわけではないが、2 年目以上の実施となる病院がほとんどであるこ



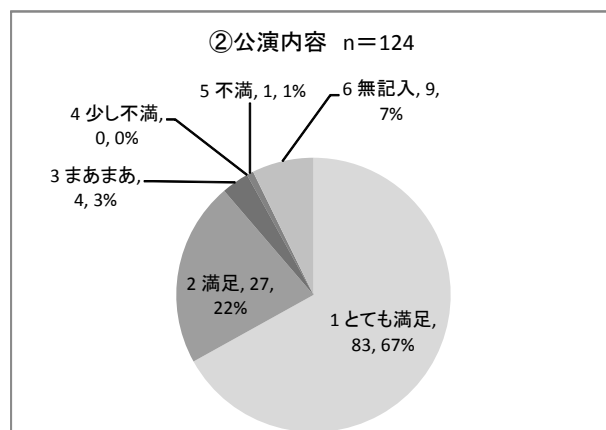


とを考えると、本来は昨年度よりも高い評価になることが望ましいとも言える。医療現場のニーズに見合った会場づくりや雰囲気づくりについて、改善の方策を模索していきたい。

・保護者による「公演内容」の評価

～昨年度より上昇～

保護者の公演内容の評価が「とても満足」が67%であり、昨年度より10%近く上昇している。病院別に見ると、3箇所の病院で、アンケート回答者の全員が「とても満足」と回答している。



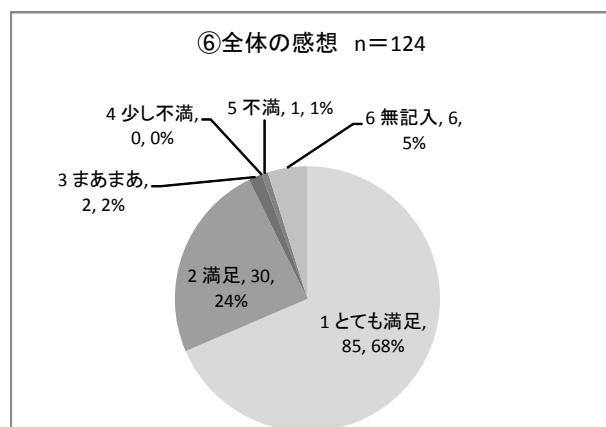
・保護者の「全体の感想」の評価

～「とても満足」の減少～

保護者の「全体の感想」は、昨年度は、「とても満足」が91%であったが、今年度は「とても満足」が68%であった。3割近く減少した。しかし、「とても満足」に「満足」の24%を合わせると、今年度も92%と高い状態を維持している。

「全体の感想」を「満足」以下と回答した33名の保護者のうち、「公演内容」を「とても満足」と評価した方は8名のみで、「満足」以下の回答が24名、無記入が1名であり、「全体の感想」と「公演内容」の評価には一定の相関関係が見られる。

なお、施設別で内訳を見ると、「とても満足」の回答が少なかった施設がある程度集中している。この理由を求めていくと、ある施設では、昨年と同様の年齢層を見込んでコーディネートしたが、実施日に参加した子どもの年齢が大きく下がったためと思われる。



このプロジェクトの今後の課題として、参加する子どもの年齢層に変動があることを前提に、対象年齢に柔軟性のあるプログラム構成を検討する必要があるだろう。

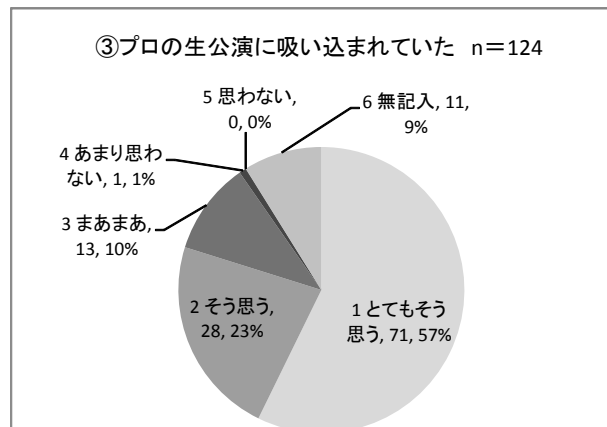
・保護者の「プロの生公演に吸い込まれていた」の評価

～昨年度より高い評価～

保護者に「子どもの様子」としてたずねた、子どもが「プロの生公演に吸い込まれていたか」という質問の選択肢を比較すると、今年度は「とてもそう思う」の評価が57%、「そう思う」が23%で、昨年度の「とてもそう思う」0%、「そう思う」30%に比して、今年度の評価は大きく上昇している。

また昨年度は「無記入」が50%を超えていたが、今年度の無記入は9%と大きく減少した。またこの評価は、施設別で見ても評価が集中しておらず全体傾向として現れていることから、個人的・個別的な要因が関わっていると思われる。

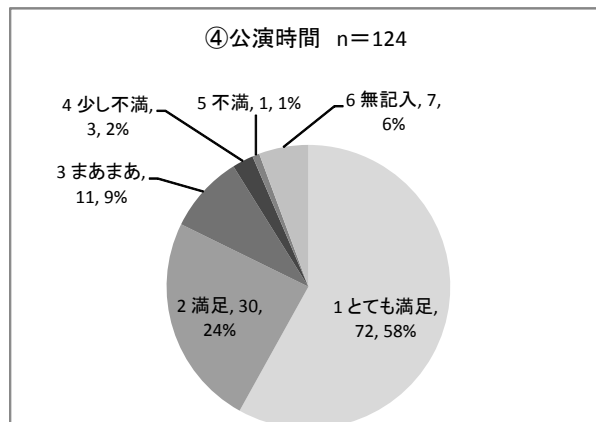
この理由としては、作品のレベルがより高まったとも考えられるが、むしろ、保護者に対する「子どもの様子」をたずねる質問群は、保護者の感覚を前提としていて、プログラムの意義を事前にインフォメーションすることで、子どもに対する観察が意識化されたのかもしれない。今年度は事前インフォメーションにプログラムのより詳しい内容を盛り込んでおり、それが作用した可能性も今後検討していきたい。



・保護者の「公演時間」の評価

～一部で低評価～

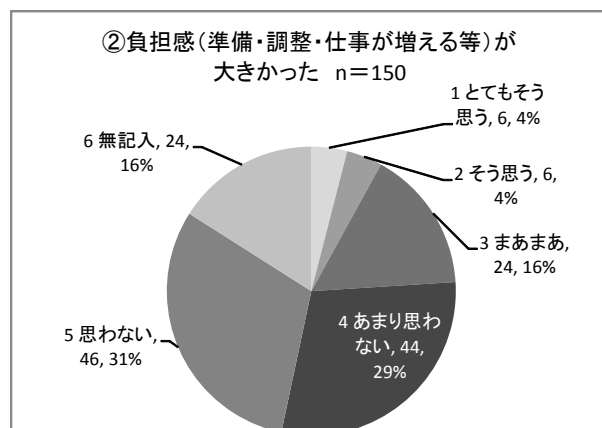
ある施設では、「公演時間」に対する満足度が低かった。興奮度が低く、時間が長いと感じられたのかもしれない。健常児を対象とした公演と異なり、興奮度だけで評価すべきとは言えないこともある。病状によっては、過度の興奮が却って疲れにつながる危険性も考慮すれば、「時間が長い」と感じるのであれば、むしろ公演時間を短くする方向で検討すべき課題と考えられる。このアンケートだけでは判断はできないが、満足度と安全性の確保に努めたい。



・医療関係者の評価

～病児のQOL向上に有意義と評価～

医療関係者の「負担感が大きかった」は、昨年度は「あまり思わない」と「思わない」で計70%程度であったが、今年度は、「あまり思わない」29%、「思わない」31%で計60%であり、医療関係者の負担感が増えた結果となった。この課題は改善しなくてはならない課題だと認識しており、前年度よりプロジェクトの難しさを最も感じる



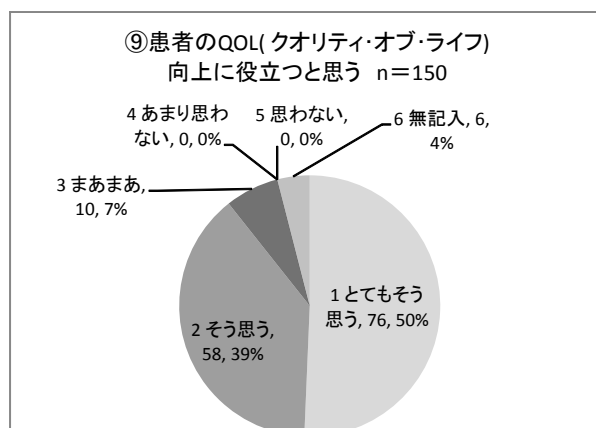
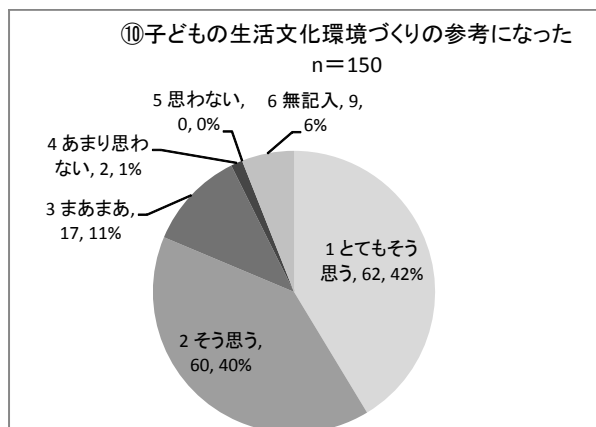
要件として注目している一つである。

この課題の難しさは、より細部までの打合せを必要とする医療現場もあることに起因している。打ち合わせを緻密にするメリットとしては、「安心材料が増える」、「より状況に適合させた企画にできる」などが挙げられる。その一方で、デメリットとしては医療サイドの負担感も増える可能性があり、さらに各の医療現場ごとに基準や手続きが多様であること、担当者の異動に伴う手続きの変化があることなど、コーディネーターがバランスの取り方に最も気遣うポイントとなっている。しかし、この課題はプロジェクトの性質としても、異なる組織間の連携としても不可避であることから、ケースを積み上げる中で最適化を図るためのスキームをより洗練させていきたいと考えている。

一方、「子どもの生活文化環境づくりの参考になった」の項目では、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が、昨年度の75%程度から82%へと上昇した。

また、「患者のQOL向上に役立つと思う」の項目で、「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が、昨年度の85%から89%に微増し、昨年同様高い評価を得ている。上記の三項目の評価を合わせて考えると、負担感が増えているにもかかわらず、入院病児のQOL向上にとって芸術や文化が重要な意義をもち、また、そのための方法としてホッとアートプレゼントが有効であると、多くの医療関係者が認めていることがわかる。今後も、入院病児のQOL向上に寄与しつつ、医療現場のニーズに適合するコーディネートを行えるよう検証を続けていきたい。

(高宮正貴)



1. 島根大学医学部附属病院

「スーパー人形劇・あかずきんちゃん」



実施場所	島根大学医学部附属病院 3階西病棟ディルーム
実施日時	2010年8月24日(火) 13:30～14:30
作品名	スーパー人形劇・あかずきんちゃん (人形劇団ののはな)
参加者数	83名 / 乳児3名 幼児13名 小学生11名 中学生1名 保護者25名 他科・外来患者等6名 ドクター12名 看護師6名 保育士1名 事務職3名 ボランティア・その他2名
病室訪問 (ICU 含む)	3病室 7名
コーディネート団体	特定非営利活動法人しまね子どもンセンター スタッフ5名

実施病院について

島根大学医学部附属病院は、「地域医療と先進医療が調和する大学病院」の理念のもとに、地域の拠点病院として各分野で先駆的医療を提供している。また、大学病院で全国唯一の開放型病床システムを取り入れている。職員の QOL 向上に取り組むとともに、院内コンサートなど患者を癒す環境づくりにも力を入れている。

公演の内容

「スーパー人形劇」はスーパーのレジ袋で人形を作り、動かす。だからスーパー人形劇。目の前でウサギやタヌキが出来上がっていくのを、目を丸くして見ている子どもたち。

「あかずきんちゃん」は、舞台が歩いてくる！一人で演じる肩掛け式の舞台で、お話もみんなが知っている「あかずきんちゃん」とはちょっとちがう・・・。

実施までのプロセス

昨年の実績があるので、6月17日小児科の山口教授にアポをとり、お訪ねした。今年もできるんですかと喜んでいただき、「今年は人形劇がいいですね」との言葉に、「あかずきんちゃん」をおすすめした。ディルームは半分食堂を兼ねており、仕込みに30分しか使えない。その条件での人形劇を考えたとき、この作品がいいと思った。

病院のOKが出るとすぐ「人形劇団ののはな」に連絡をし、ちょうど島根に来られる機会があったので、7月8日に会場の下見をしていただいた。その時、小児病棟の先生や看護師長さんに納富さんを紹介した。

当日の様子

開演 15 分前になると、招待状を持った子どもたちが会場にやってきた。お母さんと手をつないでいる子、点滴スタンドを転がす看護師さんと一緒にやってきた子どもたち、ストレッチャーでやってきた子もいた。そんなに広くはないディルームは、40 脚のパイプいす、8 本の点滴スタンド、4 つのストレッチャーでいっぱいになった。

開演時間になり、出演の「人形劇団ののはな」の納富さんが登場、スーパーのビニール袋を手に「スーパー人形劇」がはじまった。出雲市の大きなスーパー「ゆめタウン」でもらってきましたとの言葉に客席がなごんだ。普通のビニール袋が、見る見るうちにタヌキになる。あっというまにお化けに変身！子どもたちは見逃さないように出演者の手元を見つめている。人形ができると、ほっと笑顔になり、「うさぎさん！」「ぶたさん！」と賑やかだ。次の演目は「あかずきんちゃん」。ハーモニカの音に合わせて舞台が歩いてくると、不思議そうな子どもたち。舞台から人形がのぞくと、ワーッと笑い声が上がった。みんなの知っている赤ずきんのおはなしとちょっとちがう「あかずきんちゃん」、森の中でのかくれんぼや、赤ずきんちゃんが棒でオオカミをたたく場面は大ウケけだった。

公演の後、見に来られなかった子どもたちの病室訪問。3 つの病室の 6 人と ICU にいた一人を訪問した。納富さんが子どもたちにちいさな“いもむし君”を渡すと、子どもたちの顔がほころんでゆく。“いもむし君”はベッドの手すりの上を歩いたり、口をあけたりする。それをやさしい目でじーっと見ている子ども。自分でやってみようとする子もいる。“いもむし君”がともだちになれるかもしれないと感じた。

ディルームに「あかずきんちゃん」を見に来ることはできなかったけれど、また違う楽しみをプレゼントできた訪問だった。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

・レジ袋のが楽しかった。/・あかずきんちゃんがおおかみにあんなものでたたくのは思ってもいませんでした。(絵入り) /・とてもリアルで「ツッコミ」をつけるところがたのしかったです。とくにハチさんのところがたのしかったです。/・赤ずきんちゃんが普通の絵本のお話と少しちがっていて、オリジナルでよかった。オオカミと赤ずきんちゃんの会話がおもしろかった。/・おおかみなどにんぎょうのうごきがすごくおもしろかったです。またみたいです。

【保護者】

・先週手術でしたからまさか観ることができるとは思っていませんでしたが(心の中ではとっても観たいと思っていましたが) 子どもと二人最後まで観させていただくことができてうれしかったです。二人とも手術をしているので、二人一緒に参加できたことが何よりうれしかったです。/・今回は通院で、たまたまポスターを見て見にきました。毎回の通院はどう病院ですぐすかを考えてきます。こういう機会があれば、子どもは病院グライも少しはなくなると思います。子どももすっかり劇に吸い込まれ、夢中で見てました。またの機会を楽しみにしています。/・なかなか外に出れないし、部屋の中ではたいくつなので、もっとたくさん色々なものを見せてやりたいと思います。年に 1 回ではなく、月に 1 回はしてほしいと思います。

【医療関係者】

・今回は、ストレッチャーや車イスの子、重病の方が多く、少しでも楽しい時間をすごしてほしいと思っていたので、子ども達の楽しそうな顔が見れて本当に良かったです。入院や病気によるストレスは本当に多く、見て楽しんだ時は忘れられたのではないのでしょうか。また来て子ども達や家族、私たちに元気を与えてください。

(コーディネーター 中田朋子)

2. あいち小児保健医療総合センター

「アンディ先生のストリートマジック」



実施場所	あいち小児保健医療総合センター①内科プレイルーム ②心療内科プレイルーム
実施日時	2010年8月24日(火) ① 10:30～11:30 ② 14:00～15:00
作品名	アンディ先生のストリートマジック ((有)マジックファクトリー)
参加者数	①内科 プレイルーム 33名/乳児4名 幼児6名 保護者13名 ドクター2名 看護師6名 医療保育士2名 ②心療内科プレイルーム 40名/小学生・中学生22名 ドクター1名 看護師15名 保育士2名
病室訪問	3病室 5名
コーディネート団体	特定非営利活動法人名古屋おやこセンター スタッフ4名

実施病院について

あいち小児保健医療総合センターは、県内唯一の小児医療専門病院として、小児の基礎的、先進的医療に加え、既存の医療機関では対応が十分でない医療分野に対応する機能を持つ。また、養護学校と連携し小児慢性疾患児も十分な教育が受けられるようにしている。これらの医療部門と保険部門を併せ持ち、両部門が相互的に問題解決を図るための施設として、疾病予防から、医療、リハビリまでの一貫した包括的ケアを行っている。

公演の内容

オープニングの様々な出現 & 消失 & 変化。参加型ステージマジック。五右衛門のマジック & スーパーテクニック。ストリートマジック（テレビを使って）瞬間移動、心の暗示、貫通、空き缶復活、ペットボトルの中にトランプを入れる。など。

実施までのプロセス

2年前に実施実績があり、総合医療部長の山崎嘉久先生より紹介していただいた保育士の棚瀬さんが窓口になってくださり、スムーズに演目、日程が決定。ここは、小児専門の病院で、病棟が5つに分かれていて、どこの病棟になるかは当日までは不明であったが、心療内科は、特にこういったものに触れさせたい子どもたちが多く、希望が強かった。公演の1週間前には、ポスター、子どもたちへの招待状を届け、実施まで、創造団体、病院側との打ち合わせを重ね、当日を迎えた。

当日の様子

プレイルームの設営がはじまると、ソワソワした感じでのぞきにやってきて、待ちきれない様子が伝わってくる。公演間近になると、招待状を片手に、続々と子どもたちがやってきて、あっという間にいっぱいになる。その中で、かなり大変な状況乗り越えて、今日退院という子がいて、今日の公演の話を聞いてから、保育士の棚瀬さんと、イリュージョンの出し物の準備をしたとのことで、急きょ、アンディ先生の前座に決定。突然のことだったが、アンディ先生も快く承諾してくださり、やり遂げたその女の子は、本当に嬉しそうだった。アンディ先生のマジックが始まるとちょっと緊張気味だった子どもたちが、次から次へと驚きのマジックの連続に、ぐいぐい引き込まれていく様子で、表情がどんどん変わっていくのが、印象的だった。

初めはほとんど表情のなかった中学生の子が、公演が進んでいくうちに、ビックリ顔から、笑顔や拍手もでてきて、心療内科の子たちは、特に普段なかなか心を開かず、言葉も出ないような子が多いとのことだったが、マジックの間はずっと上を向いていて、反応もかなりしていて、普段との違いに、看護師長さんから、「集中力と可能性を感じました。」との感想を聞いた。終了してからも、アンディ先生たちから子どもたちが離れず、サインを求めたり、使用したトランプをもらったりと大喜びだった。

ほんのひとときの時間かもしれないが、治療のことを忘れ、ほっとできる時間を提供できたと思う。付き添っている保護者の方たちも、楽しそうな子どもたちの様子が本当に嬉しそうで、癒しの時間と空間になったと思う。他の病棟にも来てほしいという要望も多く、この事業のニーズの高さを感じた。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・ひまがつぶれていいと思う。 / ・病院で楽しいことがあんまりないから、すごくいいと思いました。 /
- ・アンディ先生、今度は天才てれびくんにでてください。てれび戦士に会ったらすごく好きな子がいたよって言っといてください。すごく楽しかったです。ありがとうございました。 / ・パチパチパチパチ

【保護者】

- ・狭い病院の中で、子どもたちが集まって顔を合わせて、楽しみを共感できる場ができ、また、本格的なマジックだったので（子どもだましではなく）とても良かったです。名前をたずねる場もあり、お友だちの名前が覚えられ、その後の会話につながった。 / ・8 か月の子どもなので、どのように参加するのか・・とは思いましたが、マジックの内容は理解できませんが、音楽や雰囲気は十分に楽しんでいました。

【医療関係者】

- ・招待状をいただけたので、楽しみに待っている子が多かったです。斜にかまえている子（中学生など年令がわりと大きい子）が、だんだんマジックに引き込まれていく様子がおもしろかったです。病棟のスタッフも、仕事の合間に見に来て楽しんでいました。（他のイベントには顔を出さない人も、マジックは見にきていました。）とても興味深い内容だったのだと思います。
- ・子どもの特徴として、一番病が多いので、物をもらう、飲食がある時は事前の打ち合わせがあると、トラブルが少なく良いと思います。
- ・かんもくの子どもたちが、身を乗り出している姿を見ることができました。かんもくの子どもは、言葉はないけれど、手をあげて、必死にアピールしようとしていたのが印象的だった。我々の仕事にヒントになる部分が多く、参考になりました。ありがとうございました。

（コーディネーター 松野美子）

3. 和歌山県立医科大学附属病院

「アンディ先生のマジックショウ」



実施場所	和歌山県立医科大学附属病院 東病棟 7 階プレイルーム
実施日時	2010 年 9 月 22 日 (水) 14:00 ~ 15:00
作品名	アンディ先生のマジックショウ ((有)マジックファクトリー)
参加者数	65 名 / 乳児 1 名 幼児 3 名 小学生 6 名 中学生 4 名 高校生 1 名 保護者 16 名 / 他科・外来患者等 4 名 ドクター (インターン含む) 10 名 看護師 20 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子ども NPO 和歌山県センター スタッフ 6 名

実施病院について

和歌山県立医科大学附属病院は、特定機能病院として、また県の中核医療機関として地域の中小病院、診療所と緊密に連携をとりながら、高度で専門的な医療の提供ときめ細かい看護に努めております。

公演の内容

アンディ先生、五右衛門、モンブランによる参加型のマジックショウ。フォークを使ったマジック、トランプを使ったマジック、突然鳩が出現、瞬間移動、トランプをペットボトルの中に入れるマジック、一円玉を曲げるマジックなど。

実施までのプロセス

同じ病院で積み重ねていくことを大切にしたいと考えていたので、迷うことなく医大病院を選んだ。7 月に医長、看護師長、レクリエーション担当看護師に今年度の企画について説明に伺った。どこまで受け入れてもらえる可能性があるのか心配したが、ヒアリング、プレアンケート共々快く引き受けて頂いた。昨年は担当の病棟医長、看護師長さんがかわり緊張したところから始まったが、ホッとアート実施後「今後は儀礼的な側面は排除して進めてください」と言っていただいたこと、同じ担当の方という安心感から、一回目の話し合いで子どもたちに笑顔と感動をという共通の想いと信頼感の中で、スムーズに進めていけるということが確認できた。

「アンディ先生のマジックショウ」に決まってからは、鳩の出演 (?) については丁寧な説明をし、検討に十分な時間をとった。病院長、看護部長、小児科教授 (日本小児科学会副会長) に報告書と企画書と共に当日の案内をお渡した。医長、師長さんがぜひ見て欲しいというプッシュもして下さる等、ホッとアートの必要性和、ホッとアートを病院の常識としたいという気持ちが伝わってきた。

当日の様子

アンディさんたちは到着早々会場へ直行。部屋を閉めきって準備をしているのを真剣な眼差しで覗き込んでいる男女3人組がいた。どうやらマジックに特別の興味がある様子。手にはトランプやサインをしてもらうための紙を持っていて、今日をどんなに待ち望んでいたのかが伝わってきた。

師長さんの「せっかく来てくれるんだから、皆がこの会場で生のショーを見てもらえるようにしました。全員ここに来ますから病室訪問はないです。」続いて「脳外科の子どもも迎えに行っておいて。」の言葉を合図に看護師さんたちが病室へ子どもたちを迎えに行った。病棟の入り口のラインギリギリで、ずーっと立っている数日前に退院したばかりの女の子。見たいのを我慢しているのがこちらにも伝わってきて切ない。師長さんが開演寸前に「手を洗って、マスクをして一緒に見よう！ネッ！」この判断に師長さんをはじめ、小児病棟のチームワークを強く感じた。

始まりはフォーク1本が2本に。重ねていただけというただそれだけのことに、中に入りきれない看護師さんたちの後方からの喚声に会場の緊張もほぐれリラックスムードが充満した。不思議マジックは緊張と真剣な眼差し、そして笑いの交錯が何度あったことか……。生まれて間もない赤ちゃんを抱っこしたお母さんは「この子は何もわからんけど、私が久し振りに楽しい気持ちになれたので……」と話してくれた。

終了後はアンディさんたちと子どもたち、ドクター、付き添いの保護者、看護師さんたちとの大交流会。将来はマジシャンになると特訓を受け、筋がいいと褒められて大満足の子。きっといつも斜に構えていたであろう中学生が和んでいく。自分を素直に認めた瞬間のお母さんの崩れんばかりの笑顔が印象的だった。書き切れないほどの沢山のドラマがあった。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・マジックを近くで見れたからよかった。/・テレビで見るみたいにながかった。/
- ・めっちゃめっちゃ良かったです。お手伝いできてうれしかったです。/
- ・マジックもっと見たい。/・やりたい。マジック/・楽しい。

【保護者】

- ・非常に楽しく、これを目指して治療を頑張っていました。/
- ・毎日たいくつで、すごくいい刺激になったと思います。ありがとうございました。/
- ・仲間の子どもたちと同じ空間で楽しめて良かったです。ありがとうございます。/
- ・とても大切な事だと思います。中学生となり、なかなか積極的には参加できない年齢なので（思春期）、今日は見に来て良かったです。/
- ・すごく貴重な時間でした。/
- ・目の前で生のマジックを体験できた事で感動していたように思います。自分たちもたいへん楽しかったです。ありがとうございました。これからも頑張ってください。

【医療関係者】

- ・楽しそうに過ごしている様子を見て、こういう機会が増える事を願います。

(コーディネーター 岡本瑞子)

4. 金沢大学附属病院

「アンディ先生のマジックショウ」



実施場所	金沢大学附属病院 3階カンファレンスルーム
実施日時	2010年9月28日(火) 14:00～15:00
作品名	「アンディ先生のマジックショウ」 ((有)マジックファクトリー)
参加者数	33名 / 乳児4名 幼児1人名 小学生2名 中学生5名 保護者10名 ドクター4名 看護師4名 事務職2名 ボランティア・その他1名
病室訪問	4病室 8名
コーディネート団体	子ども夢フォーラム スタッフ4名

実施病院について

現在の病院と医学類は、昭和40年代にそれまでの木造建築から、平成13年9月に病棟が、平成17年10月に中央診療棟が改築され、さらに平成21年5月には新外来診療棟がオープンした。

病棟、新中央診療棟及び新外来診療棟が三位一体の連携を図ることで、より一層の機能性の向上の実現が図られている。人間性を重視した質の高い医療の提供、将来の医療を担う医療従事者の育成、臨床医学発展のための研究開発、地域医療への貢献を基本方針に掲げている。

公演の内容

モンちゃんことモンブランが最初に登場！子どもたちがモンちゃんパワーに楽しく圧倒される中、次に登場したアンディ先生がピンクのメガネをかけ、不思議な不思議なマジックの世界へ誘ってくれます。子どもも大人もいつのまにか「どうしてえ？」「どうなってるの？」と引き込まれていきます。次の五右衛門は華麗なカードマジックを披露。種明かしできないのが残念！！マジックは不思議、おもしろい、たのしい、夢がある・・・！

実施までのプロセス

教授（小児科医長）、病棟医長は、昨年の実施でお目にかかっているのでなんとなく気持ちが楽だった。事前にメールで今年度の実施も可能になったことをお伝えしたうえで、ご挨拶に伺った。

前回の取組みの様子などを振り返りながら、今年度の実施にむけて希望などをうかがい、「楽しい時間をいっぱい提供してくださいね」と話されていたことが、入院して治療に励む子どもたちの大変さを熟知していらっしゃる方だからこそのお言葉と感じ、重く受けとめた。

その時、病棟保育士の確保を要請していることも聞きし、入院中の子どもに付き添う親（ほとんど母親）や看護師の負担感の軽減にも配慮されていることが伝わってきた。ほどなく保育士が配置された。前年度の看護師長が異動されていたので、新たな看護師長とその後、何度か当日にむけて打合せをさせ

ていただいた。楽しいことと幅広い年齢層を対象にできるということから、作品はマジックになった。

「楽しかったでしょう、ハイ、さようなら」というどこか無責任なものではなく、継続的な実施の可能性を探っていく必要を確認しながらの実施だった。

当日の様子

きょうは、子どもたちや保護者のかた、病院関係者、それぞれ新たな出会いを楽しんでくれるでしょうか。お昼12時、アンディ先生たちの乗ったワゴンが、病院に到着。確保してあった病棟に近い駐車場へ携帯電話をつかって誘導した。外は小雨。エレベーターを何回か往復し、搬入も完了。控え室では、気持ちよく演じてもらえるよう茶菓などをそろえ、こちらのお迎えの準備も万端^^だ。

会場では、アンディさんたちが幕のうしろでいろいろ仕込み中、私たちは、テーブルを隅にもっていったり、椅子を並べるなどして観客席を設営した。2時の開演に合わせて子どもたちが集まり始め、緊張気味の小学生の女の子二人は隣同士の椅子席に。幼児はおかあさんと一緒に敷き物のところに。中学生の男子に、空いている前の座席をすすめたところ、「ここで、いいす!」と言い、最後列に陣取った。小児科以外に入院していてこの日を楽しみにしていた子は、その日状態が悪く、観に来れなくなったという情報がはいつてきた(残念)。

公演開始早々、モンちゃんパワーに馴じみはじめ、部屋に楽しい雰囲気的空間ができてきた。その後、アンディ先生、五右衛門のマジックと続く。アンディ先生がマジックの参加に声をかけた男の子は、普段、傷みのため立つことができなかったのに、なんとすっと立ったではありませんか。看護師さんや医師が驚いた声を発せられていたので最初はわからなかったが、あとからこのことを知った。私たちは、興味や好奇心が意欲に転じた瞬間を目の当たりにしたことになる! さらに、「いいす!」と言って最後列にいた中学生の男子は、いつの間にか中央の椅子に移動していた^^/。その後、その中学生と青年数名は、アンディ先生のおっかけ状態になったのを書き添えておきます。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・いろいろなマジックを見せてもらって不思議だなーと思ったから。また何回も見たいと思ったから。
- ・スプーンまげがたのしかった。/・マジシャンたちがとても愉快で楽しかった。/・マジックに参加できたから /・アンビシャスカードのあとにやったマジックのたねがきになった。/・またマジックを見たい! /・[この事業について] 病院の人達は、あまり外に出られない人がけっこういるので継続していつてくれたらうれしいです。

【保護者】

- ・このようなイベントは本当に嬉しいです。子どもはとても楽しんでいました。ありがとうございます! 病室から出られない子の為に来ていただいてすごく感謝しています! /・きょう退院ですが、最後に見れてよかったです。/・とてもありがたく思っています。このようなイベントがある事をびっくりしました。楽しませていただきありがとうございます。また是非お願いします。

【医療関係者】

- ・初め後ろのほうに居た中3の男子がだんだん前に出て楽しそうに見ていた。プロの公演に引き込まれたと思う。
- ・小4の女の子もアシスタントするとは思っていなかったのに、それぞれ1回ずつ参加できておどろきました。
- ・本来はやりたいと思っている気持ちをひき出して下さってうれしかったし、見習いたいなあと思いました。
- ・小さな子どもがぐずっても、お母さんが最後まで感動していた。/・小さい子をもつママからは、「大人むけの手品だったね」との声が多く聞かれました。

(コーディネーター 高木真理子)

5. 宮崎大学医学部附属病院

「スーパー人形劇・あかずきんちゃん」



実施場所	宮崎大学医学部附属病院 小児病棟食堂
実施日時	2010年10月1日（金）14:00～15:00
作品名	「スーパー人形劇・あかずきんちゃん」（人形劇団ののはな）
参加者数	47名 乳児4名 幼児8名 小学生7名 中学生1名 保護者13名 ドクター4名 看護師1名 保育士1名 事務職5名 ボランティア・その他3名
病室訪問	2病室 4名
コーディネート団体	特定非営利活動法人みやざき子ども文化センター スタッフ4名

実施病院について

宮崎大学医学部附属病院は医師養成教育機関として1977年10月に開設された地上7階の建物に総病床数612を有する宮崎県における中核的医療機関。1994年には特定機能病院の指定を受け、18の診療科とそれぞれの中央診療部門には、最新の医療機器と優秀な医療スタッフをそろえ、医療内容の高度化、多様化に加え、時と共に変わる疾病構造の変化にも適切に対応できる体制を整えており、病診・病病連携を深め、地域の医療機関からの紹介患者を中心に2次医療、3次医療に取り組んでいる。

公演の内容

スーパー袋によるさまざまな動物や人形などが納富さんによってできあがり、袋一枚から出来上がる作品に大歓声。あかずきんちゃんはみんなが良く知っているお話しを、一人で演じます。とても楽しく幼児から大人まで楽しめる作品。

実施までのプロセス

「がんを守る会」を担当されていた上村医師との出会いが、ホッとアート事業の実施につながった。医事課に事業の説明に稲垣さんと、文化センタースタッフで参加し検討していただくことになった。師長さんとの相談後、実施のための準備を始めた。さわやか行政サービス委員会に実施依頼書をお願いし、医事課の脇元さんを窓口丁寧にやり取りをしながら、作品や、日時の決定などスムーズにいった。実施場所（食堂）や控室、搬入経路など下見を含め、病院側は丁寧な対応をいただいた。師長さんとお会いできないのが気がかりであったが、上村医師から伝わっているとのことで、安心していた。しかし、21年度は大学病院という初めてのところで、実施の段取りまで済ましていたがインフルエンザの

流行でキャンセルになった。全国では宮崎だけの中止だったが、病院側の判断に対応するしかなかった。22年度になり改めてホッとアート実施の依頼をし実施する方向に進めた。途中の打ち合わせで「アートセンター」で実施中の「仮面ライダーアート展」から仮面ライダーに来てほしいとの依頼を受け、実施団体との調整で小児科病棟に出現することになり病院中明るくにぎやかになった。医師や看護師、子どもと保護者などとても喜んでくれた。しかしマスコミの関りが気になりながら10月1日を迎えた。

当日の様子

前日から宮崎に入られた納富さんと宮崎大学に11:00に集合し、搬入口から会場に入った。現地には医事課のスタッフ（4人）が出迎えてくれスムーズに搬入できた。当日は職員の移動辞令の日であり何かと落ち着かない日であったがよく対応してくださった。師長さんや保育士の方にもごあいさつ済ませ準備に取り掛かった。控室については、当日変更になり戸惑ったが広い部屋を用意して下さり準備もうまくできた。また、ボランティアとして「がんの子どもを守る会 のぞみ」のメンバーが3人参加してくれた。

会場づくりは医事課の男性スタッフが多数参加してくださり机の運びだしや、イスの並び替えなどすべてうまくいき時間通りに終わった。会場前には子どもたちの姿が見られ楽しみにしている様子がうかがわれた。スタッフが子どもに声をかけたりお母さんたちに話しかけたりすることで、病院の食堂が違う場所のように思えてきた。開場時間になるとそれぞれに子どもたちが集まって来てにぎやかになってきたが、車イスの子ども、ベッドのままの子どもや保護者など病院という場所での公演がどうなるのかと少し気になり始めた。

開演呼びかけを9月にプレイルームに配属された保育士の方が、子どもたちに納富さんを紹介して下さり人形劇が始まった。はじめは少し緊張していたが、だんだんとこどもたちの表情が明るくなり納富さんの呼びかけに答えるようになった。掛け声や、笑い声が大きくなり人形劇に入り込んでいる様子を、子どもたちの周りの大人たちも楽しんでいた。医事課のスタッフや医師、保護者、ボランティア、コーディネーターなどと一緒に、子どもたちの笑顔を見ることができ、ホッとアートの意味を改めて感じた。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・おおかみと赤ずきんのやりとりがおもしろかった。 /
- ・「食べないで」とか「おばあちゃんを食べないで」と言った。頭を棒でたたいて楽しかった。 /
- ・おはなしが楽しかった。 / ・もっとみたい

【保護者】

- ・子ども親もとてもいい経験ができました。楽しかったです！
- ・とてもありがたいことです。ありがとうございました！

【医療関係者】

- ・最初はおとなしかった子供達が時間がたつにつれて大きな声で笑ったり返事をしたり、とても自然な感じで楽しんでいたこと。 /
- ・私も子供をもつ親であるので、このような環境がある入院施設に安心していれられる。
- ・子ども達、または保護者の「苦」を少しでもいやせるのであれば積極的に実施のお手伝いをしていきたいと思う。

（コーディネーター 片野坂千鶴子）

6. 地方独立行政法人宮城県立こども病院

「アンディ先生のマジックショー」



実施場所	地方独立行政法人 宮城県立こども病院 愛子ホール
実施日時	2010年10月13日(水) 15:00～16:00
作品名	アンディ先生のマジックショー ((有)マジックファクトリー)
参加者数	78名 / 乳児・幼児13名 小学生10名 中学生4名 保護者27名 他科・外来患者等6名 ドクター4名 看護師5名 保育士3名 事務職3名 看護実習生3名
コーディネート団体	特定非営利活動法人せんだい杜の子ども劇場 スタッフ6名

実施病院について

東北唯一の小児高度専門医施設。高度な専門知識と技術に支えられた良質で安全な医療の提供は勿論のこと、子どもの権利を尊重し、子どもが主役となる医療を実践。高度で専門的な医療提供のための高度医療部門・周産期部門を中心に、供給部門（放射線、薬剤、栄養、中央材料部）、発達支援部門（理学療法士・作業療法士・言語聴覚士）や臨床工学技士、歯科衛生士、視能訓練士が医療をサポートし、成育支援局では、ソーシャルワーカー、心理士、在宅支援看護師、チャイルドライフ・スペシャリスト、ボランティアコーディネーター、保育士、特別支援学校教諭が、子どもと家族の心と生活を支えている。ボランティアハウス、ドナルド・マクドナルド・ハウスも設置されている。

公演の内容

アンディ先生を筆頭に3人の個性的なマジシャンが「不思議」の世界を繰り広げる参加型のステージマジック。マジックであいさつ（フォークが捻じ曲がる / 破いた新聞紙が一瞬で復活 / いくつもの花の出現）。信じられない世界（スケッチブックからボウリングの玉出現 / 空き缶のハズなのにプルリングとコーラが復活 / キャップの閉まったペットボトルの中にカードが瞬間移動）など。

実施までのプロセス

昨年に引き続き宮城県立こども病院での実施を念頭に置き、昨年の担当者である星成育支援局次長を訪問。その後林院長先生へヒアリングと実施説明に伺う。担当は星成育支援局次長となり、以後電話及びメールでの連絡を中心に行った。最終的な打ち合わせには土屋保育士も同席し、写真撮影等についての検討もあった。公演作品については病院行事委員会で決定して頂き、ポスター掲示から当日の子ども司会の手配、当日の会場設営に至るまで病院側スタッフが対応した。入院中の子どもと家族支援を行っている（特活）ワンダーポケットの田澤雄作理事長へ当日のスタッフ協力を申し入れ、快諾。当日は劇団の仕込みもスムーズに進み、病院側スタッフを含めた打ち合わせを行い本番を迎えた。看護師、院内

学級教員、保育士が付き添い、子どもの状況に合わせて対応して頂いた。病院側のご理解とご協力に感謝申し上げます。

当日の様子

会場に入る際、子どもたちが緊張しないよう、挨拶もあまり大きな声にならないよう、なるべく自然体でいこうと確認し合った。初め遠慮気味に少し緊張して入ってくる子がいたけれど、開演 10 分前には看護師、院内保育士・教員に付き添われ続々とやってきた。この日は、仙台市内小中学校が 2 期制による秋休みということもあり、保護者と見舞いに訪れた兄弟姉妹も参加し和やかな雰囲気となった。ベッドごと移動して参加してくれた子、点滴をしながら母親に抱かれた乳児、そして林院長先生をはじめとする医療タッフが加わった。院内学級に通う児童による挨拶後、開演。はじめは若手 2 名によるマジックが披露され、軽快なおしゃべりとトランプを使ったマジック等に子どもたちが反応、笑い声が出てきた！保護者と体をくっつけながら楽しみだした子もいる。最前列に座っている子どもたちの反応がムードメーカーとなり、保護者の様子も「遠慮なく笑っていいんだ」という安心感からか表情が豊かになってきた。やさしい花柄のジャケットに身を包みアンディ先生が登場した。どんなマジックを見せてくれるのだろうという子どもたちの期待感、絶対種明かしをしてやるぞっという大人の視線が伝わる。「えーっ!」「なんでー?!」、スクリーンに映し出されたアンディ先生の手元の動きに食い入るような熱い眼差しを全員がおくった。コーラを飲むシーンでは林院長先生が登場、会場の一体感に拍車がかかった。子どもや保護者がアンディ先生とやりとりをする場面では、緊張感を解きほぐす話術に温かさを感じた。子どもも大人も屈託のない笑顔をみせ、アンディ先生との掛け合いに反応し、最後まで乳児が母の膝でじっとマジックを見つめていたことも印象的であった。子どもたちの誘導や付き添いなど、病院側の工夫と配慮が行き届いており、子ども達がゆったり安心して参加が出来たと思う。病児と家族は「心地よい感動」をアンディ先生から貰ったのではないかな。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

・マジックがすごくおもしろかったです。 / ・ じょうず。 / ・ ふだん生で見られないことが生で見れた

【保護者】

・入院している子供を特別視せず、普通の子供と同じように接しているところがいいのではないかと思います。(あたりまえと思う事があながいむずかしいと思います。) / ・連れて見せに行くのが難しいので大変ありがたかったです。楽しい時間をありがとうございました。 / ・子供が小さいので時間が少し長いかなと思った、子供が知っている歌などがバックでながれてるといいかも。 / ・入院生活はどうしてもめりはりがつけにくい生活になってしまうので、いろいろな体験をするなかで、自分にも出来る可能性を見出だせるきっかけになれば、すてきだと思います。自分もやってみたいとか憧れると思うような事があれば、希望や勇気にかわるのかなとおもいました。これからも心や体が健康になるような体験を楽しみにしています。 / ・子供は体調が悪いので最初の方しか見れませんでした、親はとっても楽しめました。またぜひ見たいです。ありがとうございました。

【医療関係者】

・子どもたちも、保護者もとても楽しそうでした。 / ・後日、参加した子供や、TV で視聴していた子供が、うれしそうにマジックの話をしていました。 / (良かったこと) ・意欲的に手を上げていたこと。 / ・終了して、病棟に戻ってからも、話題になっていたこと。・リラックスして、楽しい時間をすごせるので、良いと思う。・ほっとする時間。・患者さん、ご家族が前向きになれる時間を提供してくれる。・子供たちに、楽しみを与えてくれる、よい機会になったと思います。

(コーディネーター 齋藤純子)

7. 独立行政法人国立病院機構舞鶴医療センター

「①いたずらうさちゃんほか 2 作品、 ②きつねのまんまほか 1 作品」



実施場所	独立行政法人国立病院機構 舞鶴医療センター ①地域医療研修センター ②母子医療センター
実施日時	2010 年 10 月 16 日 (土) ① 10:30 ~ 11:15 ② 14:00 ~ 14:40
作品名	①いたずらうさちゃんほか 2 作品、②きつねのまんまほか 1 作品 (人形劇だん大福)
参加者数	103 名 / ①地域医療研修センター 61 名 乳児 17 名 幼児 11 名 小学生 3 名 保護者 27 名 ドクター 2 名 ボランティア・その他 1 名 ②母子医療センター 42 名 乳児 7 名 幼児 5 名 小学生 4 名 中学生 1 名 保護者 16 名 ドクター 1 名 看護師 7 名 ボランティア・その他 1 名
病室訪問	5 病室 5 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人京都子どもセンター スタッフ 5 名

実施病院について

京都府舞鶴市に位置し、京都府北部だけでなく、北近畿における唯一の医療センターとして、地域における中核的医療機関として機能している。ここの病院の特徴の一つとしている母子医療センターには、NICU も設置している。

公演の内容

①、②ともパントマイムで始まり、①ではメインの「いたずらうさちゃん」の人形劇をしてあと「えらいぞわんくん」の紙芝居、うちわ芝居「わんこちゃん」あと②へつなげる昔ばなし 2 作品を上演。②はみのむしの無言人形劇のあと「きつねのまんま」の人形劇と昔話 2 作品上演。

実施までのプロセス

前年度の実施を 2010 年 1 月に終えたばかりだったが、2010 年度の企画当初から、舞鶴医療センターの副院長・常盤和明先生に相談したところ「ぜひ」との快諾を得て、10 月開催に向けて動き出した。次年度以降の継続を考えたとき、また「地域をつなぐ」視点でのアプローチを目指し、地元のアーティストをコーディネートしたいという意向を持って、京都のコーディネーターから運営委員会に「人形劇だん 大福」を提案し、了解された。常盤先生より「入院中の子どもたちは、地域の生活から切り離されている。」とのご示唆を受けて、地域の子どもたちも一緒に鑑賞できる機会を作れないか調整を進めた。結果的には、病院内の研修センターの提供を受け、地域の自主公演が可能になった。B プログラム

についても、ワークショップの実施を検討したが、時間調整や、材料に対するアレルギーの問題があるとのことで、今回は断念した。打ち合わせは3回。初回は、常盤先生と京都市内で、2回目は舞鶴医療センター事務局、地域NPOの事務局も交えて現地で。3回目は劇団と下見をし、搬出入経路や時間配分の詳細を確定した。

当日の様子

午前中の自主公演に備えて、劇団・コーディネーターとも前日から舞鶴入りして万全の体制を整えた。病院としても施設の一部を地域に解放する初めての試みとなり、地元舞鶴のNPOから協力を受けて準備をすすめたが、開演直前まで入場者の層や予想人数がつかめず、あせった。20組前後の親子と、院内に併設された保育園からの参加、入院中の大人など合計50名弱が参加し、公演はなごやかに終了した。「地域のなかに、病院で生活している子どもの存在がある」ということを、周知する一助となった。

午後の母子医療センター内での公演は、準備段階から小学4年生ぐらいの子どもたち3～4名が「何するの」と覗きに來ていた。前回大人数で会場に入りきれない状態をみているので、今回は非常に少なく感じたが、40名の参加があった。

3つ作品を上演したが、幼児さんは最後の「きつねのまんま」は集中できず、子どもたちの年齢、病気の重さなどの条件に加えて、あらかじめ客層を特定できないことによる作品コーディネートのむずかしさを感じた。

病室訪問では、5室をまわった。保護者が「人形劇の年齢ではないです。」と言われた5～6年生の子どもも、間近で人形をマジメに動かしてみせると、しっかり見ていたのが印象的だった。重度の障害があるケースでは、保護者の方が「うちの子はまったく反応がないようですが、親には喜んでいるのがわかります。」とコメントされた。しかし、同席したスタッフも、観ている子どもの心の動きを感じることができ、深い余韻を残した。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・ありがとう。/・きつねが人げんにばけて町にいったかえせって言ってかえしたところがおもしろかった。/
- ・パントマイムやいたずらうさちゃんがおもしろかった。/・とてもいいことだと思います。

【保護者】

- ・土、日でスタッフさんが少ないという事情で会場に行けないと思っていましたが、公演後お部屋まで来て頂き、お人形をみせてくださいました。きっと、楽しんでいたと思います。/
- ・外部からも入って来て、本当に楽しかったです。またこのような催しがあるときはひろばなどのチラシにのせてください。ぜひ足を運びたいです。/
- ・子どもが直接観ることができないので、ビデオをとらせていただきました。後ほど見せてやります。ありがとうございました。/・症状が重いこともあり、表情や言葉などが無く、私たちには小さな変化で気持ちを察することができますが、やはり他の方にはわかってもらえないので、何をしても変化がないと思われがちですが、どこかわかっていると思って、行ってくださると嬉しいです。

【医療関係者】

- ・いつも仕事で自分の子どもと過ごす時間が少ないので職場で一緒に楽しめてよかったです。
- ・子どもも大人も楽しくすごせてよかったです。
- ・クリスマスコンサート サンタさん来てゑー。子どもが待ってます。

(コーディネーター 福田美和子)

8. 一宮市立市民病院

「びりとさくちゃんのクラウニングシアター」



実施場所	一宮市立市民病院 南館 B 11F 講堂
実施日時	2010 年 10 月 18 日 (月) 14:00 ~ 15:20
作品名	びりとさくちゃんのクラウニングシアター (蒼い企画)
参加者数	68 名 乳児 1 名 幼児 7 名 小学生 4 名 中学生 2 名 保護者 20 名 ドクター 4 名 看護師 14 名 保育士 1 名 事務職 4 名 院内学級の先生 4 名 ソーシャルワーカー 5 名 看護助手 2 名
病室訪問	12 病室 14 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子どもと文化の森 スタッフ 4 名

実施病院について

一宮市立市民病院は、多様な医療需要に対応できる病院として、地域の医療水準の向上に努めるとともに、各種医療機関とも連携を強め、健康の増進と福祉の向上に努めています。

昨年新築の建物は、救命救急センターが格段に整備され、高度な救急医療が 24 時間地域住民の皆様に提供できます。さらに、産科と小児科の collaboration のもと、周産期医療センターを設立し、妊娠から育児まで一貫して医療サービスができます。放射線科専門医のもと、MD-CT の 3 台導入、トモセラピーなどの放射線治療最新鋭機器の設置をしました。

公演の内容

ちょっと間抜けなびりと可愛くて元気なさくちゃんコンビのクラウンのショー。マジックやジャグリング、パントマイム、皿回しと、年齢を選ばず子ども達を飽きさせず楽しませしてくれる。観客の中から、さくちゃんのお眼鏡にかなった選ばれし人は、舞台上でさくちゃんとうまくからんで演者と観客が一体化して楽しんだ。バルーンアートは素晴らしく、種類も豊富に子ども達一人一人にプレゼントをしてくれた。あっという間の 40 分だった。

実施までのプロセス

院内学級のある近隣地区の病院であり、この事業に理解を示して頂き、すぐに了解を得て実現となった。打ち合わせも順調に進み、ヒアリングの時には小児病棟の現状を聞き、ますます子ども達に舞台芸術を見せたいと思った。作品決めにあたり、病棟が忙しい中、看護師の方に作品一覧を持って伺い、補足説明をした。公演予定日が 1 ヶ月後と聞き、急ぎよポスターや招待状の発注となった。副院長先生や小児科の先生、看護師さん、ソーシャルワーカーさんのご協力のもと、公演に向け進んでいった。当

日近くまで、病棟の子ども達の入退院があり、なかなか人数把握ができなかった。今年は、インフルエンザの流行も特になく、子どもたちがなるべく講堂で見られるように、病棟での医療行為等、開演に間に合うよう進めてもらえた。今回、タイプBは、病院側が要望として出された内容が専門知識が必要なサポートだったため、実施が難しく、残念ながら見送りになった。

当日の様子

11Fの見晴らしの良い大きな講堂を半分に仕切り、窓のある側を会場として使った。光がいっぱいに差し込む中で、病院側スタッフのソーシャルワーカーさんと共に、会場中をポスターやチラシで飾り付けた。開演30分前から会場に来た親子。子どもは、落ち着かない様子で公演が始まるのを心待ちにしている。小児科の副院長先生から小児科外来の方にもお声が掛かっており、数組来てくれた。びりとさくちゃんがグリーティングで子ども達を飽きさせないようにしてくれている。開演にあたり、副院長先生から、皆で同じものを同じ時に共有すること、笑うことの大切さの話があった。初めは緊張していた子ども達も、びりとさくちゃんの掛け合いにあっという間に笑いの渦へ。子ども達の食いつきの良さや、食い入るように見ている集中力、楽しんでいる子どもを見て嬉しそうにしている保護者の様子が忘れられない。ある子は、ベットの中でプレゼントのバルーンを見ようと顔を動かし、その変化に副院長先生も驚いていました。動けなくても、何らかの動きで嬉しさや楽しさを表現してくれ、改めてこの活動の大切さを先生と分かち合った。

病室訪問では、びりとさくちゃんが二手に分かれ、乳幼児から高校生までの子ども達に会いに行った。さくちゃんには、皆が笑顔になってしまうという不思議な力があり、びりもおっとりとしたキャラが子ども達から慕われていた。中学生の女の子が、びりとさくちゃんに疲れただろうからと、クッキーを持って来てくれるという嬉しい出来事もあった。この公演を通して子どもたちのいい変化があり、病院もそれを知っているからこそ快く受け入れられている現状に、これからも気持ちを引き締めていきたいと思った。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】・リクエストしたのを作ってもらったからうれしかった。/・部屋まで来てくれてとてもうれしかった!/・ステージに出た時に皿回しをやってたのが楽しかった。/・楽しいと思う事は良い事なので公演はこれからも続けたいと思います。/・毎日あんまり楽しみがないけどたまにこういうのがあるとうれしい。

【保護者】・とても良い気分転換になり良い体験ができ感激しました。子供にとって外に出れないのは何よりも苦痛。そんな中で目の前で体験し、心から笑える時間はとても大切だと思いました。笑って少しでも元気になるのは治療にもとても前向きになれていいと思います。これからもたくさんの子供を楽しく幸せな時間へつれていてあげて下さい。/・楽しいショーをありがとうございました。今回は家族も参加できるということで、患児本人はもちろんですが、家でいつもいろいろがまんして待っている、きょうだい達も一緒に楽しめ、とても良かったと思います。子も親も入院が長びくほど一瞬でも病気のことを忘れて心がなごむ時間は必要ですね。これからも活動頑張って下さい。/・8ヶ月の子供ですら笑顔がこぼれていたのももう少し大きな子供さんだったら、すぐく喜ばれると思います。辛い治療中にこうした特別な体験ができるのは、とても素晴らしいことだと思います。/・初めて見てほんとに楽しかったです。もっと見たかったです。/・赤ちゃんにまで風せんを作ってくれたのがとてもうれしかったです。/・子供が口をぽかんと開けて見てたのを見てこちらもうれしかったです。どんどんやってもらうといいと思いました。・毎日、家に帰りたいとグズグズ泣いていましたが、お昼からはいつもの笑顔 元気が戻りうれしかったです。ありがとうございました。/・ピエロさんを間近で見れてしばらく興奮していました。貴重な体験をさせていただきありがとうございました。これからも全国での活動頑張って下さい。

【医療関係者】・地域との連帯を強められる。/・病気を抱えて入院している子どもたちに前向きに生活してもらうための一大イベント（…以下略）

（コーディネーター 水野裕子）

9. 国立国際医療研究センター国府台病院

「アンディ先生のマジックショウ」



実施場所	独立行政法人国立国際医療研究センター国府台病院 院内学級中学校教室
実施日時	2010 年 10 月 19 日 (火) 14:30 ~ 15:45
作品名	アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー)
参加者数	92 名 小学生～中学生 83 名 看護師 3 名 学校関係者 6 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子ども劇場千葉県センター スタッフ 7 名

実施病院について

2008 年に国立精神・神経センター国府台病院から改名。児童精神科は、昭和 23 年に開設された長い歴史を持ち、幼児から中学生までの心の疾患に対応している。外来専門の他、専用病床（精神科開放病棟）の入院部門があり、さらに市川市立小中の院内学級が病棟の近くに併設され、連携してサポートにあっている。

公演の内容

不思議で夢のような魔法の世界。ワクワクするようなマジックショウ。ハトの登場や、スクリーンに手元を大きく映し、カードマジック、その場でサインを書いたカードが新品のペットボトルの中へ瞬間移動???

実施までのプロセス

アプローチ開始に当たり、事前に院内学級の先生に TEL をし、ヒアリングの依頼と公演を実施したい旨を伝える。後日、ヒアリングに参加してほしい医師や看護師さんの都合がつく日程をいただいた。その場ですぐに理解してもらうには時間がかかるのでアンケート等を事前に渡し、目をとおしてもらっていただいた。7 月上旬ヒアリング実施。公演に関してはまた改めてお時間をいただく形で打ち合わせの日程をきめていただいた。8 月上旬、プログラムの演目や場所、日程を院内学級として候補を挙げてもらった。後日先生の方で病院関係者との会議の中で決定していただく。

当日の様子

昼食が済み、13:00 ごろから教室の準備開始。中学校の先生が子どもたちに声をかけながら準備に入る。子どもたちは制服を着た 3 人くらいの女の子がいたが、私服の子どもがほとんど。マジックファ

クトリーの皆さんも参加して机を教室から出したり、椅子を並べたりと準備する。参加者は70人以上と聞いていたので足りない椅子を借りてくる。準備ができると子どもたちは数人が若い先生を囲んでおしゃべりをし始める。人気のある先生らしい。先生もマジックショーにも興味があるらしく教室の中をみたり楽しそうにしていた。多くの子どもたちは病棟のプレールームの周辺で思い思いに遊んでいる。予定の時間になっても子どもたちは三々五々ぶらりぶらりとやってくる。なかなか落ち着かない様子で、周りの様子を見ながら席を移動したり廊下へ出て行ってしまう。「中に入って！」先生が呼び込みを始めた。開演時間 14:40。まだ廊下に先生と子どもたちが残っている。モンブランの茨城弁のトークが受けている。次は五右衛門の登場。早速「ハト」出現で歓声が上がる。中にいる子どもたちが集中してきているのがよくわかる。廊下の子どもたちも興味津々で中をのぞきにやってくる。中には入らないが、友達とおしゃべりしながら見ることで廊下の方が居心地がいいらしい。アンディ先生登場。子どもたちに手を挙げさせながら、やりたい子どもたちに実際に試してもらっている。後でアンディ先生から伺ったことだが、どの子にやってもらうかは子どもたちとの心理戦とのことであった。まさに国府台病院の子どもたちは、アンディ先生の手の内に入ってきてくれたようだ。

最後は、女子にカードを選んで名前を書いてもらう瞬間移動のマジック。アンディ先生の手にかかるとなんと選んだカードが未開封のペットボトルの中に入ってしまった。みんなが一斉に歓声を上げる。どう考えてもあり得ない状況に子どもたちや看護師さんたち先生も興奮している。公演終了後モンブランの周りに子どもたちの輪ができていた。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・モンブラン氏のフォークが2つになるマジックが1番びっくりした。あと、ごえもんの声のノーマルさにびっくりした。次は菓子パンを出すマジックをしてほしい。「ホットもっと」ってあの某有名弁当チェーン店じゃないですか？ あのチキン南蛮とかおいしい。アンディ先生のシャツの色が反射してまぶしかった。私もコーラのみたかった。/
- ・ワーハッハ / ・ハトがかわいかった。ハトがもう一度見たい。人柄がよかったと思います。/
- ・誰もができそうなマジックかと思ったけれどテレビで見るようなすごいマジックで、とてもたのしかった。特に最後のペットボトルにトランプが入っちゃうマジックはすごかった。/
- ・はじめてなまでマジックを見ました。入院していてこんな公演が見られるなんてとてもびっくりしました。
- ・いろいろ最近、辛いことだらけだったけど、マジックでそういういやなことさえも楽しい時間を過ごせました。これからも楽しいエンターテインメントをよろしくお願いします。/
- ・マジックは全部信じられない位すごくて鳩がでてきた時はものすごく可愛くて感動しました。(笑) 鳩にさわってみたいなあと思っていました。すごく楽しかったです。

【医療関係者】

- ・目を輝かせた子どもたちの姿が印象的でした。/ ・子どもたちは期待していた以上のものだったので楽しそうでした。大人も楽しかったです。/
- ・中学生ともなると、マジックショーにそこまでの期待をしていなかったようだが、ショーが始まるとだれもが楽しんでいたようだ。
- ・公演前はやはり斜に構えている子が多かったが、その後、とても満足した顔を多くみられ、すばらしい効果だと感じました。

(コーディネーター 綿貫のばら)

10. 東京大学医学部附属病院

「びりとさくちゃんのクラウニングシアター」



実施場所	東京大学医学部附属病院 入院 A 棟 2 階ラウンジ
実施日時	2010 年 10 月 20 日 (水) 14:00 ~ 15:00
作品名	びりとさくちゃんのクラウニングシアター (蒼い企画)
参加者数	56 名 乳児 3 名 幼児 7 名 小学生 9 名 高校生 1 名 保護者 16 名 ドクター 6 名 看護師 8 名 保育士 1 名 ボランティア・その他 5 名
病室訪問	15 病室 40 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子ども NPO・子ども劇場全国センター スタッフ 5 名

実施病院について

東京大学医学部小児科学教室は臨床、教育、研究の各分野をリードする小児科医や研究者を輩出してきた。平成 20 年小児医療センターを開設。大学病院に付設された特性を活かし小児科・小児外科に限らず臨床各科の連携のもと外科系疾患やこころの問題を含めた小児疾患全体に対してきめ細かい高度な医療を提供する。

公演の内容

まぬけなキャラクターのびりと、かわいらしいさくちゃんのクラウンコンビ。マジックやマイム、ジャグリングなど、多彩なパフォーマンスからなるショー。最後には、子どもたちの要望にも沿いながら、バルーンアートが配られた。

実施までのプロセス

昨年の実績があり、こちらのアプローチに全面的に応え、実施に向けて体制がつくられた。五十嵐隆教授、井田孔明准教授のご尽力のもと、大友看護師長と福田看護師長の 2 人の責任窓口体制がとられ、保育士や病棟看護師等との連携も図られ、大変スムーズにすすめることができた。ヒアリングでは、保護者への支援の必要性をお聴きした。今回は実現しなかったが、B プログラムへの期待があることがわかった。

当日の様子

当日、会場設営をいっしょにしてくださった保育士にくっついて、クッションマットを敷き詰めてくれた数人の子どもたちが、公演を楽しみにしていることを聞かせてくれた。開演時間前からスタンバイした、まぬけでおどけたびりと金髪で鮮やかな黄色のコスチュームのかawaiiさくちゃんが、子どもたちひとりひとりに話しかけながら笑顔で迎えてくれた。

ユーモラスな2人が、次々とマジックやジャグリングをやりながら、会場は一気に楽しい空間に変わった。びりさんの「かばん」のマイムは大うけで、最初少し遠慮がちだった子どもたちの声がだんだん大きくなり、びりさんとのかけあいによる大爆笑のマイムとなった。皿まわしに挑戦した子も大成功！ 日常、余り感情を表現しない子どもたちが、ニコニコ顔になった姿に、病院関係者も感動しびっくりしたほどだ。

今回のサプライズは、紙コップのジャグリングで、さくちゃんからの指名により、保護者の『お父さん』が登場し、紅白帽をかぶって、さくちゃんとのジャグリングに挑戦。最後見事に決め、はい！ポーズ!! 会場から大拍手を受けた。何ともかわいなお父さんのパフォーマンスだった。最後のバルーンアートは、次々とリクエストの手と声があがり、ほとんど全ての子どもたちのリクエストに応え、バルーンをプレゼントした。

その後、北病棟と南病棟に分かれ、15の病室を訪問した。重篤な子どもたちへ、びりさんはやさしくやさしく語りかけ、ベッドのかたわらにバルーンを置いた。居合わせた家族にも誕生日のバルーンの花束をプレゼントした。(お母さんが誕生日だった) ちょうどハロウインの時期で、さくちゃんは、オレンジ色のかawaiiかぼちゃのバルーンをたくさん子どもたちに手渡し、ICUの子どもたちにも配られ大喜びされた。その日、手術室に向かう子ども手にかぼちゃのバルーンがしっかり握られていた。病室訪問こそ、この事業の『肝』であることを実感させられた。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・すごくいいと思う。これからも続けてほしい
- ・みんな楽しめになると思うのでいいと思います。これからもやってほしいです。

【保護者】

- ・子供達は、毎日毎日病気と闘い、つらい治療にたえています。たぶん大人でも耐えられるかなと思うほどです。そんな時、前向きになっていけるには笑う事が第一です。この事からもHOT もっとプレゼントさんが行われている事は、子供達にとって又、親にとって最適だと思います。これからも頑張っていたいただきたいと思います。
- ・何も考えずに笑えることは最高のストレス発散だと思います。/・何よりもいきいきとするので、本当に助かります。/・子ども達それぞれが、いろいろな病気を抱えて毎日をすごしています。その中で、少しでもほんの一時でも笑顔でいられる時間がもてた事がとても嬉しかったです。楽しい時間は短いと思いますが、それを思い出しながら、みんなが、それぞれ乗り越えて行けたら…と思います。私も今回初めて参加しましたが、とても楽しかったです。びりさん、さくちゃんありがとうございました。/・とてもありがたいと思います。ぜひ、今後も続けて欲しいです。/・娘が今日の公演を楽しみにしていて、リハビリや治療をがんばったし、いつも以上にはりきっていた。つらい事も進んで「やる！」と言って「ピエロに会いたいから」と前向きに取り込むのでうれしかった。/
- ・毎日でも一日一回なにも考えず笑えたらいいなと思いました。自分も技術を身につけたい。
- ・病棟の食堂ラウンジで気軽に來ることができ、本当に楽しめました。

(コーディネーター 中村雪江)

11. 山口大学医学部附属病院

「アンディ先生のマジックショウ」



実施場所	山口大学医学部附属病院 第一病棟 5F 東プレイルーム
実施日時	2010 年 10 月 21 日 (木) 14:00 ~ 15:00
作品名	アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー)
参加者数	28 名 乳児 3 名 幼児 2 名 小学生 3 名 中学生 2 名 保護者 9 名 ドクター 1 名 看護師 5 名 保育士 2 名 事務職 1 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子ども劇場山口県センター スタッフ 4 名

実施病院について

全人的医療の実施、医療人の育成、先進的医療の推進、地域医療の発展を理念とした、736 床を有する県内第一の規模と医療設備を持つ。「高度医療センター」が設置され、宇部市と連携しているドクターカー、山口県との提携によるドクターヘリコプターを駆使して全県下から、また他県からの重症患者の治療に対応。「山口県がん診療連携拠点病院」および「山口県肝疾患診療連携拠点病院」としても、山口県における医療の中核病院として発展している。先進医療に取り組みまた医学部付属病院として、学生教育と卒後臨床研修の場をその使命とし、地域医療の充実を推進している。

公演の内容

オープニングはモンブラン登場モンちゃんパワーでフォークがねじれ曲がっていく。五右衛門はステキな手を使ってトランプショウ。アンディ先生はペーパーが帽子に。密閉したペットボトルの中にカードが。お母さんの指輪を借りていつのまにかアンディ先生のキーケースの中に。子どもも、それを見守っていた大人達もアッと驚くマジックの世界に魅せられた。

実施までのプロセス

8 月 2 日 医事課副課長さんをお訪ねする。過去 2 回の公演経験から、今年は何の作品を選ばれるだろうと伺ったのだが、副課長さん師長さん病棟医長さんが替っていた。担当者がお互い初めての出会いの中で、今年の公演が可能かどうか検討されることになりご苦労をお掛けした。

9 月 16 日 今年は「HOT もっとプレゼント」として、プログラムタイプが選んでいただけることや当日の運営について説明し、今年も A プログラム公演を実施されることになった。作品は「アンディ

先生のマジックショウ」に決定。その折、個人情報保護に関する件で副課長さんより「誓約書」について貴重なご指摘を受けたが、全国センターの適切な処理があって内容がより確実になった。その後、ごあんないやアンケートをお届けしたが、特にアンケートと写真撮影について、患者・家族に負担をかけないように十分に配慮するよう注意を喚起された。

3人のマジシャンはさすがプロ、子どもの気持も見守る大人の心も掴んで、参加したみんなが幸せな気持ちになっていた。副課長さん、師長さんが最後まで残って一緒に劇団を見送ってくださったのが嬉しいことだった。

当日の様子

今回は、病院の「お楽しみ会」の中の一つのプログラムという位置づけで、保育士さん看護師さんが歌う「どんぐりころころ」「忍玉乱太郎」で幕が開き、院内学級先生手作りの「ブロックゲーム」で楽しんだ。楽しい雰囲気の中マジックショウ開演。明るいキャラクターのモンちゃんパウワーのスプーン曲げから、五右衛門のトランプショウ、アンディ先生のあっと驚くマジックの世界へと子どもたちを引き込んだ。子どもたちだけでなく見ている大人達も引き込まれ、不思議の世界を楽しんでいた。付き添いで参加されていたおじいちゃんも、当意即妙のあいづちで興味津々楽しんでいた。

中学生の男の子のカードが、密閉してあるペットボトルに入っているのは圧巻だった。きっとその子にとっても大きな感動だったのだろう顔を輝かせていた。終演後もアンディ先生、マジシャンたちが、一人ひとりに丁寧に声をかける接し方がとても優しくかった。日頃あまりお話をしないと言われる女の子が「お友達にもお花がほしい」とアンディ先生に話しかけ、受け取ったときの嬉しそうな顔が印象深かった。子どもたちが辛い日常を離れて、限られた時間ではあるが笑顔で過ごしてもらって、明るい気持ちで帰っていった様子が嬉しいことだった。

アンケート / ヒアリングから

【保護者】

- ・TVで先生の顔を見たら思い出し、喜ぶと思います。ありがとうございました。
- ・とても楽しい時間でした。まだ小さい子なので病院に来ることがイヤな時があり、連れてくると泣くときもあります。こうした中、お楽しみ会などの行事があることを期待して、今回の入院に足が向きました。みんなと楽しく笑えることが良い思い出になったと思います。

【医療関係者】

- ・心から楽しんでいる姿を見て本当に嬉しかった。日頃ない姿（発語があったり、人ごみに自ら入る等）をみて外からの刺激の大切さもわかった。
- ・とても楽しめるよい機会。
- ・打合せや段取りが煩雑で自分も初めてであり当たり前のことだが、病院側と主催側との温度差を理解して頂くのに気を使った。（10月の多忙な時期であったのも反省点）しかし、患児やご家族の楽しめる姿を見て本当に良い機会だったと思う。

（コーディネーター 三好美喜子）

12. 独立行政法人 国立成育医療研究センター

「びりとブッチーのクラウニングシアター」



実施場所	独立行政法人国立成育医療研究センター ① 1 階まめの木 ② 8 階東病棟 ③ 8 階西病棟
実施日時	2010 年 10 月 22 日 (金) ①まめの木 12:30 ~ 13:00 ② 8 階東病棟 14:15 ~ 14:45 ③ 8 階西病棟 15:15 ~ 15:45
作品名	びりとブッチーのクラウニングシアター (蒼い企画)
参加者数	161 名 ①まめの木 80 名 / 乳児 8 名 幼児 14 名 小学生 10 名 保護者 40 名 ボランティア・その他 8 名 ② 8 階東病棟 37 名 / 乳幼児 6 名 小学生 3 名 中学生 1 名 保護者 8 名 ドクター 8 名 看護師 2 名 保育士 1 名 ボランティア・その他 8 名 ③ 8 階西病棟 44 名 / 乳幼児 9 名 小学生 3 名 保護者 9 名 ドクター 4 名 看護師 9 名 保育士 1 名 ボランティア・その他 8 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子ども NPO・子ども劇場全国センター スタッフ 6 名

実施病院について

国立成育医療研究センターは高度専門医療センターとして病院と研究所が連携し成育医療（小児医療、母性・父性医療および関連・境界領域を包括する医療）を推進している。成育医療のモデル医療や高度先駆的医療の提供、成育医療の調査・研究等の推進など、総合的・継続的に進めている。

公演の内容

クラウン二人のかけあいによるコミカルでリズムカルなパフォーマンスショー。ダンス、マジック、ジャグリング、皿回し、大きなかばんを使っのバントマイムなど多彩な技を披露。クラウンギャグに、会場は笑いの渦に包まれた。

実施までのプロセス

成育医療センターは「国立」から「独立行政法人」に移行し、病院の機構や組織が大幅に変わり、2 年間の実績はあったものの、改めて最初からはじめることになった。病院長へこの事業の趣旨説明や成果・評価をお伝えし、実施の承諾を頂き、すすめていただくようお願いをした。決定までに時間を要し、組織が変わった中、責任窓口との連携や調整・確認が不十分な部分もあった。作品選定については、これまでの 2 年間の実施に際して、力をお貸しくださった、ボランティアの会のご希望で、びりとブッチーのクラウニングシアターに決まった。ボランティアの会の方々には今回も力を貸して頂いた。

当日の様子

一階のロビー「まめの木」での公演は、その日病院を訪れていた子どもや保護者が次々に集まった。招待状を手に持ち、車椅子での参加の子ども、お父さんが付き添っている子どももいる。ラテックスアレルギーや食べ物の制約がある子どもたちがいるということで、バルーンアートやチョコレートを使ったパフォーマンスを除いたプログラム構成とした。

パンツ一枚になってしまう間抜けなピエロ、ウクレレやサックスを使った音楽パフォーマンス、ジャグリングでの球の奪い合い、時々入るギャグ、そのたびに子どもたちは大きな声を上げたり指を指したり、大きな拍手をしながら楽しんだ。皿まわしは子どもたちも体験、最前列にいた男児たちが、転げるように大笑いをしていた。びりとブッチーの豊富なプログラムと技に脱帽！

2箇所の病棟での公演は、スタッフも赤鼻のシールを鼻に貼り付けて、楽しそうな雰囲気を演出した。ストレッチャーや車いす、バギーでの参加が多く、全体に静かだがしっかりと観ており、こぼれるような笑顔を何度も何度も見せてくれた。皿回しに挑戦した子どもからは「やった！」という、満足そうな笑顔がこぼれた。一緒に観ていた保育士が「楽しかったね！ うれしかったね！」と、子どもたちの肩を抱いて喜んでくれた。側のナースセンターから多くのドクターや看護師が仕事の合間、クラウンの芸に引き込まれ笑顔で観ている。病室の中から子どもを抱いて遠くから観ている親子もいた。付き添った保護者の方々が、子どもの笑顔を見てうれしそうな表情をされ、笑顔いっぱい楽しかった気持ちを話してくれた。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・ピエロさんのお手玉がじょうずだったし、びりさんのかばんをうごかさなかったところもすごかったです。
- ・びょういんまできてくれてうれしい
- ・マジックがすごかった。おもしろかった。

【保護者】

- ・入院生活はたいくつでつらいこともあるので、本当にありがたい機会です。これからもお願いします。
- ・皿まわし記念日になってとてもよかったです。参加できたことに子供も楽しんでました。
- ・参加型にしていただけるとすごくよい記念になる
- ・子供にとって入院＝親と離れることはそれだけでストレスだと思うので、こういう体験は貴重で、楽しいものだと思います。娘は入院生活が長いので、なかなか生でこういうのを見る機会がありません。そういう子供達にとって、とてもありがたい企画です。
- ・はじめてこういう催しを見ました。ありがたい試みです。

【医療関係者】

- ・チラシを見て楽しみにしていました。演技、楽器、すべてに感心させられ、感動し、たくさん笑いました。また逢えますように……。／・酸素需要の多い子達ばかりで時期がちがうともっと子ども達も楽しめたと思う。夏の時期などが良い。冬や秋は気管支系の疾患の児が多く部屋から出られない子も多くなる。
- ・途中から参加させて頂いて、事前の情報も深く知りませんでしたので、子供の期待感とかは評価できませんでした。非常に大事な取り組みだと思います。有難うございました。／・何かスタッフにできることがあったら事前にお知らせいただければいつでも協力します。／・想像していなかっただけに驚いて喜んでいた印象です。
- ・子ども放りっぱなしで見入っている大人がいました。それも良しかー。／・今日は急変患者がいなくて本当によかった。／・笑顔！！

(コーディネーター 稲垣秀一)

13. 北海道立子ども総合医療・療育センター

「アンディ先生のマジックショウ」



実施場所	北海道立子ども総合医療・療育センター ① 3F 医療部門 プレイコーナー / ② 2F 療育部門生活支援病棟 食堂・ディルーム
実施日時	2010 年 10 月 26 日 ① 11:00 ~ 11:50 ② 16:15 ~ 17:00
作品名	アンディ先生のマジックショウ ((有) マジックファクトリー)
参加者数	① 3F 医療部門 プレイコーナー 67 名 / 乳児 4 名 幼児 10 名 小学生 9 名 中学生 1 名 保護者 10 名 ドクター 7 名 看護師 21 名 医療保育士 2 名 事務職 3 名 ② 2F 療育部門生活支援病棟 食堂・ディルーム 96 名 / 幼児 14 名 小学生 29 名 中学生 8 名 高校生 6 名 保護者 5 名 ドクター 4 名 看護師 5 名 保育士 10 名 事務職 4 名 ボランティア・その他 11 名
病室訪問	2 病室 2 名
コーディネート団体	特定非営利活動法人こども・コムステーション・いしかり スタッフ 6 名

実施病院について

子ども総合医療・療育センターは、小児総合保健センターと札幌肢体不自由児総合療育センターの機能を一体的に整備し、保健・医療・福祉の機能の有機的な連携の下に胎児期から一貫した障害・疾病の予防の除去や軽減のための訓練の実施、小児病棟入院時のリハビリの充実、療育と共に小児高度医療を充実し、提供させている。

公演の内容

オープニング、モンちゃんのなまり話術で会場の心をひきつける。その後アンディ先生がマジックであいさつ(破いた新聞紙が一瞬で復活 いくつもの花の出現)信じられない世界(ペーパーハット / カードがペットボトルに / ロープマジック / 瞬間移動)体験(一円玉を曲げる 体を使ったマジック 科学のようなマジック)

実施までのプロセス

6 月に予め今年度の取り組み方向を伝えてあったこともありスムーズな対応でスタートした。昨年のプログラムや取り組み方に対して信頼を得られたという感触が伝わってきた。7 月 14 日最初の訪問、窓口となった相談支援課指導係長の佐藤さんも病院各セクションの移動もなかったのですぐ具体の確認調整の話に進む事になった。QOL アンケートについてはコドモックルが産科、小児科の医療専門部門と肢体不自由児のための療育部門との 2 つの機能をもった病院なのでぴたりと合わない設問もあるようだがと言いつつ協力を約束していただいた。実施までに打合せを重ねたが日程の調整、院内スタッフ

の協力態勢づくり等佐藤さんが滞りなく進めて下さり、期待の高さをひしひしと感じた。10月26日公演当日子どもたちはもちろん、ドクター、看護師さん、保育士さん、ボランティアスタッフの方、病院内が一体となって楽しんでくれたようである。アンディ先生の仕事の質が高く「子どもたちの集中力(時間の長さ)に驚いた」と保育士さんが語っている。招待状についても昨年度はプレイルームに「自由におとりください」と置いてあったが、今回は手渡されており子どもの期待が盛り上がる態勢がとられていた。公演のあとで何かあったらドキドキしていた昨年とは違い気持ちに余裕を持って臨むことができた。

当日の様子

到着して早速アンディ先生達と会場の下見をした。2年目ということで、病院の関係者の方たちも現場ではみなさん手際よく協力や手助けをしてくれて、会場設営などもスムーズに運んだ。1回目は、午前中3階の医療病棟からスタートした。3階のプレイルームでは、準備に行くと開始30分程前から数名の子どもが「何をやるの?」とやや恐そうにステージとなる方を見ている。しかし徐々に周囲のスタッフともうちとけ、表情も柔らかくなる。昨年この時期に入院していた子どもが昨年のホッとアートの事を覚えていて、イメージがよみがえりとても楽しみに待っていた。待ちわびていた子ども達にアンディ先生が火災報知機のランプでのマジックをサービスしてくれた。それを見ていた子どもが目を丸くして驚く。そして一言「電気が抜けた!」。その言葉で一気に場の雰囲気気が和んだ。スタートするとモンちゃんのトークで盛り上がり、アンディ先生が登場してさらにラストまで笑顔で楽しんでいる様子。マジックのお手伝いをしてくれる子どもにお願いすると、恥ずかしがって遠慮することが多かった。保護者も数人参加してはいたが、最初のうちは主体は子どもだけ…という印象を受けたが、スタートするとアンディ先生がうまく親を引き込み徐々に会場が一体感に包まれた。

午後からの2階生活支援病棟の子ども達は就学している子どもや前年度参加している子どもが多かったので、ポスターや招待状を手に会場設営をしているまわりに興味深く集まってきていた。3階よりも人数が多く年齢層も上なので会場は大変盛り上がりお手伝いにも積極的に手をあげて活気のある場となった。去年の前例があるので参加していたドクターや看護師もとても多く温かい目で見てくれていた。中学生の年頃の子どもの達も我を忘れてショーに入り込んでいたのがとても印象的で嬉しかった。今年の病院側の反応を見ても、続けて同じ場所で開催する意味があるような気がした。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】/・小さい子向けなのかなと思ったけど中学生の私もすごく楽しかったです。ぜひまた来てください。ペットボトルにトランプを入れたマジックがすごかったです。/・マジックがすごく楽しくてびっくりするマジックが多かったので、拍手を忘れてしまうことが多かった。また機会があれば来てください。/・見る前は中学生だからと思っていました。でも見てからは自分がやだなと思っていた気持ちが変わりました。本当に楽しめました。ごえ門さん、トランプをおしえてくれてありがとうございました。これからがんばろうと思います。アンディ先生のすばらしいマジックすごかったです。/・私は長く入院しているから、いつも毎日が同じことばかりでつまりませんでした。でも今回こういうパフォーマンスがあってよかったです。小さい子達も楽しかったと思います。/・最後のショーの時にアンディ先生にえらんでもらえて、ちょううれしかったです。アンディ先生にパワーをもらったので、ぼくは治りようをがんばり早く退院するぞ~!!

【医療関係者】

ほとんどが病室から外へ出ることが出来ず、単調な生活になりがちな毎日を過ごしています。特に長期入院児にとっては忘れられない日になったと思います。付き添いをされている親御さんにとってもストレスが蓄積されていると思いますが、今回のマジックショーは一服の清涼剤になったと思います。(コーディネーター 藤原市子)

14. 兵庫医科大学病院

「アンディ先生のマジックショウ」



実施場所	兵庫医科大学病院 第3会議室(10号棟3階)
実施日時	2010年11月30日(火) 15:00～16:00
作品名	アンディ先生のマジックショウ ((有)マジックファクトリー)
参加者数	52名 / 乳幼児7名 小学生7名 中学生2名 保護者12名 ドクター3名 看護師14名 保育士2名 事務職5名
病室訪問	2室 11名
コーディネート団体	特定非営利活動法人兵庫県子ども文化振興協会 スタッフ5名

実施病院について

兵庫医科大学病院は昭和47年4月開設以来、医学教育機関として、最新の医療施設と機器を備え常に高度な医療を行っている。また、阪神地区の基幹病院として、その責務を担い、周辺の医療機関との連携を図り、センターとしての重要な機能を果たしている。組織的には34の診療部と救命救急センター、がんセンター、PETセンター、健診センター、IBD（炎症性腸疾患）センターなどの26の中央診療施設に細分化してきめ細かな診療体制を提供し、標準的な治療はもちろん、高度で先進的な医療も提供している。

公演の内容

アンディ先生の愛弟子・モンブラン君によるフォーク曲げマジックに始まり、アンディ先生のあいさつマジックへ…スケッチブックから本物のボウリングの玉がでたり、破いた新聞紙が一瞬で復活したり。

空き缶のはずがコーラが入っていたり、抜いたカードがペットボトルへ瞬間移動。最後にはイリュージョンも飛び出し、鍵をかけた箱の中のアンディ先生とモンブラン君が入れ替わったりと、ひと時も目を話せない楽しい時間だった。

実施までのプロセス

兵庫医科大学病院は昨年も実施した病院という事もあり、今年も実施できますとご連絡した所、是非願いますと快諾をいただいた。事務局次長の山口様は会議のため欠席でしたが、管理課課長補佐の元嶋様、小児科看護師長の豊澤様と打ち合わせを行った。昨年も関わってくださったメンバーなので、昨年の公演の様子を振り返りながら検討した。看護師長の豊澤様からは「小学生の子どもたちがゲームばかりしているのが気になる、その子たちも楽しめるものを」という事で年齢層を少し高めて、今年はマジックに決定した。当日会場の会議室の周辺にはあちこちにポスターを掲示し、みなさんで楽しんで、期待をもって取り組んでいただいている様子がうかがえた。院長先生を始め、たくさんの病院関係者に

もご参加いただき、この事業を理解いただき嬉しい限りだった。病院側からは経費を少し出してでも、年に2回位こういった事業をしてほしいというご意見をいただいている。来年度に向けて実現可能な方法を相談しながら進めていきたいと思う。

当日の様子

昨年と同様に会議室を借りての公演。移動に少し時間がかかるという事で、病棟から徐々に集まってこられ、親子で歩いてくる子、車いすに乗ってくる子、点滴棒と一緒に移動してくる子、お母さんに抱っこされた乳児さんも。そして今回は本当にたくさんの病院関係者の方々に参加していただいた。乳幼児から中学生までの子どもたち、保護者、病院関係者と熱気あふれる会場となった。また今回は病院長も最初から最後まで熱心に観ていただいた。

元気そうな男の子、一番前の席を勧められたが、「こわい事ない？」と遠慮がち。お母さんがすぐ後ろに座られるという事で前の席へ。前に置いてある箱を観て「あそこからなんか出てくるんやで～」と友達と話をしたりと、ワクワクドキドキする気持ちが伝わってくる。最初はモンブラン君のかなり訛りのきいたおしゃべりからスタート。最初から子どもたちは目の前で繰り広げられるマジックに反応し、元気な声が客席から上がっていた。足にギブスをはめた車椅子の中学生は3年間の病院生活。アンディ先生から指名され、彼が書き込んだカードがいつの間にか今朝コンビニで買ってきたというお茶のペットボトルの中に瞬間移動したり、驚きと不思議の表情は自分の置かれている状況を一瞬忘れさせてくれたようだった。

参加した子どもたちは、幼児から中学生と年齢幅があったが、それぞれの興味をうまく引き出す舞台の構成はさすがプロの舞台人のすごさを見せてくれた。保護者や看護師など病院関係者の方たちも、当日のステージを心待ちにしていたようで、子どもたちに負けないくらい真剣なまなざしは、2年目のこの取り組みが病院側からも大きな期待をもって迎えられたと実感した。

その後、会場に出てこられなかった子どもたちのために病室を訪問した。子どもや保護者の方もアンディ先生とモンちゃんのマジックを楽しんだ。今回もたくさん子どもたちや保護者の方にホッとする時間を体験してもらった。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】

- ・まさかなまで見れるとは思わなかったです。モンちゃんのマジックが不思議に思いました。アンディ先生もすごかったです。また見たいです。/・アンディせん生がいっしょうけんめいしたからだとおもった。
- ・すごく元になります。

【保護者】

- ・たまたま参加できたのですが、すごくうれしかったです。初めての入院で不安だったと思いますが楽しめてました。/・子どもも親も楽しめたので本当にすばらしい時間でした!!/・大変だと思いますが頑張って活動を続けてほしいです。/・とても楽しかったです。子どもはマジックに夢中になっていました。ありがとうございました。

【医療関係者】

- ・すばらしい取り組みだと思います。少しでも多くの子ども達に楽しさ、安らぎを与えて下さい。
- ・本当にありがとうございました。職員ではできない楽しいイベントでした。
- ・子どもと一緒に楽しめる企画だと思います。

(コーディネーター 米川綾子)

15. 国立病院機構福岡病院

「びりとブッチーのクラウニングシアター」



実施場所	独立行政法人国立病院機構福岡病院 ①屋形原特別支援学校 ②重症心身障害病棟 新訓練棟 ③小児科病棟プレイルーム+病室訪問
実施日時	2010年12月17日(金) ①13:00～13:30 ②14:30～15:00 ③16:00～17:00
作品名	びりとブッチーのクラウニングシアター(蒼い企画)
参加者数	①屋形原特別支援学校39名/小学生～高校生16名 保護者4名 ドクター1名 ボランティア・その他(教師)18名 ②重症心身障害病棟 新訓練棟 57名/小学生～36名 保護者4名 看護師11名 医療保育士2名 ボランティア・その他4名 ③小児科病棟プレイルーム+4病室訪問 50名/乳児6名 幼児4名 小学生5名 中学生4名 保護者16名 ドクター3名 看護師10名 医療保育士2名
コーディネート団体	特定非営利活動法人子ども文化コミュニティ スタッフ4人

実施病院について

国立病院機構福岡病院は主たる診療科は内科、呼吸器科、心療内科、アレルギー科、小児科、外科、神経科、歯科、皮膚科、耳鼻咽喉科で、JR博多駅から車で20分、福岡空港から40分の福岡市南部にあり、優良病院としてもよく紹介されている専門医療施設です。研修・情報センター、病弱養護学校、室内温水プール、呼吸リハビリ棟、在宅重症児(者)支援棟、を併設しています。

公演の内容

特別支援学校では2年目ということで、わくわくと期待に満ちたまなざしで集まってきた子どもたちや先生に、びりとブッチーはウクレレとタンバリンを持ってお出迎え。二人のかけあいによるコミカルでリズムカルなパフォーマンスショーを展開。ジャグリング、パントマイム、バルーンショーなど。公演終了後は、重症心身障害病棟で公演。小児病棟プレイルームでミニ・ショー、そのあとプレイルームに來れない子どもたちに向けて病室訪問を行いました。

実施までのプロセス

昨年は長期入院している子が通っている特別支援学校で、通学している子どもたちといっしょに見ることができないか、という要望に応じて学校での実施をすることとなり、あわせて小児科病棟のプレイルームと病室訪問も行うことができた。今年度も学校での公演の要望があがったと同時に、昨年できなかった重症心身障害病棟での公演をぜひ行って欲しいという要望もあがったため、3ヶ所での公演を実施することとなった。Bプログラムとして実施したクリスマス絵本の展示と貸出は毎年好評のプログラムである。公演の1週間前に展示、終業式で入院している子どもが自宅に帰った後の12月24日夕

方に撤収した。病院だけでは揃えられない充実したラインナップや自由に読んだり借りれることが喜ばれる理由になっている。入院中の子どもだけでなく、つきそいの家族や保育士、医療従事者など、病院関係者が利用している。保育士さんが紛失がないよう自主的に管理していただいている。クリスマスのカードを作るミニ・ワークショップも大変喜ばれた。

当日の様子

(屋形原特別支援学校) びりとブッチーのさまざまなパフォーマンスに子どもたちはあっという間にひきこまれ、会場全体が一体となって笑いに包まれていた。「技がすごい」という感想の他に、「動きやモジョモジョという意味のない言葉だけでいろんなことが伝わっておもしろかった」、「まのあけかたがいい」など、子どもたちから舞台をよくみている感想がよせられていた。先生方からは「観て楽しむだけでなく、子どもがその中に言葉や仕草で加わりながら楽しむことのできる空間を造りだされていた公演だったと思います」という感想がよせられた。毎年の実施を希望している。

(重症心身障害病棟) ストレッチャーや車椅子で看護師とともに集まってこられる皆さんをびりとブッチーが出迎えて始まった。二人の掛け合いやジャグリング、音楽パフォーマンスなどに会場中に拍手と笑いと歓声があがっていた。終わってからは二人が患者さん一人一人に声をかけて送り出していた。看護師の方からは「重症心身障害病棟の方々が、思いもよらない表情や集中した顔をしておられた。やはり、本物の力ですね」という感想があがっていた。患者さん、医療従事者など参加したすべての人の笑顔が印象的だった。

(小児科プレイルーム、病室訪問) 乳幼児親子や小学生、看護師さんたちが集まっている中、二人が登場し、目の前でジャグリングや風船パフォーマンスなどを行った。最後のほうは学校から帰ってきた子どもたちも参加、チョコレートのパフォーマンスに「びりにもあげて!」という声があがっていた。病室から出られない子どもたちのいる病室の訪問では、おとうさんやおかあさん、おじいちゃん、おばあちゃんと子どもたち、みんなが二人の訪問に笑顔になっていた。二人の顔をまじまじと見つめるあかちゃん、風船を恥ずかしげに受け取る子、親子で顔を見合わせて笑いあう姿が病室ごとに見られた。毎年実施の期待が高いです。

アンケート / ヒアリングから

【子ども】・気分てんかんになっていいと思う!! 元気が出る!! / ・これからもチョコレートを食べた元気に公演してください!! / ・☆びりさんとブッチーさん☆今日はとても楽しかったです!! 元気をもらいました! / ・びりさん、けんかしたらだめだよ。さらじゃなくてじぶんがまわっていたからおもしろかったです。 / ・色々なわざやげいを見せてもらってとてもうれしいです。こんなすごいげいをする人たちに会えたのもうれしい。 / ・楽しそうなふんいきでとても楽しく見る事ができたのでとても満足です。これからも応援しますのでがんばってください。

【保護者】・顔を見るだけでも楽しい可愛い化粧が気に入りました。もう何回も見たい。 / ・とても楽しい時間をすごすことができました。1才でまだ分かりませんが、ところどころ笑顔になっていました。これからも子どものための公演をしていただき、より多くの子ども達に笑顔を与えてください。 / ・限られた時間で満足のいくピエロ公演ありがとうございました。付き添い入院も大変で、そんな中公演を見ることができ、私自身も勇気・元気ができました。子どもの久しぶりの笑顔が見れてうれしかったです。これからもより多くの子ども達親たちに笑顔を与えてください。

【医療関係者】・入院している状態はストレスなのでこのような催しは大切です。 / ・子どもや母親の笑顔でスタッフも元気をもらおう。 / ・スタッフも色々な試みをしているがやはりプロの方の公演はとても感心させられた。

(コーディネーター 高宮由美子)

Ⅱ - 3

プログラムタイプ A

実施病院ご担当者へのアンケート

結 果

タイプ A

「ホッとアートプレゼント」15 のケースに対する評価

①実施病院名

島根大学医学部附属病院

「スーパー人形劇・あかずきんちゃん」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年度も経験していましたので、不安はなく、スタッフ、患者さんとも大変楽しみに待っていました。昨年はクラウンでしたので、今年の人形劇はどんなに楽しいか期待していました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

子どもも保護者もスタッフも楽しい時間を過ごすことが出来ました。一人芝居の声の変わり方や、おやじギャグ（ごめんなさい）に大笑いしていました。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

病院と言う特殊環境の中で、楽しい事もあることが子ども達の闘病にプラスに働くのは確実と思っています。ベッド上での遊びしかなかった毎日から、プロの方のパフォーマンスが身近で体験できたことは、大きな思い出になったと思います。

開催頻度は年1回、または季節行事と一緒に2回あれば楽しいと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

今回のような大きな会のみでなく、小さい行事を定期的に開くことも考えたいと思います。

島根大学小児科

②実施病院名

あいち小児保健医療総合センター

「アンディ先生のストリートマジック」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

入院している子どもたちは年齢層が幅広いため、年齢を問わず喜んでもらえてよかったです。この日を楽しみにしていて、当日も何回もパンフレットを見る姿が見受けられました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

子どもたちは、とても喜んで鑑賞していました。積極的に手を挙げて参加する姿があり、十分に楽しんでいたと思います。マジックの最中は驚いたり不思議そうな表情をしたりしていました。保護者の方たちにとって気分転換や心地よい刺激になっていたと思います。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

入院して間もない子どもには不安が軽減されるし、長期での入院の子どもにはストレスが発散されます。子どもにとって子どもが主役で「ワー」とか「キャー」とか感情を出すということはとても大事です。また自分が主体的になると治療効果も高まります。今回の様なプレゼントも自分で参加して自分で楽しむということが力になります。多様な出会いはとても大切です。そんな出会いができるこの事業が続くことを期待します。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

子どもたちには病院の職員だけでなく、外の風を感じてほしいし、小さいうちに本物を見ることは刺激になり生きていく力になる。病院にいるからこそ見ることができたと思ってもらいたい。病院にいるとつらい治療や手術はある。日々の遊びなどで支援はしているが、全然違った面白さが必要になってくる。いろいろ体験させてあげたいが公立病院でお金がないため、こういう事業でお願い出来ればありがたい。

CLS 棚瀬

③実施病院名

和歌山県立医科大学附属病院

「アンディ先生のマジックショウ」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年度に引き続き実施していただいております、スタッフの不安はなく、むしろ期待が大きかったように感じました。招待状を配ったときからわくわくして楽しみに待っている子ども達の姿も見られました。入院している子ども達から保護者の方まで幅広い年齢層の方が、マジックを通して楽しむことが出来ると思われました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

本物のパフォーマンスが持つ人を引きつける力を目の当たりにしました。テレビやビデオではないライブ感がすばらしく、子供たちやご家族が熱心に鑑賞する姿が印象的でした。多くの子どもたちが、年齢相当の反応を示してくれ、理解できないだろうと考えられる年齢の子どもでも注目している姿には驚きました。保護者の皆さんも、日頃あまり触れる事のないプロの演技を目にして、しばし付添の疲れを忘れることができたようです。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

今回の事業でもこれまで同様、あるいはそれ以上にすばらしい成果を得る事ができました。子ども達は演技を熱心に鑑賞し、中には人生における貴重な体験をしたように思える子もいました。病気の苦しみや、注射などの嫌なことをしばしの間忘れることができました。付添のご家族も一緒に楽しむことができ、看病の疲れを癒されました。病院スタッフにとっては、皆で一つのことをやり遂げる喜びを体験することができました。今後もこのような事業は必要と思われます。可能であれば年に2回ぐらいあればよいと考えます。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

NPOの方々が種々の面に大変気を使っただき、感謝いたします。私ども医師も本事業の意義を十分感じておりますが、病棟での作業は実際的には看護師等が担当いたしますので、このすばらしい事業をさらに活性化するためにも、今後は実務の連絡を直接看護師としていただき、積極的にディスカッションいただけるとより円滑化が図れると考えます。

講師・病棟医長 中西 浩一

④実施病院名

金沢大学附属病院

「アンディ先生のマジックショウ」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年度に引き続き実施していただいております、スタッフの不安はなく、むしろ期待が大きかったように感じました。招待状を配ったときからわくわくして楽しみに待っている子ども達の姿も見られました。入院している子ども達から保護者の方まで幅広い年齢層の方が、マジックを通して楽しむことが出来ると思われました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

公演がすすむにつれ、子ども達がだんだんとマジックに引き込まれ、アンディ先生の手元を真剣に見つめる姿へと変化し、最後には夢中になっていました。これまで痛みのために立つことが出来なかった子どもも痛みを忘れ立ち上がることが出来ました。参加者みんなが、本物のパフォーマンスに触れ夢中になり心から笑い楽しめることのすばらしさを感じました。

とても良い時間を過ごすことが出来て良かったです。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

入院生活の中では普段なかなか見ることのない、笑い声・笑顔などとても生き生きとした表情を見ることが出来たことが印象的でした。入院生活を送っている子ども達や、その保護者にとって気分転換出来る良い時間となったと思います。また、プロフェッショナルの技を間近で見ることができた良い機会になったと思います。今後も定期的に継続していただければ良いかと思えます。実施頻度としては、その時々病棟の状況にもよりますが、年1、2回が良いのではないかと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

ありがとうございました。要望や改善点は特に思い当たりませんでした。今後、その都度の状況を踏まえ、対応していくことが出来れば良いかと思えます。

金沢大学附属病院 看護師長 西田 牧子

⑤実施病院名

宮崎大学医学部附属病院

「スーパー人形劇・あかずきんちゃん」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

ポピュラーな「あかずきんちゃん」の人形劇であるため、大きな期待はしてなかった。また、子どもたちが興味を持つのか、どれくらいの人数の子どもたちや家族が参加してくれるのが不安であった。

多数の参加がある中で易感染の子どもたちの感染対策が心配であった。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

普通の人形劇と思っていたが、人形劇が始まるイントロダクションから子どもたちの気持ちを引き付ける内容で、参加している子どもと家族が劇に集中してとても楽しんでいた。病室ではあまりお話ししない子どもが、人形劇の間の問いかけに答えていたり、人形劇を行っている人と子どもたちと家族が一体化しているように感じた。終了後に家族から「子どもも親も楽しめた。とても気分転換になった」との感想があった。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

入院している子どもたちが楽しめたことはもちろん、付き添いの家族の気分転換や癒し、参加した医療者の癒しになるという成果があったと思われる。

今後も今回のような事業は、入院という非日常の中にいる子どもと家族にとっては必要である。回数は、年に2～3回程度。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

今回、個室から出ることのできない子どもの訪問や人工呼吸器を使用している子どもの病室の訪問があり、とても喜ばれたことから、このような子どもと家族にもゆっくりと楽しんでもらえる時間がたくさんあると良いと思う。また、医療者も疲れていることから、医療者や成人病棟に入院している患者さんも楽しめる機会があると良いと思う。

看護部看護師長 中村 美保子

⑥実施病院名 **地方独立行政法人宮城県立こども病院**
「アンディ先生のマジックショウ」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

当院は昨年度実施して頂いた事もあり「せんだい杜の子ども劇場」の、事業の進め方や事務局の方の対応には信頼をもっており不安等は一切ありませんでした。事前に「ホットアートプレゼント」で作成して頂いたポスターを掲示し、保育士が入院しているこども達に説明を行いました。その時点からこども達が公演当日を楽しみに待っている様子を感じとる事が出来ました。こども達にとってめったに見る事が出来ない「マジックショー」を間近で鑑賞できることを喜んでくれると確信しておりました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

マジックショースタート!!と同時に食い入る子ども達のキラキラした眼差し、真剣に見つめる表情から次のマジックへの期待感が膨らむ思いが我々にも伝わってきました。子供達は興味津々で、アンディ先生から「やってみたい人」と参加を促された場面では、積極的に手を挙げ参加し、マジックショーに驚きと不思議な思いとで呆然としていましたが、ショーが終わった頃には、満足感に満ちた笑顔が見られました。又、保護者の方々も一時の間のつらい治療を忘れ子供達とともに、十分楽しんで頂いた様子が伝わってきて印象的であった。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

こども病院では、行事委員会及び事務局との連携で、イベント・慰問に関して当院の理念に賛同頂いています。また、ご有志の方達や諸団体の方達の受入を数多く実施しています。今回のマジックショーでは、現在入院中のこども達とそのご家族、そして病院関係者全ての人達が大変感動し、喜んで頂くことが出来ました。前年度事業報告「アンケート結果」の通り、医療従事者が「とても満足」・「満足」が9割、「子どもの様子」について「とても楽しんでいた」「プロの生公演に吸い込まれていた」「辛い診療を一瞬忘れられた」「次回の公演を期待した」など全ての項目で7割以上の評価を得たことから見ても、成果があり、本事業の必要性があると思います。他とのイベントの関係上、今後の開催希望は年1回の開催が理想的であると思います。来年度の「ホットアートプレゼント」の開催を今から楽しみにしております。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

昨年に引き続き、開催をして頂きました事に感謝申し上げます。公演当日に至るまでの打合せは、事務局の適切なアドバイスの元スムーズに進める事ができました。今回の公演内容も日程調整も当院の要望をかなえて頂きまして有難うございました。

成育支援局成育支援局次長 星 芳夫

⑦実施病院名

独立行政法人国立病院機構舞鶴医療センター

「①いたずらうさちゃんほか 2 作品、 ②きつねのまんまほか 1 作品」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年度も当施設で事業を実施していただき好評であったので、特別な不安は何もありませんでした。今年も子どもたちの笑顔が見られると思い楽しみにしておりました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

今年は人形劇と言うことで、昨年よりも近くで公演に集中しているように見受けられました。公演の内容もとても洗練されており、心温まるパフォーマンスであったと思います。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

今回は子育て中の地域の子どもたちに向けた企画も盛り込まれ、病気で入院している子どもたちもまた地域の住民であって、地域の子どもたちとして同じように育てていかなければならないというメッセージを残したのではないかと思います。今後も入院中の子どもたちを含めて、子育て中の親子を支援するような事業の継続をお願いします。少なくとも年に一回はこのような機会を作っていただければありがたいと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

今回も事業の企画立案に当たり、多くの皆様にご協力いただき感謝しております。病室から出られない子どものために病室を回って、一人一人に話しかけながら人形を見せていただいている光景にとっても感動しました。心が触れ合う瞬間を共有出来たように思います。全体として昨年よりも良い事業になったのではないのでしょうか。

副院長 常盤 和明

⑧実施病院名

一宮市立市民病院

「びりとさくちゃんのクラウニングシアター」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年に引き続き「びりとブッチーのクラウニングシアター」をお願いしましたが、今回は都合上女の子のクラウン「さくちゃん」にきていただけることになり、「どんなクラウンにきてもらえるのかなあ」と昨年見た子供たちも初めての子供たちも楽しみにしていました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

昨年は病室訪問を受けた子が、今年は体調がよく講堂に出かけ、間近でパフォーマンスを見ることができました。今までに見たことがないような、うれしそうな表情を見せてくれたその子を見て、お母さんだけでなく、主治医、看護師、その他のスタッフみんなで喜び合っていました。また、初めて見る子も保護者と一緒にとっても楽しい時間を過ごすことができたようでした。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

病気で入院している子どもたちにとって、入院生活は長くて辛く感じる人が多いもの。この事業で楽しいひと時を過ごすことができ、子どもたちには明るい笑顔がみられ、講演終了後もあったかい雰囲気が残っていました。いつもは病気を診る「先生」や「看護師さん」と一緒に楽しい時間を過ごすことができたことも、すばらしい体験だったと思います。病室に帰った途端、子供たちから「次はいつきてくれるの？」という質問が相次いでいました。可能であれば、半年に1度くらいの頻度でお願いできればと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

今年もパフォーマンスの後で病室訪問も多数していただきありがとうございました。病室訪問でしか参加できない子供たちにもとても喜んでもらうことができました。ただ今年はこちらの不手際で、病室訪問の際に元気な子が一緒について歩いてしまい、具合の悪い子にとっては不快な思いをさせてしまったのでは、という病院側の反省点がありました。

医療相談室 医療ソーシャルワーカー 宇津野 靖子

⑨実施病院名

国立国際医療研究センター国府台病院

「アンディ先生のマジックショウ」

(タイプBプログラム / 「ウキウキ・ワクワク工作」)

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

今年度も事業を行っていただけるとのお話を伺い、スタッフとしては非常にありがたいと期待は高かった。子どもたちはポスターや招待状という事前のお知らせ、視覚的支援もあり楽しみにしていた。前年度の経験の蓄積があり、実施への不安はあまりなかった。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

病状から行動範囲が制限されている子どもたちも多数参加でき、気分転換になったと思う。工作では熱心に粘り強く作業に取り組み作品を作り上げた達成感、また初対面の係りの方に疑問や主張を伝えられたことは、自信につながったのではないかな。マジックショーでは活き活きした表現や素直な感情表出がみられ、同じものを見て一緒に楽しむ場を子どもたちが共有できたことは本当に良かった。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

子ども達が自らの五感を作ってものを作り上げることは、作品が手元に残る点でも、達成感が実感を伴って体験できた貴重な機会であった。また、同じものを見てともに驚き喜ぶ経験一体となる体験は何より子どもたちに治療的に働くと思われた。地域の方と子どもたちが接する良い機会にもなると思う。このような事業の必要性を強く感じ、ぜひとも続けていただきたい。理想としては、2～3か月に1回でも来ていただければ大変ありがたい。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

工作で、各部門との連携がもう少し行われ、より多くの作品に出合うチャンスがあることを子どもたちにわかりやすく伝えていただけると良かったかもしれない。今後ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

児童精神科医師 黒江 美穂子

⑩実施病院名

東京大学医学部附属病院

「びりとさくちゃんのクラウニングシアター」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

患児が幅広い年齢層に渡っていることと発達の違いがあるため、どのようなパフォーマンスが適切か悩みました。また、どれも患児たちが喜びそうなもので迷いました。患児が一同に介することで感染拡大の懸念がありました。今年は2回目で当院の現状を細部までご理解くださった上での企画であり、安心してお任せできました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

患児も保護者も終始満面の笑顔で、スタッフも楽しい気分になりました。中にはあまり話をしない高校生の患児も、最初から最後まで笑顔で参加していて驚くこともありました。重症者への訪室も実施して下さり、悲しみと疲労が募ったご家族の方々に対し、涙混じりの笑顔ではあったものの、後日「夢のような時間だった」と、ご家族から評していただける貴重な時を提供していただきました。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

東の間とはいえ、日常の痛みや苦しさ、寂しさを忘れる時間を提供していただき、とても大きな成果でした。病院には医療の提供に必要な人材・物は確保されていても小児の成長発達に必要な養育的なことに関する整備は充分でないのが現状です。安全性が確保され、信頼できる組織の方々の取り組みということもあり、今後も継続して下さることを希望致します。

実施頻度は年2回程度で、歳事が少なく感染症が流行しにくい季節を希望します。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

ご担当者の皆様には、とても丁寧に対応していただきました。全ての患児にひとつずつ素晴らしいバルーンアートをプレゼントしていただき、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この気持ちたちが充分お伝えできたか、失礼なことはなかったかと心配です。

これからも患児と家族のために、ご活躍されることを願っています。

看護師長 福田 桂子 大友 英子

⑪実施病院名

山口大学医学部附属病院

「アンディ先生のマジックショウ」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

プロの催し物ということで、患児に日頃のストレスを少しでも忘れ、楽しんでもらえたらと期待していました。ただ、建物の構造上余分なスペースが無く、準備も不十分で大丈夫だろうかという不安はありました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

予想以上に劇団の方の準備・本番の手際が良く、さすが全国の様々な施設でプロとして活躍されている方々だと感じました。また、披露していただいたマジックも大変本格的で次々と繰り出されるマジックに、患児のみならず、ご家族の皆様も十分楽しまれた様子でした。日頃、疾患の為もあり発語の少なかった患児が、劇団の方に一生懸命に思いを伝えようと振り絞って声を出した姿には感動しました。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

小児科病棟の催し物として、十分効果を発揮していただけたと思います。本当にありがとうございました。今後も是非いらしていただけたらと思います。今回は、当科・企画側共に不慣れな点が多く、準備に時間を要しましたが、頻度が多くなればその点もクリア出来るのではと考えております。

頻度に関しては、当院小児科病棟は年間7回程度の季節に合わせた『お楽しみ会』を企画しております。可能であれば、その半分程度の3回を目安にいらしていただければと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

大変お世話になりありがとうございました。多くの段階を各部署で踏まなければならない為、連絡等がスムーズに行かず準備に時間を要した点が残念でした。お手数とは思いますが、今後は事前にご連絡等頂き、しっかりコミュニケーションをとって進めて行けたらと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

1-5 東小児病棟病棟師長 末重 千里

⑫実施病院名

独立行政法人 国立成育医療研究センター

「びりとブッチーのクラウニングシアター」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

今年度お世話になった「びりとブッチーのクラウニングシアター」は「アンディ先生のマジック教室」「子ども寄席」に続き3回目の来院イベントとなりました。双方が慣れて来たこともあり、事前の打ち合わせが少し足りなかったようにも思いました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

子供たちがひたすら無心に笑い転げる様子にこちらも心が和みました。一見すると単純な笑い（実は裏にあるプロのものすごく計算し尽された芸）の力ってすごいな〜と、一緒に笑いながらも、感嘆して子供たちの笑い顔を見ていました。そして子供たちの笑顔が保護者の方にも一時の何よりの癒しになると感じました。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

子ども達が心から笑うひと時が持てた。そして保護者の方もその笑顔に接する時間を共有することが出来たという事が、一番の成果だと思います。短時間ではありますが、入院中の子供たちに笑顔が届けていただくこのような事業は是非続けて頂きたいと願います。

実施頻度は年1回位が当センターに於いては望ましいと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

もし又お越し頂けることが可能であれば、次回は、当日の医療関係者と患者さんへのアンケート方法を病院側と少し検討させていただければと思います。

成育医療研究センター・ボランティアの会・イベント担当 竹内 恵子

⑬実施病院名

北海道立子ども総合医療・療育センター

「アンディ先生のマジックショウ」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

HOT もっとプレゼントは、昨年の「びりとブッチー」さんに引き続き2回目です。今回はプロのマジックなので、どのような形になるか期待と、どんな反応があるかイメージが出来にくかったのですが、きっと楽しい時間になるのでは。という予感もありました。特に、療育病棟の場合、学校から帰ってきてすぐの時間で入浴時間と重なる子どもも居ることから、みんな間に合うかどうか心配なこともありました。また、当日の子ども達の体調や季節的にインフルエンザなどの流行が心配でした。結果的には、小児病棟、療育病棟どちらの子ども達も元気で、みんなが協力してくれ楽しい時間を作り出せました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

今回のようなマジックショーは初めてなので、ポスターをディールームに貼り、招待状を渡しマジックショーをするよ。と話してあげたら、子ども達は何時来るの？どんなことやるの？等々問いかけてきたりと、楽しみにしていました。当日は軽妙なアンディ先生の話しと「え～どうして？」と驚く瞬間移動、モンちゃんのズーズー弁、五右衛門さんのカードマジックなど、目を開いて真剣に、そして笑い。楽しく、不思議な時間を共有できたと思います。病室から出られない子どもへの出前マジックも大変喜んでもらえたと思います。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

当センターに入院して治療やリハビリをするなど、非日常的な状況の中で生活している子ども達、家族の皆さん、職員達にもとっても楽しく、和める時間であったと思います。今後も、子ども達も家族も共に楽しめ、ホッとできる時間をプレゼントすることは大切だと思います。毎年継続して企画して頂ければ良いと思います。アンケートでは、毎月、年に数回とか、季節毎にとか、様々な声が書かれています。毎月は難しいと思いますが、年に1～2回、可能であれば季節毎に楽しい企画が出来れば良いと思います。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

事前打合せの実施など細かな点も確認できるので、準備なども問題なく進められて良いと思います。アンケートなどは今後の企画のためには必要だと思います。開催日や時間等出演者の都合もあるので、制約があるのはやむを得ないと思いますが、翌年度の企画に間に合えば年間計画に組み込んで行うことも可能です。

指導係長（児童指導員）佐藤 薫

⑭実施病院名

兵庫医科大学病院

「アンディ先生のマジックショウ」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年度は、人形劇を開催いただき大変好評でした。今年度は、手品を実施していただけるということで、なかなか普段目で見ることができないものへの大変な期待感があり、小児の患者さんのみならず、親御さんや当日お手伝いする病院スタッフにとっても大きな期待感、わくわく感がありました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

小児の入院患者さんが、すごく感激しアンディ先生の世界に引き込まれていく姿がよくわかりました。また、患者さんだけでなく、親御さん、病院スタッフ全てが、アンディ先生の手品の世界に引き込まれて行きました。昨年度とは別の意味ですごさが伝わりました。また、会場での手品終了後は、病室も廻っていただき、会場に来れない患者さんが感動する姿に病院スタッフも感激しました。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

十分に成果があったと考えます。入院生活に喜びや、感動を与えていただき素晴らしい事業を展開しておられます。

普段と違った刺激を入院患者さんに伝えることができることは素晴らしいことだと思います。前年度も回答しましたが、年2回開催していただけたら、患者さんもさらに張りのある生活を送ることができ、精神面でもプラスになると考えます。

是非、更なる事業展開をしていただきますよう切に希望いたします。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

イベントは、前年度2回、本年度1回実施いただきましたが、いずれも素晴らしい内容で今後とも継続してお願いできれば幸いです。

こういった取り組みを定期的実施することで、急性期病院で重症患者さんが多い中で、少しでも「いやし」を患者さんに与えられるよう当院としても努めてまいりたいと思います。

病院事務部次長 山口 勲

⑮実施病院名

国立病院機構福岡病院

「びりとブッチィーのクラウニングシアター」

Q1 事業実施前の本事業への期待、不安、予想などは、いかがでしたか？

昨年、初めてこの事業を実施していただき本校の児童生徒、職員、保護者みんなが笑いと感動に包まれました。今回もお話をいただき、昨年同様ステキなプレゼントに胸をワクワクさせていました。あの愉快的びりとブッチィーさんのパントマイムや音楽ショーにきっと会場全体があたたかい雰囲気になり、みんなが喜ぶことを期待していました。

Q2 実施して、子ども・保護者の様子をどのようにご覧になりましたか？

やはり期待していたように、みんなの心がひとつになり、ホッとする思いの中で、会場にいる子どもたちや職員、保護者の方々が大変喜んでいました。子どもたちの中には、くい入るように見つめている子もいたし、大きな驚きの声を発する子やとびっきりの笑顔で笑っている子もいました。特に、不登校の傾向があり、日頃あまり笑顔が見られない子がおもしろそうにステキな笑顔を見せながら満足そうにしている姿が印象的でした。

Q3 この事業の成果はありましたか？ それはどのようなことですか？

また今後、本事業は必要、不必要いずれでしょうか？

必要であれば理想的と思われる実施頻度をご回答ください。

長期入院している子ども、通院しながら学校に通っている子ども、心に悩みをかかえている子ども、一人一人その状況は違っても、みんな精一杯生きています。苦しいことがあっても、つらいことがあっても、みんなで元気よく楽しく生きていこうよ、こういったメッセージを送られているのが、この「HOT もっとプレゼント」のような気がします。子どもたち一人一人の元気な姿は、その笑顔にあります。とびっきりの笑顔を演出してくれるこの事業は、是非必要であるとし、毎年クリスマスプレゼントになればいいなと願っています。

Q4 実施後感じられた、本事業へのご要望、改善点など、お書きください。

子どもたちに夢や感動、そしてステキな笑顔をプレゼントしてくれるこの事業、今後も続けてほしいと思います。この事業は子どもたちだけではなく、保護者の方々にも見ていただくことにより、毎日子育てママに悩んだり苦しんだりしている方に勇気や楽しく生きることの素晴らしさを感じてもらう、本当にステキなプレゼントだと思います。

屋形原特別支援学校

わたしたちは、子どもが「子ども」として生きられる社会をめざし
公益活動を行っているNPO法人のネットワークです。

わたしたちは、
子どもと大人のパートナーシップで、子どもたちが、夢と希望を持てる社会をめざし、地域における芸術体験や、遊び体験を通じ、子どもと大人が共に育ちあい、子どもの社会参画への機会を広めていくNPOです。ワクワクドキドキする感動や、さまざまな人との出会いから、子どもも大人も豊かに育つ…そんな居場所を地域に広めていくと同時に、「子どもの権利条約」や「芸術文化振興基本法」「特定非営利活動促進法」「次世代育成支援対策推進法」など、子どもと文化、及び市民社会づくりの基盤整備にも貢献しています。

安心できる「子どもの居場所づくり」
子ども主体の体験活動の推進・普及
全国の子どもたちに提供し、「子どもの居場所づくり」事業、地域の大人の「きずな」づくりのための「地域活性化推進事業」を積極的に全国的に推進・展開しています。また、子どもの主体的な体験活動・遊びの場づくりを推進し普及しています。

芸術作品の招聘と舞台芸術作品の紹介
コーディネート
子どものためのすぐれた国内外の作品を企画し、全国の子どもたちに提供し、コーディネートを行います。また、全国各地の子どもと子どもの文化の団体・公共施設とも連携し、子どもが「生」の舞台に接する機会を創ります。

子どもにかかわる諸団体との連携とサポート
全国各地の子どもと子どもの文化にかかわる活動を行う団体の基盤づくりになる情報・人材養成・子ども施策等の提供と連携及びサポート。また、子どもや団体が安心して活動できるように、保険制度の開発・運用にも取り組み、子どものためのNPO法人づくりのお手伝いや助成金やマネジメントの情報提供、講師派遣なども行っています。

子どもの社会参画へのサポート
子どもの権利条約の実現をめざし、子どもにかかわる団体とのネットワークづくり。子育て支援や、電話で子どもの声に耳を傾ける「チャイルドライン」への支援。また、子どもが企画運営する全国規模のイベントや子どもの表現活動をサポート。子どもの社会参画を実現していきます。

子育て応援ダイヤル「ママババライン」の開設とネットワークづくり
乳幼児を持つ親・家庭の子育ての悩みや不安に共感的に耳を傾け、寄り添いながら気持ちを受け止める「傾聴の電話ママババライン」を、全国各地に開設し普及する。「ママババライン全国ネット」としての子育て支援の事業。(ママババラインの聴線登録取得)

ママババラインほかいどう (北海道) 080-6062-4735
ママババライン仙台 (宮城県) 022-773-9140
ママババラインちば (千葉県) 043-204-9390
ママババライン東京川の手 (東京都) 03-3633-0415
ババラインあいち (愛知県) 052-203-8655
ママババラインわかやま (和歌山県) 073-432-3690

●任意団体設立 1966年7月21日
●NPO法人設立 1999年4月19日

特定非営利活動法人 子どもNPO・子ども劇場全国センター
〒160-0022 東京都新宿区新宿1-29-5 グランドメゾン新宿東902号
TEL: 03-5369-2811 FAX: 03-5369-2812
E-mail: info@kodomo-npo.org URL: http://www.kodomo-npo.org

平成22年度 独立行政法人福祉医療機構「先進的・独創的活動支援事業助成金」

HOTもっと プレゼント

本日はご来場いただき
まことにありがとうございます。

「HOTもっとプレゼント」は、
病気で入院・療養・通院をされているお子さん方に
笑顔と感動 そして、
楽しいコミュニケーションのひとつが生まれることを願い
パントマイムやクラウン、人形劇や音楽などの小作品を
そして、
「こんなことができたらいいな！」
というプログラムを
地域のNPOと全国の仲間が
病院にお届けする活動です。

ご家族のみなさん、関係者のみなさんもしっかりに
ホッとするひとときを
ゆったりお楽しみください。

みんなの笑顔が広がりますように！！

病児QOL向上・病院支援コーディネート事業
HOTもっとプレゼント2010

「HOTもっとプレゼント」2010の作品例



YEN TOWN FOOLS
二人はすぐに誰ともお友達になれる愉快なクラウンです。ブッチーは、お茶目、ひりりはちょっと間抜けなキャラクター。タイプの違う二人がジャグリング、楽器演奏、マジックパルーン、ドタバタコメディなどバラエティ豊かなプログラムで想い通りに残る、楽しいひとときをお届けいたします。

今年は、さらに
ママのための
ホットタイムも企画中



ねずみのすもう
人形芝居 ねずみ
ねずみのチュウ吉とチュウコちゃんのやりとりがほほえましく楽しい人形劇です。



アンディ先生のマジック
マジックファクトリー
夢のような魔法の世界。わくわくするようなマジックをアンディ先生が教えてくれます。



あかぎきんちゃん
スーパー人形劇 & あかぎきんちゃん
みんながよく知っている、赤きんのお話が、おかしくて、お腹がよじれてしまう、楽しいお話になりました。舞台が歩いてやってきて、すべてを一人で見ます。



子ども寄席
社団法人 落語協会
子どもが興味をもてる落語、紙張り、太神楽曲芸、扇子と手ぬぐいだけの小道具だけで演じられる落語は、子どもたちの想像力を膨らませます。

2010年度 HOTもっとプレゼント実施予定 (2010年8月時点)

地域	実施病院	コーディネート団体	コーディネーター
石狩	北海道子ども総合医療・療育センター	(特) こども・コムステーション・いしかり	藤原 子子
仙台	宮城県立こども病院	(特) せんだい社の子ども劇場	斎藤 純子
千葉	国立国際医療センター・国府台病院	(特) 子ども劇場千葉センター	綿貫 のぼる
東京	東京大学医学部附属病院	(特) 子どもNPO・子ども劇場全国センター	稲垣 秀一
東京	国立成育医療研究センター	(特) 子どもNPO・子ども劇場全国センター	中村 雪江
愛知	あいち小児保健医療総合センター	(特) 名古屋おやこセンター	松野 美子
愛知	一宮市市民病院	(特) 子どもと文化の森	水野 裕子
愛知	JA 愛知厚生連 江南厚生病院	(特) 子どもと文化の森	水野 裕子
石川	金沢大学附属病院	子ども夢フォーラム	高木 真理子
京都	国立病院機構 舞鶴医療センター	(特) 京都子どもセンター	福田 美和子
兵庫	兵庫医科大学病院	(特) 兵庫県子ども文化振興協会	米川 綾子
和歌山	和歌山県立医科大学病院	(特) 子どもNPO和歌山県センター	岡本 瑞子
鳥根	鳥根大学医学部附属病院	(特) しまね子どもセンター	中田 朋子
山口	山口大学医学部附属病院	(特) 子ども劇場山口県センター	三好 美喜子
福岡	国立病院機構福岡病院	(特) 子ども文化コミュニティ	高宮 由美子
宮崎	宮崎大学医学部附属病院	(特) みやざき子ども文化センター	片野坂 千鶴子

「HOTもっとプレゼント」推進プロジェクト委員

柳澤 正義	社会福祉法人恩賜財団母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所所長/国立成育医療センター名誉総長
伊藤 雅治	全国社会保険協会連合会理事長/健康日本21推進国民会議・健やが親子21推進協議会会長
坂本 恵枝	日本医療機能評価機構・消費生活アドバイザー
半田 勝久	東京成徳大学子ども学部子ども学科准教授
岡田 泰子	(特) 子ども劇場千葉センター 代表理事
大森 智恵子	(特) 子ども劇場千葉センター 事務局長
竹内 洋江	(特) 名古屋おやこセンター 理事長
記録 主	(特) 子どもNPO・子ども劇場全国センター
監査	高宮 正義 (理事)
推進プロジェクト委員長	中村 雪江 (専務理事)
	古賀 圭子 (監事)
	稲垣 秀一 (代表理事)

「笑顔のメッセージ」大募集！！
入院している子どもからの
イラスト・笑顔の写真・作文・メッセージ
なんでもOK！！

全国500以上の小児病棟を
日本中で応援するネットワークに挑戦中
病児にいつでも、どこでも
「HOTもっとプレゼント」を
届けられるように、私たちは
小児病棟を正しく理解して頂き
広く市民寄附を募ります！

プロジェクトの後半には、入院病児と家族、そして小児病棟を多くの人々が応援しているプロジェクトであることをインフォメーションするためのリーフレット配布も試みた。

小児病棟へ笑顔を贈る「ホッとアートプレゼント」紹介



これらの写真は、本プロジェクトの意義を理解し応援して下さる小児病棟で、プロジェクトの周知を目的とした「笑顔のメッセンジャー」として、地域みなさんに協力して頂きました。

「ホッとアートプレゼント」は、闘病する子どもたちを真ん中にした、保護者・医療スタッフを応援する、NPOネットワークによるプロジェクト。厳選したプロのクラウンや人形劇、マジック公演を届け、一瞬でも辛い治療や病気を忘れ、子どもらしい笑顔を取り戻すひとときを提供しています。今後はさらに病児QOL（生活の質）向上に必要なプログラムを開発し、病棟のニーズ応じて社会全体で応援していきます。

なぜ「ホッとアートプレゼント」が必要なのでしょう？

日本の小児病棟に入院している子どもたちは、推定一日 3.3 万人、年間では延べ 1200 万人に上ります。病児の QOL を高めるには、現行の医療制度だけではまだまだ不十分です。欧米先進国レベルまで病児の QOL を向上させるには、医療スタッフのニーズを支援する仕組みが必要です。そして、地域医療現場のニーズに応えるには、最前線の医療スタッフからリアルなニーズが発信され、必要とする人の元に、必要とするリソースが届く社会的な仕組みが必要です。

① 心からみんなが楽しめるクオリティと安全性を維持

プロジェクトは、北海道から九州まで地域 NPO・市民グループと緊密なネットワークを形成。病児の年齢や病院の状況にふさわしいプログラムを厳選。病院の様々な実情に合わせエントリーから評価検証まで、病院の負担をできる限り軽くする独自のガイドラインに沿ってコーディネート。全体をオーガナイズする子ども NPO・子ども劇場全国センターは、小児医療専門家、子どもの権利の専門家を配し様々なケースを分析。品質を維持する研修を着実にを行い、地域現場をサポートすることで、クオリティと安全性をキープしています。デリケートな病児 QOL 向上に求められるプログラムを提供する専門の研修を積んだコーディネーターとボランティアスタッフは、2010 年 9 月現在、13 都道府県 70 名を超えています。

② 医療関係者からの高い信頼と評価

プログラムを体験した医療関係者からは、病児の QOL 向上について、このホットアートプレゼントは様々なプラスの効果があるという評価を得ています。実施実績は慢性期病棟に限らず、急性期病棟や病室訪問、NICU まで含まれています。

③ 全ての実施病院から再演希望

2009 年度末現在 28 の公演、全対象（子ども・保護者・医師・看護師・保育士・スペシャリスト・ボランティア）の 90% から再演を望まれ、2010 年度も継続的に実施進行しています。また地域に密着したコーディネーターと病院関係者の信頼関係を築くことで、小児病棟が必要とする様々なニーズを伺い、付き添う母親支援などのプログラムへも展開しています。

④ プロジェクトを今後も継続するために

しかし、病院がこのプログラムを独自で実施することや、医療制度で経費を捻出することは困難です。これまで実施した 2008 ～ 2009 年度 2 年間の実施経費は全て独立行政法人福祉医療機構の助成金によってまかなわれてきました。実施実費の他にも不可欠な要素として、安全対策、評価検証、コーディネーター育成研修など、経費は総額 2000 万円を超えています。今後もこのプロジェクトを継続展開するには、小児医療に関する現状と課題を広く社会に啓発し、「ホッとアートプレゼント」の有効性を理解して頂くことが必要です。私たちは、小児医療環境を充実するために、病気の子どもとご家族を社会みんなのチカラで応援する仕組みづくりにチャレンジしています。応援ホームページは、2011 年 3 月公開予定です。



Ⅲ

「病児 QOL 向上・病院支援コーディネート事業」

考察とまとめ

～ニーズ調査と活動の結果を踏まえて～

「病児 QOL 向上・病院支援コーディネート事業」考察とまとめ

■本調査では、「子どもの QOL (Quality of Life)」とは、「子どもの主観的な心身両面からの健康度・生活全体の満足度」(古荘 2007:前掲)という定義を参照した。その尺度は、①身体的健康、②情緒的ウェル・ビーイング(気分・感情)、③自尊感情、④家族、⑤友達、⑥学校生活の 6 領域とされている。この調査では、入院してケアされている①身体的健康と、⑤友達、⑥学校生活を除き、②情緒的ウェル・ビーイング、③自尊感情、④家族の 3 つの尺度と、その尺度を評定する項目に限定した「QOL」に注目する。

各 4 つの評価項目を以下に列挙する。

②情緒的ウェル・ビーイング(気持ち・気分)

「わたしは楽しかったたくさん笑った。」

「わたしはつまらないな、と思った。」

「わたしは独りぼちのような気がした。」

「わたしはなににもないのに怖い感じがした。」

③自尊感情

「わたしは自分に自信があった。」(自分はよくやった)

「わたしは自分が何でもできるかんじがした。」

「わたしは自分に満足をしていた。」

「わたしはいいことをたくさん思いついた。」

④家族

「わたしは親と仲良くしていた。」

「わたしは家で気持ち良く過ごしていた。」

「私は家で喧嘩をしていた。」

「わたしは親(お父さんやお母さん)に、やりたいことをさせてもらえなかった。」

これらの項目は小学生自身が評価する質問で、自分で答えられない年齢の児には、親が子どもの様子から同じ質問を回答できるバージョンも作られている。

Ⅰ「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」

医療スタッフは子どもの病気・治療・療養などにより生じる制限や抑制とバランスさせながら、子どもの気持ちと環境を充足させるケアを指向していると想定し、そのために医療スタッフが必要としているニーズを把握するための質問を構成した。

小児科専門医研修指定施設の平均像を描くと、7 割強が 1 病棟で、ベッド数は 10 ～ 55 床までが全体の 9 割、医師数は 5-8 人が 4 割、9-19 人が 3 割強。施設の半数の看護師は 21 ～ 30 人が中心値、保育士は 6 割弱の施設で一人は配置され、ソーシャルワーカー・相談員は約 3 割に配置され、学校の先生は半数近くにいて、病棟内で児に関わるボランティアは常時でない場合も含めれば 3 割程度。大きな施設では 10 病棟ベッド数 1000 床、医師 660、看護師 1000 人を超えていて、ごく少数の大規模施設があることになる。

こうした施設に入院している児の年齢層は、約 4 割強の施設に新生児から高校生までが、7 割強の施設には乳児から中学生が居られると思われる。そしてベッド数と上記スタッフ数との単純な相関性は見られないことから、疾患のタイプや年齢層、急性期・慢性期、重症度など複合的要素によって子ども一人に対するスタッフ体制が左右されていると思われる。入院病児の QOL を支える基盤は、複数の職種スタッフ体制によって支えられ、対人信頼関係が成立していると思われる。ここで、入院病児の QOL 向上を考えるに当たり、一人の医師の「病気になることは、マイナスだけではない。子ども自身にとってプラスの体験にもなりうる」という記述をヒントに、「病気になる＝かわいそう」という図式を取り払い、前項の評価尺度を踏まえながら「子ども自身にとってプラスの体験になりうる」にはどのような要件が満たされればよいのか？というポジティブな視点を持ちつつ、病棟スタッフのニーズについて考えてみる。

病棟に入院している病児の疾患タイプは、「主に急性期」が 4 割、「両方のタイプ」の子どもがいる病棟は 5 割強で、「主に慢性期」は 4% であった。「急性期」の入院期間は、4 日～1 週間、10 日、2 週間などの記述があり、子どもの活動環境としてプレイルームは回答者施設の 8 割にあって「30 ㎡以上」は 3 割、「30 ㎡未満」3 割で、「分からない」は 3 割であった。保育士の配置状況と入院管理料区分制度を考え合わせると全体の 6 割強が 30 ㎡以上ある可能性はある。他にも「食堂」3 割弱、「談話室」

2割強があり、個別的には様々なスペースがある場合があることも分かった。また特別支援学級は24%に、特別支援学校は11%にあり、訪問型も含め特別支援教育の体制がなかったのは約半数の46%で、病棟の約4割が「急性期」で入院期間が一週間前後であることと、学校の先生がいるのは、必要があるときに来てくれるということを含めて半数であることに整合性が見られた。

プレイルームなど子どもの活動空間利用状況について、「乳幼児（親子）」の場合、開放時間が決まっていて、安静、感染、点滴、処置時間、保護者の付き添い有無などで、医師が判断している場合が多い。子どもに付き添う保護者は、親、保育士、看護師、一部にボランティアが見られ、活動は、おもちゃ、ままごと、絵本、TV・DVD、折り紙、三輪車、など。保育士の記述には、設定保育、制作、リズム遊び、レクリエーションなどの記述が多く、保育所、あるいは付き添う親を対象とした子育て支援広場的な環境づくりとケアがされていることがわかる。

一方、対象児が「就学年齢児」の場合は、乳幼児親子と同様の「きまり」があるようだが、院内学級や学校がある施設では、子どもの日中活動は学校に依拠していると記され、子どものフリーの時間に単独で利用できるとしている回答が多い。活動内容は、マンガ、ゲーム、学習、読書、DVD、テレビ、カードゲーム、ボードゲーム、手芸・工作などが上げられる。ただ保育士の記述に小学高学年になるとプレイルームを訪れても遊ぶものがないという記述も散見され、乳幼児を対象としたイキイキとした描写は減っていた。実際「ホットアートプレゼント」の活動においても、入院期間が長いと思われる学齢期低学年の子どもの「仲間」的な遊びと保育士との親密性が感じられる微笑ましい場面に出会う一方、学校がない施設で少数の中高生の所在無げな様子が気にかかった。この点について、次の調査結果を見てみる。

病棟内に子どもが活動するスペースがある場合で、なおかつ中高生が自由時間を楽しんだり交流できるスペースについては、3割強の回答者が「中高生のニーズがある」と感じているが、その約7割が彼らの居場所に何ら

かの不足を感じていた。中高生の気分や感情、生活面のQOLについて気になる点として「時間を持て余している」ことを半数以上が感じており、「つまらなそう」4割強、「デジタルゲームばかりしている」4割という結果であった。ただ一般生活においても「デジタルゲーム」に夢中になる子どもは多く、必要なコミュニケーションが希薄になったり優先すべきことが疎かになっているのかもしれない。自由記述から要因を抽出すると、「男子の遊び用具がない」「小児用のベッドで閉塞感」「就学年齢の学習室、談話室が必要」「周囲が乳幼児ばかりでリラックスする場がなく自室に閉じこもっている」「同年代の子どもがいない」などの複合的な環境要素が見られた。一方、「自信がなさそう」「不安そう」「元気がない」などは1割弱で、スタッフによるケアが奏功していると思われる。入院生活の主たる課題は病気を治すことであり入院期間が短期であれば、「退屈」していることへのケアは比較的優先順位が低いと考えられるが、中長期というケース課題であれば、病気であっても主体的にエネルギーを注ぎ、効力を獲得できるような支援や社会生活復帰に向けた環境整備が求められるだろう。

以上、入院生活を送る子どもたちの環境について、スタッフ体制、空間、時間（期間）、という要素に分けて把握を試みた。はじめに記したように、子どものQOLを向上するには、①身体的健康と同時に、②情緒的ウェル・ビーイング、③自尊感情、④家族、⑤友達、⑥学校といった各項の充足が求められており、その充足には医療スタッフや家族や友人とのかかわりや信頼関係、また病気を主体的に治すという子ども自身の行為や気持ち、大きく寄与すると考える。その上で個々の関係性を生み出すきっかけや、補完するツールとして病棟内の「楽しい」イベントやプログラムが一定の役割を果たしていると思われる。また、アセスメントで医師が語った「医療という行為は、どうしても痛みを伴う。身体的にも、心にも、魂にも。だからそこへのケアとしてアメニティを充実していく必要性を感じる」という言葉から、「行事やプログラム」が「痛み」への補償として期待されている可能性

を感じつつ、次項「病棟内の行事・プログラムに関するニーズ」について見ていきたい。

子ども対象の行事は9割が「ある」と答え、実施回数は半数以上の病棟で年1回から4回行われ、季節行事ではクリスマスと七夕が最も多く、日常的にはお誕生会が行われている施設が多い。一方、「そのほか」に記述された行事をリスト化すると、一般社会で行われている一年中の行事が網羅された。そして「子どもに人気がある行事は？」と尋ねた質問では、クリスマス会、夏まつり、七夕が圧倒的多数で、子どもが好きなイベントである可能性も高いが、実施件数からは当然の結果とも言えるし、施設全体に楽しい空気が漂うことが子どもたちへのインパクトの強さを生み出し「人気がある」のかもしれない。また、この質問に関し複数の回答者から「一般化できない、子どもはみな異なる」などの指摘があり、子ども一人ひとりに対するケアが徹底されているのだと感じられた。

この子どもの個性というテーマは、次の「行事への子どもの参画」とも関連してくると思われる。行事への参画が「ある」と回答したのは7割で、「ない・わからない」と回答した理由として、“急性期や新生児、重心対象のため病院スタッフが企画・運営している”など、入院生活をしている子どものQOLといっても、内容や質に求められることはたいへん幅広いと思われる。(p20)

行事への病院スタッフとしてのニーズを尋ねたところ、1/3が「要望がある」という結果であった。行事への要望について自由記述をコード化し分類すると、不足項目として「頻度」「人的資源」「経済」「時間」「プログラム」「組織的運営」など一般的課題が挙げられておりこれらの根本的な解決には、経済的な裏付けと制度の充実が必要だと思われる。ほかに小児病棟固有の困難課題が40件以上挙げられた。整理すると①「感染リスク・隔離」は、集団活動やコミュニティへの参画が困難。②「年齢層の広さ・人数の変動・病態の予測がつかない」は、プログラムの適性と計画的なアプローチが困難。③「付き添い家族も参加できる」「兄弟のケア」など、病児だけでなく

子どもの属する家族へのケアも必要だと認識されているが、実施は困難であると記されている。これらは「入院病児」の共通課題であると思われ、課題への解決策は医療スタッフのニーズを満たし、入院病児のQOL向上に寄与するものと考えられる。(p21)

こうしたニーズについて、例えばクリニクラウン(p108-16)やホスピタルクラウンは個室病室をリピートして訪れるプログラムであり、京都のボランティアグループにここトマト(p108-6)は多様なソフトを持つボランティアをコーディネートし、プレイルームで日常的に提供する仕組みで成果を上げている。また、「ホットアートプレゼント」の評価(pp37-100)を見ると、保護者や兄弟も含め幅広い年齢層を対象とし、会場イベントと共に易感染児のために個室訪問ができることなどが汎用性の高いプログラムとして施設から評価を得ていることが、調査ニーズの結果と一致していることが分かる。こうした外部ソフトの活用を検討することも選択肢の一つと思われる。

次に小児病棟や活動スペースにおいて日常的に実施しているプログラムを尋ねた。日常的に遊びや体験プログラムがあるという回答は6割で、内容は絵本の読み聞かせ、室内での遊び、おもちゃで遊ぶ、工作や絵を描く、学習やゲーム等は、ベッドサイドでもプレイルームでも多く実施されている。また実施回答者数の1/2程度が「急性期に欠かせない」とし、実施をリードする人は遊び系は「看護師」「保育士」が多く、学習系は「教員」「学生」が多かった。参加する子どもたちの様子は「満足そう」7割、「積極的に参加していた」6割、「スタッフに話しかけた」4割、「もっとやりたかった」4割弱などプラス評価の一方で、「興味なさそう」「不機嫌さが増した」「笑顔が少ない」「戸惑っている」「退屈そう」等の記述もある。知らない保育士が関わることへの抵抗感や、母親不在に泣く、年齢の幅広さ・性格や病状から全員が楽しめない等の指摘があり、子ども自身「楽しめない」状況がミスマッチが3割程度生じ、改善の余地があると思われる。

日常的なプログラムを実施していない理由は、1～2

週間という短期の入院期間と子どもの病態と現状体制下での実施は不要とする「急性期のため必要ない」は113人、「医療で精一杯」101人、「病状が重く困難」30人、「あまり必要ない」25人という選択は、優先順位が低いか不要とも思われる。対して、「担当者がいない」「児のサポートがいない」「コーディネーターがいない」「経費がない」「スペースが無い」「リソース・情報がない」といった環境や条件の不足を選択した589件からは、条件が整えば「実施したい」という意向が伝わる。こうしたニーズについて、このプロジェクトでは「タイプB」のプログラムとして5つの施設ニーズに応じながら実施し、今後の継続実施も決まっているところが多い(pp37-47)。

次に、病児の心理的状態・情緒面のQOLについて改善を感じるスタッフは6割であった。467人の記述で最も多いのが「時間・業務に追われて忙しく、ゆっくり子どもや付き添いの家族の相手ができないこと」で、また、129人が子どもが「泣いている、怒りっぽい、不安そう、たいくつそう、寂しそう、沈んでいる」など気になる子どものようすを書ける。原因としては、治療のためにベッドから離れられない、長期入院、親や兄弟や友達との面会が制限されていたり少ない、ターミナルケアが必要など病状が重症、混合病床、子どもが治療や入院について知識や理解を得られる説明が不十分、スタッフ間のコミュニケーション不足などが多く、他には「家族との関係」「あそびのニーズ」「施設環境」「専門職としてのスキルアップ」などが挙げられていた。

スタッフ体制に関するニーズについては、スタッフの不足を常を感じているのは4割強で、必要とする役割は、子どもの遊び相手、家族支援、子どもの話し相手であった。病児と家族関係に関するニーズについては9割弱の人が「改善」を感じ、「付き添う親への支援」を8割弱が感じている。子ども同士の関係に関するニーズは、「改善できたら」と感じている人は1/4であった(p26)。

病児と医療スタッフの関係に関するニーズについて「改善できたら」と3割強が求め、課題点は、若いナースはもっと子どもに寄り添い接したいと感じ、経験豊富なナ

ースは子どもとの距離感にプロとしての自覚を求め、共に児への深い愛情を感じる。こうした状況を改善するための方策を考え、研修等の時間を確保することが困難な状況が小児病棟の課題と思われた。最後に病院外部からの支援を不要とするのはわずか1割強で、支援を求める内容は491件が記述されていた。整理されたテーマは三つで、①「子どもに対して」②「家族・付添いに対して」、③「施設・スタッフに対して」で、スタッフの体制は余力がなく、子どもたちへのかかわりをもっと豊かにしたいというジレンマが鮮明であった。

外部支援の1ケース「ホットとアートプレゼント」に関する評価は、病児のQOL向上に有効と感じたのは半数強で「詳しい情報がほしい」4割弱、病院の条件が困難3割弱、「ぜひ実施したい」は90病棟であった。その他、このプログラムに心配な点は「急性期で人数が変動・病態の予測不可・費用対効果・内部調整」などが挙げられた。実施するとしてクリアすべき課題は、責任者の理解と許可、スケジュール調整、スタッフの理解調整であった。

(ホットとアートプレゼント詳細は <http://hotart-present.jp/>)

まとめ

医療領域へのNPOからの調査であったが、相当量の設問に個々の実情を客観的に記述していただき、その総体から日本の小児医療現場の厳しさが描かれたと感じる。これらの課題解決には、根本的に看護師、保育士、CLS等の増員が不可欠であり、スタッフが必要とする外部支援ニーズは多様で高いこともわかった。これまでの体験から外部支援を実現するにはコーディネートの仕組みを施設内と外部共に整備しなくてはならない。尚、以上諸課題は社会課題であり、医療現場だけでは解決不能と思われる。この状況に目を閉じるなら「入院病児のQOL向上は諦め、泣いていても寂しそうにしていなくても退院するまで我慢してもらうしかない」と、言っても過言ではない。NPOは第三者として、小児病棟支援活動を継続し、さらにこの活動を広める必要を改めて確認した。今後も医療機関との信頼関係・協力関係を築きながら、社会にこの実情を伝えていかななくてはならないと思う。(稲垣)

参考文献

1	長期入院病児の心理と教育的援助（院内学級のフィールドワーク）（2009）	谷口明子
2	第34回日本看護学会論文集—小児看護—（2004）	（社）日本看護協会
3	プレイセラピー—こどもの病院&教育環境（1998）	野村 みどり
4	チャイルド・ライフの世界—こどもが主役の医療を求めて（2000）	藤井 あけみ
5	病気になってもいっぱい遊びたい—小児病棟に新しい風を！遊びのボランティア17年（2008）	坂上 和子
6	egao—Nicotoma News and Report にこにこ通信100号記念誌（2007）	にこにこトマト
7	病院で子どもが輝いた日—ひろがれ！入院児保育（1995）	斉藤 淑子
8	「気になる」からはじめる臨床保育（2005）	土谷みち子・太田光洋
9	病気の子どもの気持ち—小児がん経験者のアンケートから—（2001）	（財）がんの子供を守る会 Fellow Tomorrow 編集委員会
10	子どものがん—病気の知識と療養の手引—（2008）	（財）がんの子供を守る会
11	QOL—その概念から応用まで（1996）	グッゲンムース・ホルツマン他
12	日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか—児童精神科医の現場報告（2009）	古荘純一
13	QOL 評価学—測定、解析、解釈のすべて（2005）	ピーター・M・フェイヤーズ、デビッド・マッキン
14	臨床のためのQOL 評価ハンドブック（2001）	池上 直己他編
15	阪神・淡路大震災と子どもの心身—災害・トラウマ・ストレス（1999）	服部祥子+山田富美子（編）
16	「こども時間」を届ける臨床道化師—瞬間を生きる子どもたち（2010）	塚原成幸
17	医療における子どもの人権（2007）	「医療における子どもの人権を考えるシンポジウム」 実行委員会
18	医療保育—ぜひ知っておきたい小児科知識（2007）	梶谷 喬、寺田 喜平、小河 晶子
19	遊戯療法と子どもの心的世界（2002）	弘中 正美
20	幼児期と社会 1（1977）	E. H. エリクソン
21	教育と医学 第54巻5号（2006）	慶應義塾大学出版会
22	遊戯療法の世界—子どもの内的世界を読む（1982）	東山 紘久
23	医者が泣くということ（2007）	細谷 亮太
24	「死」を子どもに教える（2005）	宇都宮 直子
25	ユーモアは老いと死の妙薬（1995）	アルフォンス・デーケン
26	コミュニティを問いなおす—つながり・都市・日本社会の未来（2009）	広井 良典
27	新ホスピス宣言—スピリチュアルケアをめぐる（2006）	山崎 章郎
28	調査されるという迷惑—フィールドに出る前に読んでおく本（2008）	宮本 常一
29	基本からわかる看護統計学入門（2008）	大木 秀一
30	いざ、倫理審査委員会へ（臨床家のための臨床研究デザイン塾テキスト）（2008）	尾藤 誠司
31	リサーチ・クエスチョンの作り方（臨床家のための臨床研究デザイン塾テキスト）（2008）	福原 俊一
32	質的データ分析法—原理・方法・実践（2008）	佐藤 郁哉

IV

資 料

「入院病児QOL向上に関する、病棟ニーズの調査」アンケート回答用紙【P-1】

(本資料では、アンケート調査の目的・概要を記した依頼「扉頁」「研究体制」「p-4」「ホットアートプレゼントの実績」は割愛した)

平成22年度 独立行政法人福祉医療機構「先進的・独創的活動支援事業助成金」病児QOL向上・病院支援コーディネート事業 HOTもっとプレゼント2010 ver.2010.9.1			000	00	00
■回答方法：選択肢は最も近い選択肢の○を黒く塗りつぶし、空欄は記入してください。					
①	施設名： (氏名：)				
②	あなたの職種： ○ 医師 ○ 看護師 ○ 保育士 ○ 相談員 ○ その他				
	職名： []		性別： ○ 女性 ○ 男性		
③	あなたが小児に直接関わる病棟名 と 関わる科名（複数ある場合は「主な病棟／科名＋他いくつ」と表記）				
	病棟名：		科名：		
④	前問③の「病棟」の概要について伺います。（数値は合計／週5日以上常勤者を基本として曖昧な場合は「約〇〇」と記入）				
	病棟の数： 病棟 / ベッド数（合計）： 床 / 病棟内で児に関わるボランティア： 人				
	医 師： 人 / 看護師： 人 / 保育士： 人				
	チャイルドライフスペシャリスト： 人 / ソーシャルワーカー・相談員： 人				
	学校の先生・教師等： 人（週 日） / その他の児のケア・ワーカー： 人				
⑤	あなたが関わっている病児の年齢層は？ ■病児は主に： ○ 急性期 ○ 慢性期 ○ 両方				
	○ 新生児 ○ 乳児 ○ 幼児 ○ 小学生 ○ 中学生 ○ 高校生（以上含む）				
⑥	小児病棟フロア内に、病児や家族が生活場で利用できる（遊ぶ・学習・交流など）できるスペースがありますか				
	○ 「ある」 ○ 「ない」→（設問⑨に進む）				
⑦	設問⑥が「ある」場合、それはどんなスペースですか （あるもの全ての○印を黒く塗りつぶしてください）				
	○ プレイルーム …… ○ 30㎡未満 ○ 30㎡以上 ○ 広さはよくわからない				
	○ 多目的室 ○ 談話室 ○ 食堂 ○ ロビー ○ 空いている病室				
	○ その他（ ）				
	○ 特別支援学級： ○ 病棟内 ○ 病棟外 ○ 訪問型 ○ その他 ○ 小学校 ○ 中学校 ○ 高校				
	○ 特別支援学校： ○ 病院敷地内 ○ 病院と隣接 ○ 訪問型 ○ その他 ○ 小学校 ○ 中学校 ○ 高校				
	どのように（時間帯・内容など）利用していますか。				
	対象児が乳幼児（親子）の場合				
	対象児が就学年齢児の場合				
⑧	設問⑥が「ある」場合、中高生の方々が自由時間を楽しんだり、交流できるスペースについて伺います。				
	○ 中高生のニーズはある／スペースは→ ○ 充分ある ○ まあまあある ○ あまりない ○ ない				
	○ 中高生のニーズがない				
⑨	スペースの有無にかかわらず、中高生の気分や感情、生活面のQOLで、現在、気になることがありますか。				
	該当するものすべてに○印をつけてください。				
	○ 不安そう ○ 元気がない ○ つまらなさそう ○ 気分の浮き沈みがある ○ 自信がなさそう				
	○ 気持ちを話す相手がいない ○ 時間を持て余している ○ 参加したがない ○ 勉強の遅れを気にしている				
	○ コミュニケーションが難しい ○ 何を考えているのか分からない ○ デジタルゲームばかりしている				
	○ 友だちとの関係 ○ 家族との関係 ○ その他（ ）				
	○ ケアに難しさを感じるのは男子の場合が多い ○ ケアに難しさを感じるのは女子の場合が多い				

「入院病児 QOL 向上に関する、病棟ニーズの調査」アンケート用紙【P-2】

平成22年度 独立行政法人福祉医療機構「先進的・独創的活動支援事業助成金」病児QOL向上・病院支援コーディネート事業
HOT もっとプレゼント 2010 ver.2010.9.1

000 00 00

■回答方法：選択肢は最も近い選択肢の○を黒く塗りつぶし、空欄は記入してください。

⑩ 対象が子どもの、病院での行事はありますか。

○「ある」 ○「ない」→（設問⑬に進む）

「ある」場合 …… おおまかな実施回数 回／年

どんな行事ですか：記憶している全てに○をつけてください。

【季節行事】 ○ 書き初め ○ お花見 ○ 七夕 ○ 花火大会 ○ 盆踊り ○ 収穫祭 ○ クリスマス
【普段の行事・レクリエーション】 ○ お誕生日会 ○ スポーツ大会 ○ ゲーム大会
○ その他（ ）

⑪ 実施した行事で、人気がある（あった）行事は何ですか。

⑫ 子どもたちが、行事を自分たちで計画したり、スタッフと一緒につくったりしたことがありましたらそれはどのようなことが教えてください。

⑬ 病院スタッフとして行事についての要望がありますか

○ ある ○ ない ○ わからない

「ある」場合は具体的に書いてください。

⑭ 小児病棟や他のスペースにおいて、子どもの病院生活が豊かになるために、上記以外で日常的に実施している遊びや体験プログラムなどがありますか

○ ある（下記の表に記入） ○ ない →（次頁⑮に進む） ○ わからない →（次頁⑮に進む）

⑮ 小児病棟や他のスペースにおいて日常的に実施していることについて伺います。

実施場所／No.を記入 ベッドサイド・病室：1 プレイルーム等：2 両方で実施：3	分かるものは 実施頻度を 記入してくだ さい	① 看護師	② 保育士	③ 教員	④ 病棟所属 ボランティア	⑤ 病棟外 ボランティア	⑥ 学生	⑦ つきそいの 家族	⑧ 親の会	⑨ プロの パフォーマー	⑩ 一人で	⑪ 該当者を 記入！ （ ）	急性期の病児のQOL 向上に欠かせない あなたが感じるものを 塗りつぶして下さい。
日常的に実施している内容		実施をリードする人・関わる人に該当する○を選んで、黒く塗りつぶしてください。（例「テレビを観る」）											
〔例〕 テレビを観る	3 週4日	○	●	○	○	●	○	●	○	○	●	○	●
a. 絵本のよみかせ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
b. 紙しばい		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
c. 室内でのあそび		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
d. おもちゃで遊ぶ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
e. 工作や絵を描く		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
f. うたを歌う		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
g. 人形劇鑑賞		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
h. 生の音楽鑑賞		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
i. テレビ・デジタルゲーム		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
j. 外出・散歩など		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
k. スポーツ		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
l. ビデオ・音楽鑑賞		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
m. 勉強・学習		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
n. パソコン		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
o. その他（具体的に） （ ）		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

2 ページ

「HOT もっとプレゼント2010」アンケート用紙【子ども用】



子



【6】メッセージでも、イラストでもなんでもOKです。自由に書いてください。

【7】もし、HOT もっとプレゼントを、好きな時にできるとしたら、あなたは、どのくらいやってほしいですか？

① 毎週1回 ② 毎月1回 ③ 春と夏と秋と冬に1回

④ 1年に2回 ⑤ 1年に1回 ⑥ そのほか()

アンケートにご協力ありがとうございました。
今日は、みなさんとお会いできて、とてもうれしかったです！



HOT もっと プレゼント

♪ アンケートのお願い ♪

今日は、HOT もっとプレゼントに参加していただき、
ありがとうございました。

私たちは、病院にいる子どもたちに楽しい時間をすごしてもらおうと、
病院のスタッフの皆さんをはじめ、大勢の人たちに協力をお願いして、
今年も、HOT もっとプレゼントを日本全国の病院で行う予定です。

このアンケートは、
みなさんがこの公演をどのように感じたのか教えてもらい、
HOT もっとプレゼントをどんどん楽しくして、
もっと多くの子どもたちに届けるために行うものです。

自分の名前は書かなくてよいので、感じたままを教えてください。
ご協力お願いします。



HOT もっとプレゼント推進プロジェクト 仲間一同





HOT もっと プレゼント

○ 答えたい問いにだけ答えてください。
答えたくない問いには書かなくていいです。

★「公演」とは、みんなで見る、マジックや人形劇や音楽など、のことです。

【1】今日の「公演」は、どうでしたか？

● ひとつえらんで、まるをつけてください。

① すごく、たのしかった！ → → ② たのしかった → → ③ ふつう → → ④ あまりたのしくなかった → → ⑤ つまらなかった

● なんてそう思いましたか？ 自由に書いてください。

【2】公演を見る前と後の、からだの具合や気持ちをおしえてください。

● 見る前は？

① とてもよかった → → ② まあまあよかった → →

③ いつもとおなじ → → ④ あまりよくなかった

● 見た後は？

① とてもいい → → ② まあまあいい → →

③ いつもとおなじ → → ④ あまりよくない

● 公演を見たら、つかれましたか？

① とてもつかれた → → ② すこしつかれた → → ③ つかれてない

【3】これからもいろいろな公演を見たいですか？

① 見たい (見たいもの:)

② 見たくない ③ どちらでもいい

【4】子どもたちが、病院でこういうパフォーマンスを見られることについてどう思いますか。書きたい人だけ、書いてください。

【5】あなたのことをおしえてください。

■ 年齢は？ 才 (男子 ・ 女子)




裏があります。→ → →

平成 22 年度 独立行政法人福祉医療機構「先進的・独創的活動支援事業助成金」

病児 QOL 向上・病院支援コーディネート事業

— HOT もっとプレゼント 2010 実施 報告書 —

2010 年度版

発行 2011 年 3 月

特定非営利活動法人 子ども NPO・子ども劇場全国センター

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-29-5 グランドメゾン新宿東 902 号

TEL:03-5369-2811 FAX:03-5369-2812

<http://hotart-present.jp/>

e-mail:inagaki@kodomo-npo.org

URL:kodomo-npo.org

不許複製

